

目次

凡例	2
序論—問題意識の概要と本論文の主題	3
第1章 命題	
1-1 命題—先行研究における命題概念の理解について	6
1-2 知覚的感受による命題について	13
1-3 現象と実在のはざまから	17
1-4 想像的感受による命題について—実在しないものたちの経験	21
第2章 命題にもとづく知覚論	
2-1 「理論負荷性」という概念における「理論」について	24
2-2 知覚のための手がかり—理論としての命題	26
2-3 命題にもとづく知覚論と理論負荷性	27
2-4 抽象化されたものとしての知覚	29
第3章 二つの知覚論の関係性について—命題にもとづく知覚論と象徴的関連付け	
3-1 二つの知覚様態—因果的効果と現前的直接性	32
3-2 象徴的関連付け	35
3-3 二つの知覚論の共通点	40
3-4 二つの知覚論の相違点	42
3-5 二つの知覚論の関係性について	44
第4章 二つの知覚論の統合的解釈にむけて	
4-1 同時的世界について	47
4-2 緊張の場所と象徴的関連付け	50
4-3 緊張の場所と命題	56
4-4 意識的知覚について	58
結論にかえて—残された課題	64
主要参考文献一覧	65

凡例

引用文献については、[記号 頁数]のように示す。翻訳も大いに利用させていただいたが、地の文との兼ね合いなどにより、字句を変更した箇所もある。訳者の方々に感謝したい。引用文中の傍点は原文でイタリック表記された箇所を、〈 〉は原文大文字で表記された箇所を、……は引用者による省略を示す。

S: Whitehead, A.N., *Symbolism —It's Meaning and Effect*, Fordham University Press, 1955. (『理性の機能・象徴作用』市井三郎他訳、松籟社、1981年)

PR: Whitehead, A.N., *Process and Reality; An Essay in Cosmology*, Corrected Edition, Ed. by Griffin David Ray and Sherburne Donald W., The Free Press, 1978. (『過程と実在(上)』山本誠作訳、松籟社、1984年、
『過程と実在(下)』山本誠作訳、松籟社、1985年)

AI: Whitehead, A.N., *Adventures of Ideas*, The Free Press, 1967. (『観念の冒険』山本誠作他訳、松籟社、1982年。)

MT: Whitehead, A.N., *Modes of Thought*, The Free Press, 1968. (『思考の諸様態』藤川吉美他訳、松籟社、1980年)

Kraus: Kraus, Elizabeth M., *The Metaphysics of Experience: A Companion to Whitehead's Process and Reality*, Fordham University Press, 1998.

PD: Hanson, N.R., *Perception and Discovery*, Freeman, Cooper & company, 1969. (『知覚と発見』上・下、野家啓一・渡辺博訳、紀伊國屋書店、1982年)

序論—問題意識の概要と本論文の主題

A.N.ホワイトヘッド(1861-1947)の哲学は難解である。とりわけ、彼の主著である『過程と实在』には、「現実的実質」(actual entity)、「永遠的客体」(eternal object)、「抱握」(prehension)など、他の哲学書ではお目にかからない多数の新奇な用語が散りばめられており、圧倒的な近寄りがたさを感じさせる。そのうえ、具体例の少ないその記述を理解しようとするのは、格闘と言ってよいほどに骨が折れる。だが、それでもどうにかして彼の哲学のなかに分け入って、その要諦を一言で言いあらわせと求められるならば、次のように言えるかもしれない。「生きるということは、何かとかかわり合うことである」。

大上段にかまえて述べたわりには、この言明はさほど特別なことを言っているようには見えない。というのも、われわれは、物を食べたり、花の匂いをかいだり、人と会話をしたりする。あるいは、音楽を聴いたり、犬をなでたり、映画を見たりする。何かを好きになり、誰かに恋をし、何かを願い、何かを祈る。つまり、何かをするときには、われわれはつねに必ず何かとかかわっている。ことさら声高に叫ばなくとも、われわれはごく日常的に何かとかかわり合っている。したがって、何かとかかわり合うことは、生きることについての特別な特徴ではないように思えてしまう。しかしながら、何かとかかわり合っていないければ、われわれは生きていくことができないことも事実だ。物を食べなければ死んでしまうだろう。光がなければ見ることはできないだろう。重力がなければ地に足をつけて歩くこともできない。だから、われわれは、あらゆるものとかわり合うことによって始めて生きることができるのである。こうして、生きるということは、何かとかかわり合うことなのである。

以上のように、ホワイトヘッドは何かとの関係性を重視する。彼の形而上学的体系が描きだす世界では、存在するものは、それ以外の他のあらゆるものと関係することによって存立している。どんなに些末なものであれ、何かが存在するためには、他の何かとの関係性がなければならぬ。それは、われわれが、光なしには見ることはできないことと同様である。光との関係性がなければ、視覚は存在しえない。同じように、何かとの関係性がなければ、どんなものも存在することができない。だから、彼の体系において、独立自存する存在者というものはいない。あるものが存在するためには他のなにかとの関係性が必ず必要になる。その結果、そのあいだに関係が見出される個別の項よりも、その関係性そのものが先行し、重要視されることになる。個別の項のあいだにいかなる関係が見出されるかではなく、もろもろの関係性からいかにして個別的なものが存在するようになるか、ということが問われるのである。

多数の蘊を集め、それらを強く束ねると、強度のある棒になる。同様に、もろもろの関係性を集めて、強く束ねると、存在になる。ホワイトヘッドはこのように考える。強く束ねるところか、さまざまな関係性を凝縮すると言ってもいいかもしれない。もろもろの関係性は、凝縮されて一つの塊となる。この塊が関係性からできた存在である。ただ、できあがったこの塊そのものには彼はさほど注目しない。つねに注目されるのは、生み出されたこの塊が、それ以外のものと持ちうる新たな関係性のほうだ。そこで、この新たに見出されたさまざまな関係性を再び集め、強く束ねる。するとまた塊ができる…。ホワイトヘッドによれば、こうした運動の繰り返しがこの世界のあり方だということになる。ここで、誰が関係性を束ねるのかとか、どうやって関係性を束ねるのかななどの疑問が浮かぶかもしれない。しかし、それらの疑問についてはひとまずおいておこう。ホワイトヘッドは、もろもろの関係性を集め、それらを束ね、強度のある塊(存在)を作りだすまでの一連の運動を「プロセス」(process)と呼ぶ。この運動は、先にできた存在との関係性から「生成」(becoming)する。多様な関係性を束ねるプロセスの生成によって、一つの「实在」(reality)が生まれる。『過程と实在』というタイトルが表現しているのはこのことだ。

ホワイトヘッドによれば、「わたし」というものも、このプロセスから生み出される塊ということに

なる。プロセスにおいてさまざまな関係性から「わたし」がどのようにして実在するに至るのか。われわれは、「今のわたしがあるのは、あの経験があるからだ」などごく自然に言う。したがって、ホワイトヘッドの哲学を持ち出すまでもなく、われわれは経験が「わたし」を作っている。では、ホワイトヘッドが自らの哲学において何をしているのかと言えば、彼は、経験が「わたし」を作るといふ事実を精巧に解釈するのである。

「わたし」はさまざまな出来事を経験して成立している。だから、「わたし」を作るのは、経験である。たとえば、言葉を見聞きし、書いて練習したり、作文をしたり、文法を学んだりすることで、われわれは一つの言語に習熟する。また、材料の下ごしらえをしたり、包丁の使い方（切る、削ぐ、叩く）を身につけたり、調理や味付けの方法や加減を覚えたりすることによって、料理をすることができるようになる。もろもろの出来事を経験することから、また新しい経験を生み出すものとして「わたし」はある。したがって、プロセスとはもろもろの出来事を経験し、一つの新たな経験を生み出すことでもあるのだ。そして、何かとかかわり合うということは、何かを経験することと言いかえることもできるだろう。

ホワイトヘッドの哲学が持つ特徴の一つは、「わたし」を人間に限らずあらゆる存在者に拡張するところだ。素粒子からこの宇宙全体にいたるまで、すべての存在者がプロセスを通じてあると言うのだ。そのため、どのような存在者も出来事を「経験する」と言われる。哲学では通例この「わたし」を主体と呼ぶ。ホワイトヘッドも「わたし」を主体（ただし、ホワイトヘッドの主体は、この世界にあるものすべてに適用される。）と呼ぶ。したがって、ホワイトヘッドの問いは、次のように言い換えられる。プロセスから主体はいかにして実在するに至るのか。

藁を集めて、それらを束ね、棒を作ることはさほど難しくない。しかしながら、主体は、そんなに簡単にできあがるようなものではない。「わたし」が人間である場合のことを考えてみればわかる。まず、人間には身体がある。また、人間は心を持ち、怒りや悲しみ、喜びといった感情がある。さまざまな思考をめぐらせる意識も持っている。身体と心は、異なる。意識もそれらとは区別される。このように性質の異なる諸特徴をそなえた一人の人間が作られるには、複雑なプロセスを経なければならないことが予想されるだろう。藁を束ねて、棒を作ることとはわけがちがう。「わたし」を作ることは、さまざまな色の糸を精巧に織り上げて複雑な図柄を持つ織物を作るようなものかもしれない。「わたし」という多様な特徴を備えた存在者をさまざまな関係性から織り上げることは、かなり複雑なプロセスを経なければならない。『過程と実在』が難解なのは、ホワイトヘッドの哲学が難解だからではない。この難しさは、わたしを含むさまざまな主体のあり方が多様で複雑だからだ。

プロセスを通じてさまざまな関係性から実在が生み出される。その結果、多くの実在からなるわれわれの現実世界がある。この世界にあるものはすべて実在するものであるし、実在するものからなる世界をわれわれはふつう現実と言う。この現実世界にある実在が持ちうる関係性から、それらの関係性を束ねるプロセスを通じていかにして一つの主体ができるのか。これが『過程と実在』の扱う核心的問題なのである。

一つの主体が生み出されるとき、ホワイトヘッドは、どんな主体を生み出すプロセスであれ、そのプロセスがこの現実世界に実在するすべてのものとの関係性からできていると考える。つまり、主体は現実世界にあるすべての実在とかかわり合っているということだ。「わたし」がすべての実在とかかわり合っているなどと言うと、そんなはずはないと言いたくなるかもしれない。なぜなら、現に今、「わたし」がお話しているのは、鈴木さんだけでも、斎藤さんはここにはいない。斎藤さんとはかかわりがない。あるいは、宇宙のどこかにある星雲と「わたし」はかかわりがないし、またどうやってもかかわりようがないではないか。たしかに「わたし」は斎藤さんや星雲とは、積極的にはかかわり合っていない

い。だが、「わたし」は斎藤さんや星雲と「かかわり合わない」という仕方で、かかわっているのだ。つまり、積極的にかかわり合っているわけではないのだが、積極的なかかわり合いの背景として斎藤さんや星雲は退く関係性があるということだ。すべての実在と積極的にかかわり合うことは、何かとかかわり合っているということすら言えないような状態である。何かと積極的にかかわり合うには、そうではない背景がかならずなければならない。このような意味で、ホワイトヘッドは、消極的なかかわり合いがあることを認める。そして、積極的なかかわり合いと消極的なかかわり合いをすべて含めれば、「わたし」は現実世界のすべての実在とかかわり合っているとと言えるだろう。

こうして、ある主体は、プロセスをつうじて現実世界にあるあらゆる存在者や出来事との関係性から生まれてくる。このプロセスにおいて、もろもろの関係性や出来事が一つの経験（実在）へと収斂し、結実したこの一つの経験はまた他のプロセスの生成へと投げ出される。この多から一へ、また一から多へのダイナミックな生成の中で存在は、さまざまな関係性の結節点のように現れるのだ¹。

こうした多から一へ、一から多へ変転するプロセスの「発生論的分析」(genetic analysis)において、ホワイトヘッドの語る「命題」(proposition)が現れる。ホワイトヘッド的命題とは、さまざまな関係性を織り上げることによってできるタペストリーのようなものだ。そして、このタペストリーに描かれる図柄が、この現実世界にありうるモノを示してくれる。さまざまな関係性を織りなして作られるこのタペストリーの図柄の示すモノは、コップや鈴木さん、空や海や太陽、数千光年離れた星雲といった、われわれにとっての外的事物に限らない。感情、感覚、思考、記憶、イメージなどのわれわれの内的な経験も含まれる。この世界に何があり、また何がないかを、実在との関係性から織りなす限り、命題はおよそ可能なものを何でも描き出す。

命題は、この世界にどのようなモノがありうるかを示す一つの可能性として、プロセスにおいて提示(propose)される。命題が提示された以降、プロセスは、ホワイトヘッドが「経験のより高次の諸相」(The higher phases of experience)と呼ぶさまざまな関係性が錯綜する複雑な段階に入る。そして、このプロセスの最終相では、命題をもとにさらなる関係性の統一が行われる。そして、この統一において「意識」(consciousness)が発生すると言われる。すなわち、命題が意識の発生にも寄与していることがうかがえるのである。

このホワイトヘッド的命題は、論理学における命題以上に含意するところが多いにもかかわらず、国内外を問わず研究者たちによってこれまでその役割が十分に明らかにされてきたとはいえない。むしろ命題という与件の成り立ち、構造、プロセスの諸相において中間的な与件として登場することなど、研究者たちのあいだでもホワイトヘッドの言葉にしたがった共通の理解はある。命題は、もろもろの関係性からそれを織りなすことで、現実世界からさまざまな関係性をさらに引き出そうとする「誘因」(lure)として機能する。またプロセスは命題を関係性から織りなすことで、低次の段階からさらなる相を展開させていく。つまり、プロセスにおける命題の受容をきっかけとして、より複雑で高度な経験が組成され、意識の発生も命題にもとづいて説明されていくことになる。この意味で、特に人間のような高度な有機体の経験を考える場合には、命題概念が極めて重要なものであることは明らかである。しかし、その役割や機能がこれまで十分に研究されてきたかといえば、疑問がある。極端に具体例が少ないホワイトヘッドの一般化された記述において、命題が、プロセスを通じた一つの経験の生起にたいしていかなる寄与をなしているのかが見えづらいということはたしかにある。したがって、従来の研究においては特に命題概念が取り上げられることは非常に少なかった²。また、命題について語られたとしても、ホワ

¹ ホワイトヘッドは、関係の個々の項よりも、関係そのものを重視し、関係そのものが個々の項に先行すると考える。その結果、存在に対する生成の優位が、有機体の哲学における根本的なテーゼとなる。

² 国内の研究論文においては、命題を直接的な研究対象として取り上げている論文は斎藤の論文があるのみである。斎藤暢人「ホワ

イトヘッドの説明や言葉をなぞるだけのものばかりであったことは否めない。

ところで、ホワイトヘッドの形而上学的宇宙論の意義は、科学的知見を取り入れてこの現実世界の事象を記述するとともに、単なる事実には還元できない価値や生の意義、世界の根本的原理を考究する点にある。彼の宇宙論において命題こそが「単なる事実」にとどまらない経験の可能的要素を提示しうる。すなわち、事実にもとづきながらも事実とは異なった新しい経験や価値というものは、プロセスの生成において命題から派生するのである。このことを鑑みれば、命題概念を研究する重要性が理解されるだろう。そして、この点を従来の研究が扱っていないことは問題と言える。したがって、ホワイトヘッド研究におけるこうした空白地帯を埋めようと試みる本稿は、当該研究分野において有意義な寄与をなすものであると考えられる。

さて、以上のような命題概念を考察する手法と本稿の目標とする到達地点を述べよう。まず第1章では、ホワイトヘッドの命題概念がいかなるものかを概観する。第2章では、ホワイトヘッドの命題概念を彼の体系にそった知覚論の文脈に置き、N.R.ハンソンの「理論負荷性」の概念を補助線として「命題にもとづく知覚論」と呼べるものを独自に展開し、その中で命題の役割や機能を明らかにすることを試みる。しかしながら、一方でホワイトヘッドには「象徴的関連付け」(symbolic reference)という知覚論がもともとある。二つの知覚論は両者のそれぞれの方法で、人間のような高度な有機体の知覚経験がいかにして成立するのかを説明する。一つの知覚という事態にたいして、それを説明する二つの理論があるとなると、二つの知覚論の関係性が問題になる。したがって、第3章では象徴的関連付けという知覚論を確認したうえで、命題にもとづく知覚論と象徴的関連付けという二つの知覚論の関係を論じる。最後に第4章では、本稿は象徴的関連付けの中で命題がある役割を果たしている点を考察し、命題をホワイトヘッド自身の知覚論における看過できない要素として、整合的に象徴的関連付けの中に適用することを試みる。また、象徴的関連付けの中に命題を位置付けることによって、命題が二つの知覚論の両方に関与していることを確認し、二つの知覚論を命題にもとづいて統合的に解釈する地歩とする。そして、以上のような手続きを経て、論者が展開する「命題にもとづく知覚論」が象徴的関連付けを補完する知覚論であることを示す。最終的に本稿によって、ホワイトヘッドの形而上学的宇宙論が、高次の有機体である人間の知覚構造を包括的に記述しうることを示す。

以上より、本稿のテーマは、以下のようにまとめることができる。すなわち、多様な関係性からどのようにして知覚経験を有する「わたし」が生まれるのか。このテーマについて、ホワイトヘッドとともに考えていこう。

第1章 命題

1-1 命題とは何か—先行研究における命題概念の理解について

本節ではホワイトヘッド自身による命題についての記述ならびに先行研究にもとづきながら、ホワイトヘッドの命題概念がどのようなものかを明らかにしたい。まずは、命題がどのような文脈で現れるのかを確認しよう。

たとえば、われわれは光がなければ、見ることができない。また、空気がなければ音の振動は伝わらず、聞くことができない。光や空気とかかわらなければ、われわれは見たり、聞いたりする経験をしてはいない。物を食べなければ、われわれは死んでしまう。何かとかかわり合わなければ、われわれは生きてはいけない。同様にいかなるものも、何かとかかわり合わなければ、存在することはできない。し

イトヘッドの命題論」日本ホワイトヘッド・プロセス学会編『プロセス思想』第10号、2002、pp.112-113。海外における論文で、命題を直接的に扱っている論文は、論者の知る限り以下のものだけである。Greenman, Martin A., "A Whiteheadian Analysis of Propositions and Facts", *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol13, No.4, 1953.pp.477-486.

たがって、もろもろの関係性を存在の基底におくホワイトヘッドの形而上学的体系において、存在者は存在するために他のあらゆる存在者とかがわり合っている。存在するものがこの世界に成立するためには、さまざまな関係性を有していなければならない。存在よりも具体的な関係性を先行させ、基底としたとき、もろもろの関係性からある一つの存在者がいかにして生起するのか。これがホワイトヘッドのあつかう問いである。

そこで、ホワイトヘッドは、もろもろの関係性を束ねることで、一つの存在者が生起すると考える。さまざまな関係性から一つの存在を生み出すまでの運動全体を彼はプロセスと呼ぶ。そして、それらの関係性は総じて「抱握」(prehension)と呼ばれる。抱握には二種類ある。何かとの積極的なかがわり合いを「積極的抱握」(positive prehension)と呼ぶのに対し、かがわり合いを持たないという関係性を「消極的抱握」(negative prehension)という。さらに積極的抱握は、特に「感受」(feeling)とも呼ばれる。

われわれは、光とのかかわりを持つことで、本をよむことができる。空気とかかわり合うことで音楽を聞くことができる。このとき、光や空気をわれわれは感じている。この感じ(feeling)は、意識的でなくともよい。本を読んでいるときに、本にあたる光の明暗を気にすることはあるかもしれないが、光については意識してはいない。音楽を聞くときも、音を伝える空気の振動について意識してはいない。しかしながら、ともかく、光や空気とかかわり合うこと、すなわち感じること(経験すること)でわれわれは本を読んだり、音楽を聞いたりする経験を持つ。したがって、何かとかかわり合うことは、経験することでもあるのだ。すると、積極的抱握とは、何かを経験することであると言い換えてもよいだろう。

しかしながら、本や光との積極的なかがわり合いだけでは、本の知覚は成立しない。本を知覚するためには、本に触れる手や本を置いている机、机の上にあるコップや鉛筆、さらに本を読んでいる部屋も同時に必要だからである。本や光以外のものとかかわり合いは明確なものではないが、それらが本を知覚することにたいする背景としてあることはわかる。本を読んでいるときには、たしかに本や光と積極的にかがわり合っている。しかし、積極的にかかわり合うことはないけれども、かがわり合いを持たないという形で成立する背景がなければ、本の知覚はなりたたない。こうした背景をなすものとの関係性が消極的抱握なのである。消極的抱握によって背景をなす要素は、隣の部屋や家人の行動から地球の裏側や一千万年離れた星雲、そして全宇宙にまでおよぶだろう。したがって、何かとの積極的なかがわり合いには、その背景として消極的抱握が必要であり、抱握によって、われわれは全宇宙とかかわり合っているとと言える。

こうして、われわれが何かを経験する実在としてあるためには、現実世界のすべての実在とかかわり合わなければならない。そして、何かとかかわり合うことは、何かを経験することである。どんな事物であれ、あらゆるものが、もろもろの関係性を集め、束ねることで実在するに至る。このようにもろもろの関係性を束ね、一つの実在へ結実するまでがプロセスの一つの単位である。そして、この単位が事物の根本的構成要素とされる「現実的実質」(actual entity)である。プロセスが関係性を集約していく運動を指す言葉であるなら、現実的実質はいわば、さまざまな関係性の束をまとめあげる一つの単位としてのモノを指す言葉である。

ホワイトヘッドは、関係性から成立する実在するものを人間に制限しない。多様な関係性があれば、それに応じて多様な実在が成立しうるからだ。したがって、ホワイトヘッドによれば、電子や素粒子といったどんなに微細なものから、惑星やブラックホール、宇宙全体という事物にいたるまで、万物はプロセスの単位である現実的実質からできている。

以上のような現実的実質は、「主体性」(subjectivity)を持つとされる。主体性とはいわば、自らが何らかの実在するものになることを志向し、諸事物ともろもろのかかわり合いを持ち、それらの関係性を束ねようとする現実的実質のいわば中心的な意志である。この主体性によって、現実的実質はそのプロセ

スにおいてさまざまな関係性を統合していく。そして、それらの関係性が一つの経験を主体へと統合されることを「合生」(concrecence)と言う。現実的実質の合生は、時間の「量子」すなわち時間の最小単位において「一挙に」生じる。それゆえ、現実的実質は実際には分割されてはいない。しかし、理性による分析のためには、一つの現実的実質を「諸相」(phases)に分類しなければならない。つまり、合生の理論はこうした諸相のそれぞれの分析と、それらの相互関係の分析から成り立っている。したがって、主体的にさまざまな諸事物とかかわり合いを持つこと(それと同時にとかかわり合いを持たないこと)、すなわち経験をすることで、一つの実在に至る現実的実質は、その発生論的分析において、いくつかの諸相に分けられる。各々の相の違いは、関係の仕方の違い、すなわち経験の仕方の違いを表す。各々の相で、現実的実質は現実世界にある実在と、それぞれの相における関係性の様式でかかわり合う。そして、現実的実質はそれらの相での関係性を一つの束として収斂させていく。ここからプロセスの諸相において経験される内容を見ていこう。

まずプロセスの原初相では、現実世界は多様なままそのままに経験される。原初相において現実世界は、通常人間が知覚しているような、さまざまな分析や判断によって個々のものが独立し秩序だった世界としては経験されない。すなわち、この相において現実的実質は、マーブル模様のように不定なものたちのうねりが渾然とし、雑然とした状態でしか現実世界を経験しない。とはいえ、このたとえも適切ではない。というのも、マーブル模様には色があり、マーブル模様は「模様」として知覚されてしまっているからだ。したがって、何らの分析や判断もされず、色や形ですら判然としない雑多なものがいわば生の事実として現実的実質に経験されるのが、プロセスの原初相である。この相において、現実世界にある諸事物は限定の可能性を備え、現実的諸実質からなる「結合体」(nexus)としてある。これらのもろもろの結合体は、分析や判断によって明確化されていないいわば生の与件としてある。それらの生の与件を、ともかく何らかのモノがあるという漠たる感じとして現実的実質が受容することが原初相における現実世界の経験様態である。現実世界のうちにあるもろもろの結合体が多としてそのままに現れる相と言ってもよいだろう。プロセスの原初相において、ひとまず現実世界とこのようにかかわることを「物的感受」(physical feeling)と言う。

次にこうした原初相に続く相では、現実世界をある秩序や性質をもって分節するための要素(「永遠的客体」(eternal object))が現実世界のうちに見出される。不定の現実世界というまだ限定的な形式をまとっていないモノたちのうちに、それらのモノたちが示すことが可能な質や形式(=「永遠的客体」)を、現実的実質がとらえることを「概念的感受」(conceptual feeling)と言う。ホワイトヘッドの体系において、生の与件を限定する質や形式としての永遠的客体は、「純粋な可能態」(pure potentiality)としての存在身分を持つ。

たとえば、われわれは赤い色や三角形について考えることができるし、それらを心の中で「見る」こともできる。われわれはいくつかの赤いものや三角形を想像することができる。しかし、その色や形が実在するものとしてあるのは、実在するものがそれらを示す限りにおいてである。したがって、われわれは赤さそのものや、三角形そのものを指し示すことはできない。われわれにできるのは、赤い花やカラーチャートの中の赤、数学の問題における紙面や黒板に描かれた図など、赤い物的存在、三角形の描かれた物的存在を指し示すことだけである。しかし、われわれは花においても、トマトにおいても、カラーチャートにおいても、どのような物的存在においてあれ、「赤さ」がそこに見出されるならば「赤さ」という同じものとして認識している。つまり、これらの質や形はいかなる物的存在においても、同じものとして取り出すことができるものだ。だから、物的存在のどこにそれが生じようと、赤と呼ばれる色は常に「赤さ」という質において同定することが可能であり、紙面上や想像の三角形も一様に三角形として同定できるのである。

こうして、これらの質や形そのものは、さまざまな物的存在からのまったくの抽象物であり、純粋な可能態として見出されると言えるだろう。たしかに、われわれは「赤さ」や「三角形」を認識しそれらについて語るができる。だが、具体的な事物とかかわり合わなければ、これらの質や形はこの世界に現れえない。「赤さ」や「三角形」を認識し、語るができるのは、それらがさまざまな事物から抽象されたものとしてあるからだ。

したがって、もろもろの具体的事物において同定することが可能なものとして現れている質や形は、それがそこに現れていることについていえば、たしかに現実的ではある。しかし、これらの質や形そのものは、さまざまな事物から抽象された要素としてあり、この意味で質や形そのものは現実的なものではない。だから、純粋な可能態は概念的把握の「対象」ではあるが、現実的な対象ではないのだ。また、それ自体において、それは時間の経過とかかわりなく同じ質や形であるという意味で「永遠的」である。それゆえ、ホワイトヘッドは生の与件がまとう質や限定の形式を永遠的客体と呼ぶのである。これらの永遠的客体によって、現実世界は諸事物の「結合体」(nexus)として分節化される可能性を得る。とはいえ、永遠的客体を感受するこの相においても人間が通常知覚しているような世界の姿はまだ経験されてはいない。現実世界ははまだ分節の可能性を有しているにすぎない不定のモノたちのままである。

さらに続く相において、命題が現れる。命題の機能については後に詳しく検討するが、ここではごく簡単にまとめて命題がプロセスにおいてどのように形成されるのかを見よう。

われわれはさまざまな種類の経験をしている。たとえば、五感をつうじた知覚経験、痛みやかゆみなどの感覚経験、喜怒哀楽といったさまざまな感情の経験、数学の問題を解いているときのような思考の経験、昨日食べた夕食についてなどの記憶の想起という経験、空想上の生き物や図形等のイメージ経験、自分が自分の意識していることを知る自己知の経験などが挙げられるだろう。これらの経験は、それぞれが何らかの経験として特定しうる。もろもろの関係性から特定の経験をしている主体が生じるには、この主体が何を経験しているのかを限定しなければならない。ここに命題の役割がある。すなわち命題の中心的な役割は、現実的実質がさまざまな関係性のなかから「何を」経験しうるのかあるいはしえないのかを現実的実質に提示することである。

このような命題を感受する相では、まず分節化の可能性を持つある結合体が端的な指示詞としての「たんなるそれ」(bare it)[PR258]に還元される。不定の現実世界のうちにある何かを何かとして限定するためには、その何かがまず指定されなければならないからだ。たとえば、大勢の人々が渋谷のスクランブル交差点を歩いている。われわれは行きかう人々についていちいちその人が誰かなどと問わない。だから、そこにいるのは、特定の誰かではなく不定の「人々」である群衆だ。しかし、この群衆のなかから特定の誰かを見つけてそれを示すときには、「あれ」とか「それ」という形でこの群衆のなかからある人をピックアップしなければ、その誰かを特定することはできない。これと同様に、現実世界にある不定のモノたちのなかから何かを特定するためには、まずはその何かを「それ」として指示されなければならない。だから、どのような限定の可能性を持つものであれ、ある不定のモノがまず指示詞としての「それ」に還元されるのである。そして、指示詞に還元された結合体は、「論理的主語」(logical subject)と呼ばれる。

つづいて「それ」である論理的な主語が何であるかが限定されなければならない。先ほどの例を続けていけば、不特定の群衆のなかから特定された「あれ」や「それ」が何であるかを示さなければならないということである。つまり、それは「サラリーマン」や「高校生」や「警察官」や「外国人」であるかもしれない。そうした特徴を示すことで、「あれ」や「それ」を「あれはサラリーマンである」や「それは高校生である」というように限定をすることができる。つまり、「あれ」や「それ」を述語づけることによって、それらが何であるか限定する。同じように論理的な主語である「それ」について、述語づ

けがなされる。この論理的な主語と、先に不定のモノたちに見出された質や形式（永遠的客体）が「述語的パターン」(predicative pattern)として統合される。その結果、「それはバラである」のような命題ができる。こうして、結合体と永遠的客体とが統合された与件が命題である。そして、この命題は、プロセスにとって現実世界がどのように経験されるかに関して、「可能的」(potential)なものとしてある。

論理的な主語と述語の、結合体と永遠的客体の共存性(togetherness)は、可能的である。それは、すでに実現されたものとして与えられているのではなく、合生しつつある主体の内では実現可能なものとして提示された共存性である。その永遠的客体が結合体のうちで実際に実現されているか否かは、真なる命題を偽なる命題から区別する付加的な性質ではあるが、そのような命題の本質的性格ではない。[Kraus 95]

論理的な主語と述語的パターン、すなわち結合体と永遠的客体とが共存していると言うのは、二つの与件が統合されて命題が成立していることである。上記の引用が強調するように、命題が提示する内容は、すでに実現された事実ではないことに留意したい。たとえば、「それはバラである」という内容を持つ命題が形成されるとする。この命題が示す内容は、バラのイメージ経験における内容であるかもしれないし、現在の知覚経験の内容かもしれないし、過去に見たバラの記憶の内容であるかもしれない。どのような種類の経験においてこの命題が実現されるかは、プロセスのより後続の相における「判断」(judgment)にゆだねられる。したがって、命題そのものは、いかなる種類の経験であれ、現実的実質がどのような経験の内容を持ちうるかを提示するあくまで可能性でしかない。

たしかに論理的な主語に還元される以前の結合体は、不定の事実である。しかし、この結合体のうちに「バラ」という永遠的客体が先に見出され、命題の述語的パターンとして機能しているとしても、「それはバラである」というこの命題そのものは確定した事実を表現しているのではない。命題が表現する内容は、あくまで現実的実質が経験しうる可能性の一つでしかない。したがって、命題の真偽はこの命題を感受する相では問われない。命題が提示する内容について、プロセスの後続の相において事実である結合体と命題が対照化されることで命題の真偽が決定される。

以上のような命題の可能性は、永遠的客体の純粋な可能態としてのあり方とは異なる。なぜなら、命題の可能態としてのあり方は「混ざりもののある」(impure)ものだからだ。命題は、生の事実である結合体から派生する論理的な主語と永遠的客体が担う述語的パターンとの「混成物」(hybrid) [PR185]である。

たとえば、赤いバラを見ているとき、それがもつ特定の「形状」や「赤さ」を知覚し、「バラ」や「植物」として認識しうることは、「永遠的客体」を経験していることになるだろう。しかし、それを「バラ」として見ることや「赤さ」や「形」は、「それ」という事実との関連において独自のものとなる。つまり、永遠的客体は、他のものではなく「それ」との唯一無二の関係性において、述語的パターンとして「このバラの赤さ」や「あの黒板の三角形の図」として現実化される。こうした命題の混成的構成が、さまざまな質や形式を備えた各々の事物に固有のあり方をもたらす。とはいえ、命題は、プロセスにおいてすでに実現されたものとしてではなく、「それ」としてのみ示される事実（論理的な主語）と述語的パターン（永遠的客体）との可能的な結びつきを提示する(propose)のである。したがって、極端な場合には、そのプロセスにおいてかかわり合う現実世界にはないような論理的な主語と述語的パターンとの結びつきが生じる場合もあるだろう。この命題は、それまでになかった論理的な主語と述語的パターンの結びつきを示すと言う意味で経験に「新しさ」(novelty)をもたらす。そして、この新しさは命題という混成的なあり方でのみ可能なものとして現実的実質に提示される。

この命題の成立によって、渾然とした世界は、秩序や性質によって分節化されたものとして姿を表す。

さらには論理的主語にたいして統合される述語的パターンによっては、その論理的主語をなす元の結合体には含まれなかったような性質や秩序を備えた命題が成立する。こうした命題の成立が何を意味するかといえば、ホワイトヘッドは命題が現実の「半影」(penumbra)[PR185]を提示しようという。半影とは何だろうか。

ポーカーをしていて負けるのは、欲しい手札が来なかったため、役が揃わないからだ。負けると「ああ、クラブの5が来ていたら勝てたのに」と言って悔しがらる。事実としては、「ハートの3が来た」ため手札は揃わなかった。この事実はいかにしても変えることができないため悔しがるとき、「クラブの5が来ていたら」という仮定をしている。「クラブの5が来ていたら、ストレートフラッシュだった」というような具合だ。あるいは「カードのスートにかかわらず、6、7、8、9のランクのいずれかが来ていたら、少なくともワンペアではあった」ということも考えるかもしれない。「ハートの3が来る」という事実をたいして仮定される「クラブの5が来る」や「6(7、8、9)のランクが来る」という内容は、この事実があったうえで仮定される。したがって、「ハートの3が来る」という事態が現に現実世界に現れている事実なら、これらの仮定の内容はその事実の「辺縁」にある半影と言えらる。また、「ハートの3が来る」という事実の真影は、「ハートの3が来ない」という事実の否定だらる。

事実の真影について言えば、たとえば、命題はこのとき、「カエサルはルビコン河を渡らなかつた」とか「ナポレオンはワーテルローの戦いで勝利した」といった形式で提示されるかもしれない。もちろん、これらの命題は事実としては偽である。カエサルがルビコン河を渡河したことでローマの内戦が勃発し、ナポレオンはワーテルローの戦いで敗北を喫しセントヘレナへ流されたのであつた。われわれにとつても論理学者にとつても、以上のような偽なる命題は、それが事実とは異なり、偽であるという意義を持つ以外に、それらから何か有益なものを生み出すことのない、価値のないものに思われらるかもしれない。しかし、ホワイトヘッドは偽なる命題について以下のように言う。

……たいていの論理学者たちは、命題を判断の単なる付属物と見なしている。その結果、偽なる命題は塵芥の山に捨て去られ、無視されてきた。しかし、実在の世界では、命題が真であるということよりも、興味深いということのほうがもつと重要である。真であることが重要なのは、それが興味深さを増加する点にあるのである。[PR 259]

命題は現実にあつた事実と関連を持ちつつも、ありえなかもしれないものと統一され意味づけらることで、新しい価値を実現する。われわれの世界には、何ものによつても改変不能な過去の事実だけがあるのではない。「ナポレオンはワーテルローの戦いで敗北した」という事実の否定を考慮できらるし、「ワーテルローの戦いと関連によつて構成された半影がある」[PR185]のだ。あるいは、次のようなことも考えらる。眠る前にその日の出来事を回想することがある。われわれは出来事にたいして「ああすればよかつた」だとか「こうすべきであつた」と反省する。意識においてわれわれは、現にあつた出来事とは別に「すればよかつたこと」、「すべきであつたこと」を出来事にたいしてとらえている。出来事にもとづきながら「すればよかつたこと」、「すべきであつたこと」は現実とは異なる新たな可能性である。こうした経験をホワイトヘッドは事実の半影と呼び、われわれの経験をかたち作る重要な要素とみなす[PR187]。

こうして、ある確定した事実は、それよりももつと多くの可能性が排除されたことを物語る。たとえば、さいころを振つて三の目が出たら、一であつたり、二であつたり、四でも五でも六でもあつた可能性があつたことになる。したがって、ある事実には必ずその真影として否定(出たさいころの目が三ではないということ)があり、この事実の辺縁に半影(さいころの目が一、二、四、五、六であつたかも

しれないということ)を伴っている。だから、事実の裏にある果てしない選択肢のレパートリーには、選ばれた可能性があったのに選択されなかったものすべてがつまっている。プロセスは、命題が提示するこれらの半影を経験要素として感受する。

そしてホワイトヘッドは、この半影を提示する命題にプロセスにおける可能態としての存在身分を認める。ここから興味深い帰結が引き出される。すなわち、一つの経験の達成を目指すプロセスは、確定されなかった無数の可能性のレパートリーに支えられている。現にある事実にはすべてその否定が考えられる。ホワイトヘッドはそれらの事実の否定である真影と、事実の辺縁をなす半影とがプロセスの目指す経験の達成に寄与しうることを命題という与件をもって説明する。つまり、こうした無数の半影的要素や真影である否定がどのような価値をプロセスにもたらすかに命題概念の重要性がある。ホワイトヘッドは、命題がそこからさらなる経験を引き出す「感じのための誘因」(a lure for feeling)[PR184-185]であることを強調する。命題は「単なる所与に縛りつけられない、感じが生まれるための源泉をなしている」[PR186]のである。したがって、命題はその真偽よりも、それが「興味深い」かどうかがプロセスにとっては重要なのであり、そこからどのような経験がさらに引き出されうかが問題になる。

たとえば、量子力学における多世界解釈は、世界はこの一つだけではなく、無数の分岐する世界がありうるという考え方を示唆する。この考えから「この現実とは別に、もう1つの現実が存在する」という命題ができるとする。SF作家たちは、この命題の真偽については問わない。彼らはこの命題を「興味深い」ものとして受け取り、この興味にもとづいて物語を紡ぐ。すなわち、この現実世界とはまた別の世界の存在を前提として物語が作られる。一見すると荒唐無稽な反実仮想的観念のように見える命題でも、そこからさらなる経験が引き出されうるという点に命題の意義がある。

このように現にそうであった揺るがしがたい過去の事実をもとに、いかにして命題の提示内容がその所与にしばられない自由を発揮するのか。たしかに論理的主語が派生してくる過去の与件である現実世界は、プロセスにとって改変不能な「頑強な事実」(a stubborn fact)である。しかしその一方で、プロセスにおいて心的な働きが高まることで論理的主語と統合される述語的パターンは「新しさの閃き」(the flash of novelty)[PR184]として、頑強な事実にたいして新たな性質や秩序を与えうる。したがって、述語的パターンがそうであったかもしれない可能的要素として論理的主語と結び付けられることによって、命題は単なる事実の反復を提示するものではなくなる。つまり、命題はそれまでにはなかった世界の可能性をプロセスに提示する。このような命題のあり方からすれば、当然、偽なる命題は、その命題を受容するプロセスの現実世界に合致しない(non-conformal)ことになる。偽なる命題は、論理学者にとっては、単なる誤りとして一顧だにされない。しかし、ホワイトヘッドは、偽なる命題を世界の創造的前進の道具と見なすのである。

命題が単に判断のための素材であるという考えは、宇宙における命題の役割についてのいかなる理解にとっても致命的である。かの純粹に論理的な局面にあっては、非順応的命題は誤りにすぎないし、それゆえに無益であるよりも一層始末が悪いのである。しかし、その命題の第一の役割は、世界がそれに沿って新しさへと進んで行く道を拓くことである。誤謬は、われわれが進歩のために支払う代償なのである。[PR187]

ここに見られるように、ホワイトヘッドは命題を単なる判断の要素としてみなさない。これまで見てきたように、命題は現実世界のあり方の可能性を提示するのである。命題の示す内容の真偽はプロセスの後続相において問われることになる。だから、命題そのものは、それ自体の真偽について何も語らない[PR257]。命題は現実世界の新たな把握の仕方の可能性を示しているだけで、自らの真理に関しては未

決定性が残る[PR258]。そして、この未決定性のうちにこそ、プロセスが新しさを受容する余地がある。すなわち、結果として偽となる命題であっても無益なものとして捨て去らないということである。

「地球外生命体が存在する」。現状、この命題について真偽は確定していない。この命題は、現実世界の可能性でしかない。この命題は、いつか偽であることが明らかになるかもしれない。しかし、われわれはこの命題の真偽よりもその興味深さにもとづいて行動する。すなわち、たった一つの水素原子にすら会わない暗闇の宇宙に惑星探査機を飛ばし、ボイジャーのゴールデンレコードのような人類からのメッセージを送る。「地球外生命体が存在する」という命題から、われわれは宇宙の生物探査という新しい道を拓いてきた。たとえこの命題が誤りだとしても、この誤謬は宇宙の生物探査というわれわれの進歩のための代償なのである。このように、命題は単なる判断のための要素ではない。命題の役割は、その命題を持つ存在がその命題からさらなる行動へと進んで行くための誘因(lure)である。

さて、以上のような命題は、プロセスにおける感受の統合の結果、生まれる与件である。感受の統合とは、さまざまな関係性を織り上げることである。現実世界について漠然としていて不定だけれども、ともかく何らかのモノがあるという関係の仕方が物的感受であった。この感受から派生し、現実的実質が「何を経験しうるか」を特定するために不定の事実を「それ」としてとらえる感受を「指示的感受」(indicative feeling)と言う。そして、「それ」は論理的主語と呼ばれた。さらに、不定の事物のうちに共通普遍の質や形式である永遠的客体を見出す感受を概念的感受といった。この概念的感受からえられた永遠的客体を、述語的パターンとして「その」結合体においてとらえる感受を「述語的感受」(predicative feeling)と言う。永遠的客体は「それ」についての述語となる限りで、その普遍性を失うのであった。こうして命題は、指示的感受と述語的感受を統合する命題的感受(propositional feeling)によって生じる。さらに、この命題を与件とする命題的感受は、「知覚的感受」(perceptive feeling)と「想像的感受」(imaginative feeling)の二種類がある。それぞれの感受によって得られる命題にはその内容に差異がある。次節ではまず知覚的感受の命題を確認したい。

1-2 知覚的感受による命題について

命題は、生の事実としての結合体（現実的諸実質）と純粹な可能態である永遠的客体との統合の産物である。「単なるそれ」(bare it)[PR 258]に還元されている結合体からなる論理的^{ナマ}主語と、その述語的パターンとなる永遠的客体とが統合された与件が命題であった。生の事実とその可能性との組み合わせからなる命題は、いわば世界の現れの可能性としてプロセスに提示される。命題はその構成の違いによって二種類に分けられる。まずは、そのうちの一方の命題をえる知覚的感受について見る。そこで具体例として、石を見るとき^{ナマ}の命題の成り立ちをプロセスの生成に即して考えてみたい。

例 I

- ① そのプロセスの原初相では何ものでもない不定の何かあるモノが物的に感受される。
- ② それらの不定の結合体（現実的諸実質）の内に、その結合体を限定しうる「石」や「丸」や「黒」などの質や形である永遠的客体が、概念的に感受される。
- ③ ①で物的に感受された生の与件が、指示的感受によって「それ」へと還元された論理的^{ナマ}主語として感受される。
- ④ 述語的感受によって「石」（「丸」や「黒」）という永遠的客体がこの論理的^{ナマ}主語全体を特徴づける述語的パターンとして感受される。
- ⑤ 命題的感受によって指示的感受と述語的感受が統合され、命題がえられる。これらの命題は、「それは石である」（「それは丸い」や「それは黒色である」）という形式でプロセスに提示される。

以上のような段階を経てプロセスに提示された⑤のような命題は、この結合体のうちにおいて見出された永遠的客体をそのまま述語的パターンとして統合している。すなわち、この命題は不定の事実のうちに見出された永遠的客体を引き受けて形成されているため、述語的パターンが事実に対応する「順応的命題」(conformal proposition)と呼ばれる。しかしながら、概念的感受によってえられる永遠的客体は、もとの現実的諸実質のうちに見出される永遠的客体にとどまらない。概念的感受の派生態によって、もとの概念的感受によってえられた永遠的客体とは異なる新しい永遠的客体を感受しうるのだ。そして、もとの結合体に見出された永遠的客体(「石」や「丸」や「黒色」)とは異なる永遠的客体が述語的パターンとして結び付けられる命題を「非順応的命題」(non-conformal proposition)という。ここで、概念的感受の派生態について確認しておきたい。

ふたたび渋谷のスクランブル交差点に目を向けてみよう。多くの人々が行きかっているなか、それらの人たちのなかに「サラリーマン」や「OL」や「高校生」や「警察官」がいることをわれわれは認知する。このように、われわれは不定の人々のなかから、それらの人々の特徴や性質を見出している。これと同様に不定の事物のうち、それを限定しうる質や形である永遠的客体を見出すことを「概念的評価」(conceptual valuation)と呼ぶ。この概念的評価には、さらに派生様態がある。それが「概念的転換」(conceptual reversion)である。概念的転換は概念的感受の二次的な発生であり、概念的評価において感受された永遠的客体を若干ずらして新しい永遠的客体を感受する作用を言う[PR26]。たとえば、「サラリーマン」や「OL」をわれわれは「勤め人」として見ることができるし、「高校生」は「学生」であり、「警察官」は「公務員」である。このように概念的評価によってえられた性質を少しずらし、新たな永遠的客体を感受する概念的感受の様態を概念的転換と言う。

以上のような概念的評価や概念的転換によってえられた永遠的客体を扱う重要なはたらきがさらにある。それは「変容」(transmutation)である。スクランブル交差点を行きかう人々について、概念的評価や概念的転換によってわれわれはもろもろの性質を見出すことができるだろう。スクランブル交差点には、サラリーマンやOLや高校生や警察官がいる。それぞれの人々は、たしかに固有の性質を持っている。それらの性質は、男であったり、女であったり、大人や子ども、年齢や国籍や考え方や趣味嗜好も異なるだろう。しかし、われわれはそれらの性質を捨象して彼らを一つの群衆として見ることもできる。人々は「群衆」になり、「黒山」を作り、われわれはその中で「人波」にもまれる。このとき、われわれは、個々の人々の性質を捨てて、それらとは別の性質で人々をまとめてとらえている。このように個々の事物の細部を捨象し、それらに共通の性質をもって、一定の事物をまとめる作用を「変容」という。

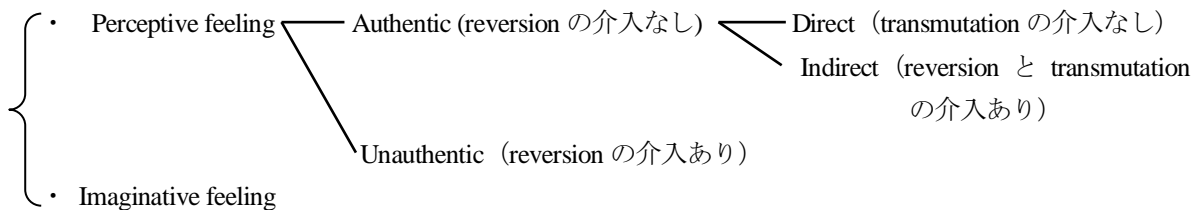
この変容によって、現実的実質は、もろもろの性質が見出される結合体のうちに、同一の永遠的客体が見出された場合、その永遠的客体をそれらの結合体の性質として特徴づける。このとき変容は細部の差異を度外視し、全体にいきわたる同質的一様性をその結合体のうちで際立たせることになる[PR101]。上記の例の④の段階において見られるように、命題において「それ」へと還元された結合体(現実的諸実質)である論理的主語を性格づける述語的パターンが見出されることには、変容が介入している。変容によって、論理的主語をまとめる性質が述語的パターンとして取り出されることで、論理的主語への述語づけは可能となるからである³。

以上のような概念的転換や変容の介入によって、命題が持ちうる述語的パターンは多様なものとなる。とはいえ、知覚的感受によってえられる命題は、その論理的主語をなす結合体から概念的評価や概念的転換によってじかにえられた永遠的客体をその述語的パターンとして述語づける。たとえば、「それは

³ 斎藤は、命題を意識の発生に不可欠な与件として論じ、「変容」(transmutation)が命題にとって本質であることを示している。本稿の記述も斎藤が示唆するところによく負っている。斎藤暢人「ホワイトヘッドの命題論」日本ホワイトヘッド・プロセス学会編『プロセス思想』第10号、2002、pp.112-113。

バラである」という命題ができるときに、「それ」をなしている結合体のうちに見出された「バラ」という永遠的客体を、「それ」にとっての述語的パターンとしているということだ。すなわち、ある対象について、そこに見出された、それが持ちうる性質をそのまま述語づけることから、そのものの現れ(性質や特徴)をそのままとらえるという意味で「知覚的」感受と呼ばれるのである⁴。そして、概念的転換、変容の介入の有無によってこの知覚的感受はさらに以下のように分類される [cf.PR262,PR268-269, Kraus125]。

—Propositional feeling—



以上のように知覚的感受は「本来的」(authentic)な知覚的感受と「非本来的」(unauthentic)な知覚的感
受へ、さらに「本来的」知覚的感受は、「直接的」(direct)な知覚的感受と「間接的」(indirect)な知覚的
感受に分類される。ここで、これらの分類について説明しておこう。

あるものを知覚するとき、われわれはその知覚の現れをそれについての知覚として受け取っている。
リンゴを見るのであれば、リンゴの視覚はリンゴについての知覚であるし、トマトに触れているのであ
れば、トマトの触覚はトマトについての知覚だ。ここには、知覚の対象と知覚の現れに違いがない。知
覚の現れは、その知覚対象についてのものであるという意味で「本来的」という言葉が使われる。

しかし、たとえば鏡に映った像を見る場合には、鏡に映るものはもとの事物と同じものが映っている
けれども、「鏡に映ったものとして」見る限り、その知覚の現れは「非本来的」なものとなる。鏡に映
ったリンゴは、リンゴの現れを持つけれども、それはリンゴについての知覚ではない。それは「鏡に映
ったリンゴ」の知覚である。たしかに「鏡に映ったリンゴ」についての視覚は、リンゴそのものについ
ての視覚と同じ現れを持つだろう。しかし、それがリンゴそのものについての視覚ではないと言う意味
で「非本来的」だということになる。したがって、映画やテレビが見せる像についても「非本来的な」
知覚と言えるだろう。

「直接的」と「間接的」な知覚的感受の分類には、変容の介入の有無がかかわっている。さきに見た
ように渋谷のスクランブル交差点では、「サラリーマン」や「学生」や「警察官」といったさまざまな
人々を見出すことができる。個々の人々について、それが「サラリーマン」や「学生」や「警察官」と
して認知されることは「本来的」である。さらに、それらの人々が持っている「サラリーマン」や「学
生」や「警察官」といった特徴は、個々の人々から直接的に引き出されるため、それらの人々につい
ての「直接的」な知覚となる。しかし、変容の介入によって、これらの人々を「群衆」として見る知覚は、
個々の人々の性質が捨象されて生じる「間接的な」知覚と言える。同じ人々についての知覚であるとい
う意味では、「本来的」な知覚ではあるが、「サラリーマン」や「学生」という「直接的」な知覚にた
いて、「群衆」という知覚の仕方は「間接的」なものとなる。

以上のような分類にもとづけば、概念的転換や変容の介入を被らない例 I のような知覚的感受は、本
来的で直接的な知覚的感受の例として考えられる。それでは概念的転換と変容が介入する間接的な知覚
的感受によってえられる命題を、先ほどの石についての知覚的感受を例にして考えてみよう。

⁴ 「というのは(論者注：導き出された命題的感受が知覚的感受と呼ばれるのは)、後に見るように、命題は諸々の論理的主体につ
いて、それらがあの抱握主体によって物的に感じられた仕方から派生した性格を述語づけるからである。」(PR262)

例Ⅱ

- ① そのプロセスの原初相では何ものでもない何かあるモノが実在として物的に感受される。
- ② それらの不定の結合体の内に、その結合体を限定しうる「石」や「丸」や「黒」などの質や形である永遠的客体が、概念的に感受される。さらに「石」という永遠的客体が「武器」という永遠的客体へ概念的に転換される。さらに、この「武器」という永遠的客体が変容によって、この結合体全体を限定する特徴をなすものとしてとらえられる。
- ③ ①で物的に感受された生の与件が、指示的感受によって論理的な主語「それ」へと還元される。
- ④ 述語的感受によって「武器」という永遠的客体が述語的パターンとしてこの論理的な主語にたいして感受される。
- ⑤ 命題的感受によって指示的感受と述語的感受が統合され、命題がえられる。これらの命題は、「それは武器である」という形式でプロセスに提示される。

以上のように、石を武器として知覚しうる命題が形成される⁵。ここには「石」から「武器」への概念的転換が介入している。「武器」という性質は、その論理的な主語をなす結合体のうちには、概念的評価によってもともと見出されなかった新しい性質だ。しかし、変容を被ることにより、この「武器」という性質は、結合体全体を特徴づける性質となる。その結果、「武器」という性質は「それがまるで結合体における自然的(physical)事実であるかのように」[PR269]感受される。つまり、「それ」が最初から「武器」という性質を持っていたかのように感じられるということだ。こうした性質を持つ命題は、論理的な主語をなすもとの結合体のうちに見出された永遠的客体を引き受けて形成されていない。したがって、述語的パターンが事実と順応するものではないという意味で、こうした命題は非順応的命題と言われる。

つづけて、非本来的な知覚的感受の命題についても例を挙げて考えてみよう。

例Ⅲ

- ① そのプロセスの原初相では何ものでもない何かあるモノが実在として物的に感受される。
- ② それらの不定の結合体の内に、その結合体を限定しうる「コップ」や「青」や「円形」などの質や形である永遠的客体が、概念的に感受される。さらにこれらの永遠的客体が「鏡像としての」永遠的客体へ概念的に転換される。すなわち、これらの永遠的客体は「鏡像としてのコップ」、「鏡像としての青」、「鏡像としての円形」へと転換される。
- ③ ①で物的に感受された生の与件が、指示的感受によって論理的な主語「それ」へと還元される。
- ④ 述語的感受によって「鏡像としてのコップ」（「鏡像としての青」、「鏡像としての円形」）という永遠的客体が述語的パターンとしてこの論理的な主語にたいして感受される。
- ⑤ 命題的感受によって指示的感受と述語的感受が統合され、命題がえられる。これらの命題は、「それは鏡像としてのコップである」（「それは鏡像としての青である」、「それは鏡像としての円形である」）という形式でプロセスに提示される。

非本来的な知覚的感受に特徴的なことは、概念的転換の介入によって、もとの永遠的客体から少しずらされた永遠的客体が述語的パターンとして用いられることである。ここでは、もとの永遠的客体が、「鏡像としての」永遠的客体にずらされる。その結果、形成される命題は、事実そのものについての「本来的な」知覚の現れではなく、鏡における現れとなる。

⁵ この例は Kraus の用いる例を踏襲している[Kraus96]。ただし、Kraus は石を武器として知覚する命題を偽なる命題の例として説明している。

非本来的な知覚的感受によってえられた「それは鏡像としてのコップである」という命題は、結合体には見出されなかった新しい永遠的客体を述語的パターンとしている。このことから、この非本来的な知覚的感受がもたらす「それは鏡像としてのコップである」という命題は、もとの生の事実である結合体に「縛りつけられた(tied)想像力から派生する」[PR263]命題だとされる。コップを見ているときには、コップについての知覚の現れを得る「本来的な」視覚がある。しかし、非本来的な命題としての「それは鏡像としてのコップである」における、「鏡像としてのコップ」という性質は、結合体がもともと有していたものではなく、本来的にはコップである事実に対する想像のように（「それはコップでありうる」(it could be a glass.)）感受されるのだろう（しかし、この想像はあくまで結合体に「縛りつけられた想像力」によるものだ。事実には縛られない自由な想像として派生する命題が、想像的感受の命題だ。想像的感受については、1-4 節で扱う。）

ここまで知覚的感受によってえられる命題について、その詳細を見てきた。以上のような説明から命題が事物に対する意識的な知覚表象のように思われるかもしれない。たしかに、知覚的感受によってえられる命題は不定の事実にたいしてその現れ方を提示する。しかし、命題は意識的な知覚表象ではない。というのも、プロセスにおいて「意識はその生成の最終相において偶然にしか到達されない」[PR267]性質だからだ。一方で命題的感受は「意識への統合の始まりと終わりのあいだに」[PR256]あると言われる。つまり、命題的感受は意識を獲得するプロセスの中間段階にあるということだ（もろもろの関係性から意識がどう発生するかという問題と命題との関係については、第四章 4-4 で扱う。）。それゆえ、命題的感受は、「それ自身のうちに意識を含んでおらず」[PR256]、命題の把握は意識的なものではないのだ。

そうだとすると、命題とはいったい何なのか。命題は、ホワイトヘッドが「存在の範疇」(The categories of existence)のうちに含む一種の実質(entity)として、その存在身分を与えられている。次節では、命題の存在論的意義を「現象」と「実在」という伝統的な哲学的区分をもとに明らかにしてみよう。

1-3 現象と実在のはざまから

「現象と実在」という区分が人間の意識において非常に優勢な特徴であったため、これまでの形而上学者がこの区分を基礎的なものとし、「経験において示される唯一の二分法」[AI209]であるかのように導入した点をホワイトヘッドは誤りであると指摘する。そして、この誤りが現代哲学を歪曲してきたと彼は言う[AI209-210]。しかし、いくつかの注意と条件を加えた上で、彼の体系の中にもこの区別を導入している[AI209]。そして、この区別の導入において命題の役割が重要視されることになる。ホワイトヘッド的命題は、この現象と実在のはざまに見出すことができるのだ。

はじめにホワイトヘッドが「現象と実在」の区別をどのように説明するのかを見てみよう。彼によれば「「現象と実在」の区別は、現実的契機(actual occasion)の自己-形成過程にもとづいている」[AI210]とされる。すなわち、プロセスの内に「現象と実在」の区別を見出そうと言うのだ。まず、実在については、プロセスにおける原初相で感受された客体的内容が実在と呼ばれる。

最初の受容相の客体的内容は、その契機に与えられたものとしての、リアルな先行する世界である。これが「実在」であり、ここから創造的前進が始まるのだ。それは新しい契機の根底的事実である……。そこには、客体的不死性の役割を行使する現実的過去というリアルな作用者をのぞけば、なにもない。これがその瞬間におけるその契機にとっての実在である。ここで「実在」という用語は、「現象」に対する反意語という意味で用いられている。[AI210]

プロセスはもろもろの関係性を束ね、一つの存在を生み出す運動である。このプロセスの最初の受容相（原初相）にあるのは、さきに生み出された諸事実からなる現実世界である。この先行する諸事実が「実在」と呼ばれる。プロセスはまず、この実在との漠然としているが何かがあることを把握するという関係の仕方から、一つの存在の成立を目指す創造的前進を始める。

生成を終えた現実的実質は、その直接的活動性を失い、「客体的不死性」(objective immortality)を獲得すると言われる。新たな現実的実質の生成の与件として在り続けるという意味で不死となるからである。活動性を失い一定の決着を見たこれらの現実的実質の総体を、ホワイトヘッドは新たなプロセスにとっての「現実世界」(actual world)と呼ぶ。生成している一つのプロセスに身を置かならば、このプロセスが現在であり、ここである。この「いま、ここ」の現在にたいして、原初相でプロセスが出会う現実世界は「過去」である。プロセスの原初相においてはこの過去の現実世界が、いかなるものによっても改変不可能な「頑強なる事実」(stubborn facts)として、新たな現実的実質の内容を形成する作用者として働くのである。

原初相で現れる現実世界は、まだ何らの判断や分析的作用を受けない、不定の世界である。したがって、上記の引用によれば実在⁶とは生成する新たなプロセスの原初相で感受された、いまだ限定的な形式をまとっていないモノたち、すなわち生の与件であるということになる。プロセスの始まりにある原初相では過去の事実が現れる。しかし、原初相ではこの過去の事物は概念的な把握の手がかりをいまだ見出ししていないため、不定のモノの集まりでしかない。しかし、ホワイトヘッドはこの不定なモノからなる現実世界の圧倒的作用を、どんなものであれ経験を構成するための土台として前提とする。

過去は、それぞれの新しい現実態の基底にある実在である。プロセスとは、創造的エロースの働きによって、過去を理想と予期をともなう新たな統一性へと吸収することである。[AI276]

過去の個体的で実在的諸事物(real facts)は、現在におけるわれわれの直接経験の基底にある。それらの諸事物は、この契機が由来する実在(reality)であり、その契機が己の情緒の源泉を引き出す実在であり、その契機が己のもろもろの目的を継承する実在であり、その契機が己の情念を差し向ける実在なのである。経験の基底には、これらの個々の実在から引き出され、それらへと差し向けられている、さまざまに入り乱れた感受(a welter of feeling)がある。[AI280]

原初相においては不定のモノでありながら、頑強なる事実としてプロセスの基底をなす実在は、そこからさまざまな感受が派生してくる豊饒さを有していると言えるだろう。過去の実在にもとづいて、プロセスは自らの情緒や、自らが目指す目的、その実在に対する情動といった自らの経験をなすすべてを引き出すからだ。プロセスの有する「エロース」とは、自らの「理想的な完成の実現に向かう衝動である」[AI275]。すべてのプロセスは過去の受容から始まり、このエロースという創造的前進への衝動に駆りたてられることによって、その内に自身の理想や未来への予期をもつ自らの実現を達成するのである。

以上のような、あらゆる経験の基底をなす実在にたいして現象は以下のように説明される。

⁶上記本文引用[AI210]において、ホワイトヘッドが用いる「実在」という言葉は二義的である。というのも、ホワイトヘッドは一つのプロセスがさまざまな関係性をまとめあげ、その内容を充填させた「充足」(satisfaction)にいたると、その現実的実質は「実在する」と言うのである。この現実的実質は、諸々の関係性の結節点のようにこの世界に実在するものとして登場する。しかし、実在として世界に登場したのもつかの間、この現実的実質は次の新たな現実的実質のプロセスへとみづからを投げ出すのである。こうした現実的実質の在り方をホワイトヘッドは「主体-自己超越体」(subject-superject)という言葉で表現する。次の現実的実質のプロセスにおいて先に実在化した現実的実質は、その生成にとって「潜勢的な」(potential)ものとなる。したがって、ここでの実在という語は、生成の終息における実在化を表すとともに、次のプロセスにとっては潜在的なモノとなる二義性を有している。

物的極の原初相の客体的内容と、物的極と心的極とが統合された後での、最終相の客体的内容との間の相違が、その契機にとって「現象」を構成している。[AI 211]

プロセスにおける「現象」を理解するためには、プロセスの単位である現実的実質の特徴や生成段階を理解しなければならない。プロセスの生成段階についてはすでに見た。現実的実質の有する特徴を確認しよう。現実的実質には、物的な性格を持つ傾向性と心的な性格を持つ傾向性の両方が共在している。これらの傾向性をつかさどるのは、それぞれ「物的極」(physical pole)と「心的極」(mental pole)である。これらの極は、すべての現実的実質に備わっている。したがって、金属のような無機物にもホワイトヘッドは、無視しうるほど限りなく微弱ながらも「心性」(mentality)を認めることになる。こうして、物的感受は物的極に由来し、概念的感受は心的極に由来することになる。

上記引用において「物的極の原初相の客体的内容」とは、物的感受によって把握された生の事実としての現実世界であり、先に述べた実在を指す。つづいて「物的極と心的極とが統合された後での、最終相の客体的内容」が命題であると解釈することができる。命題的感受は、物的感受から派生する指示的感受と概念的感受から派生する述語的感受の統合をなす感受であった。したがって、「物的極と心的極との統合」とは物的感受と概念的感受の統合、すなわち指示的感受と述語的感受の統合をなす命題的感受と読み取ることが可能だからだ。

さらにここでは、実在と命題という、二種の客体的与件の内容に「相違」があることが言われる。プロセスにおいて、この相違もそれ自体としてプロセスに与えられた客体的内容である。この相違としての客体的内容は、実在と命題とを「つき合わせる」(confront)[PR269]ことによって現れる相違だ。たとえば本来的には石でありえた結合体を「それは武器であるかもしれない」という形式で提示する命題は、あらためてこの結合体(石という性質を有する)との「対照」(contrast)におかれることになるのだ。石という性質をもちうる結合体とこの命題には相違がある。命題という事実に対する現れの可能性と事実そのものが対照化された与件が「現象」なのである。そして、この相違は「類的コントラスト」(generic contrast)[PR266]と呼ばれる与件なのだ。すなわち「現象」とはホワイトヘッドの体系の中では、類的コントラストなのである。この類的コントラストの感受によって、現実世界は実際にわれわれにそう現れてくる場所のものとなる。(類的コントラストについては、第2章2-3、第4章4-4でも扱う)。「現象と実在」という哲学における伝統的な区分は、ホワイトヘッドの体系の中ではプロセスにおける構成要素の客体的内容の違いとして説明されることになるのだ。以上のようなプロセスにおける「現象と実在」の区別において、命題が果たしている役割を吟味しよう。

命題は、それ自身の直接性のうちにある経験以外の他のすべてのものと同様に、経験のうちに抱懐される(entertained)ものとしてのみ、存在している。心的極の特異な機能は、その抱握の客体的内容が可能性という様態においてのみ存在しているということである。しかし、事実というのは本質的に心的極を含む。こうして、ある現実的契機を分析するにあたって、われわれは必ず可能性という様態に属する構成要素を見出す。真と偽のもっとも顕著な例は、可能性という様態における存在者と現実性という様態における存在者とを比較することのうちに生じてくる。[AI245]

「それ自身の直接性のうちにある経験以外の他のすべてのもの」とは、今、生み出されようとするプロセスの直接的活動性にかかわる与件以外の、他のすべての事物を言うのだろう。今、このプロセスの直接的活動に参与しなくとも、それらはまた別のプロセスにおいて感受される可能性がある。このような意味で、命題もプロセスに感受されうる与件としてのみ存在している。そして、命題は、永遠的客体を

述語的パターンとして感受することから、命題の派生は心的極に由来する。したがって、命題は、プロセスにおいて可能態というあり方をして存在している。

プロセスにおいて、不定の实在を感受しているだけでは現実世界は現象しない。そこで、实在の現れの可能性を示唆する可能態としての命題が必ず見出されることになるのだ。そうでなければ、不定の現実世界をどのようなものとして経験するかについての手がかりをもつことができないからだ。命題によって提示された現れの可能性は、この不定の实在に投げかけられる。こうして、この可能態である命題と实在との比較において真偽が問題になるのだ。

この真偽の判別基準は、命題の示す述語的パターンと不定の結合体⁷に見出される永遠的客体との整合性である。つまり、命題の述語的パターンとして機能している永遠的客体と、結合体のうちに見出される永遠的客体とが一致するかどうか真偽の判定基準となる。

命題の真理は、命題とその論理的主語である結合体との真理-関係のうちにある。命題が真であるのは、結合体が实在において、命題の述語であるパターンを例証する場合である。こうして、含まれているさまざまな構成要素となる要因の分析において、命題は、それがもし真であれば、結合体と同一であるように思われるのである。[AI244]

提示された命題が真であるのは、結合体との比較において、命題の述語的パターンと結合体において見出される永遠的客体とが同一のものである場合である。「石」や「武器」や「黒」などの性質が見出される結合体にたいして、「それは石である」という命題が比較されると、その命題が提示する現れの可能性は、その事実について真であるものとして経験される。すなわち「それが石である」ように現象し、「それがそうであるところのもの」として経験されるのだ。すなわちこの命題は「それはそうだ」[that is so.]という直観的認知[AI242]として経験されることになるのである。

〈現象〉が〈实在〉のうちに実際に宿るもろもろの結合されたものと、それらの性質を強調するかぎりにおいて、〈現象〉は〈实在〉との関係において真的(truthful)である。しかし、〈現象〉は〈实在〉のうちに相関するものをもたない諸結合をもたらし、諸性質を導き入れたのかもしれない。その場合、経験のそれ自身の内に偽、つまり〈現象〉と〈实在〉の不結合を含んでいる。いずれの場合でも、〈現象〉は〈实在〉の単純化であり、〈实在〉を存続するもろもろの個体の前景と識別されていない諸契機の後景へと還元する。[AI281]

現象の発生を知覚的感受の命題をもとに具体的に考えてみよう。夜空の星々を見ている場合、われわれは「それは星である」という本来的で直接的な知覚的感受の命題を選択し、この命題と生の事実との比較によって現象を生み出し、それを星として知覚している。しかし、概念的転換と変容の介入のある本来的で間接的な知覚的感受によってえられる命題によってそれは、「惑星」や「恒星」、「衛星」として知覚されるだろう。また、変容によってもろもろの星の集まりが全体としてまとめられて「それはおうし座である」(星々の配置から「牛」という姿形への変容が行われた場合)や「それは天の川である」(一群の星の集団を「川」として変容する場合)という命題もできるだろう。これらの命題が選択され生の事実である結合体と比較された場合には、星々は「それはおうし座である」や「それは天の川である」現象として経験に現れる。

⁷この結合体から命題の論理的主語が派生してくる。すなわち、命題の論理的主語と結合体はももとは同じ現実的諸実質の集まりである。

こうして、実在である結合体にたいして、命題はその現実的諸実質の集合を論理的主語として指示し、結合体に見出された（概念的転換がある場合も含む）性質を述語的パターンとして選択し、強調する。その結果、命題は、世界がいかにか現れうるかというその可能性を提示する。そして、提示された命題の述語的パターンと、もとの結合体に見出された永遠的客体のパターンが同一であれば、現象は実在にたいして真なるものとして経験される（プロセスにおいて命題と実在が整合しない「偽」を含む場合については、次節で考察する）。命題によって提示される内容は、現実世界のごく一部を一定の性質によって限定したものだ。こうした命題にもとづいて生じる現象は、実在を単純化したものとならざるをえない。命題をあいだにして、実在は経験の基底となる後景をなし、現象は命題によって提示され、単純化された世界についての像として前景となる。すなわち、実在を地とし、現象は図として経験に現れる。

さて、プロセスにおける以上のような現象と実在の区分から引き出される帰結がある。それは、われわれが何を経験するか（実在）と、それをどのように経験するか（現象）とがプロセスにおいて区別されるということだ。こうした、区分において命題は現象と実在のはざまにある。命題は、このプロセスのはざまから、世界がどのように経験されうるかに関する可能性を提示するのである。

また、命題は意識以前に生まれる与件である。命題的感受の段階において、プロセスは意識をもつ主体に到達していない。したがって命題は、意識以前に不定のモノたちが何であるかがそれによって語られる、モノ語りなのだ。何らかの主体ではなく、現実世界についてモノが語るなのである。永遠的客体だけでは、モノは語られない。永遠的客体はもっとも具体的なモノとのかかわりにおいて、述語的パターンとしてそれが何であるか語られるのである。バラの赤さは、モノとの関係のなかで現象してくるのである。そして、現象として現れてくる経験の背景には、確定した事実の否定も含めた無数の命題が存在する。部屋が暗いという知覚には、「明るくない」というだけではなく「赤くない」、「青くない」、「星空でない」、「音がしない」など想像したり空想したりできる限りの「～ではない」という否定が潜んでいる。つまり、「暗い」という知覚の裏にある果てしない選択肢には、選ばれる可能性があったのに選ばれなかったものすべてがつまっているのだ。われわれの経験は有限の現にあった事実を基底とはしているが、経験をなしているのはむしろ無限ともいえるモノ語り、すなわち「なかったモノたち」や「ありえたかもしれないモノたち」のほうなのである。現象と実在のはざまには、命題が提示するモノ語りの世界があるのだ。

1-4 想像的感受による命題について—実在しないものたちの経験

日常においてわれわれは以下のような経験をやる。その日の出来事を回想し、「ああすればよかった」と反省することがある。本を読み、空想の世界で、ペガサスやグリフォンといった想像上の生き物たちにイメージという形で出会う。地球外生命体がいるのではないかと想像する。あるいは、ある旋律を聴いて「甘いメロディーだ」と感じる。また、たいていの人にとっては非日常的体験かもしれないが、違法薬物を摂取するとわれわれは幻覚を見る。これらの経験をわれわれはどのようにしているのだろうか。

これらの経験に共通しているのは、実在しないものを経験しているということだ。今日の回想においては、「ああすればよかった」という内容は現実にはなかったことであるし、回想している時点においては実現されてもいないことである。ペガサスやグリフォンは言わずもがな、この世に存在する生き物ではない。地球外生命体もこの先、人類が遭遇する可能性はあるものの現時点でその存在を確認されてはいない実在しないものだ。ある長さやある高さを持つ音の連続からなるメロディーは確かにあるが、「甘い」メロディーというものは実在しない。まして「甘さ」は本来、味覚に由来する感覚だ。聴覚における「甘さ」はカテゴリーミステイクだろう。幻覚はそこに知覚すべき対象が実在しないのにそれがあのかのように知覚される現象だ。

本節では残るもう一つの命題的感受である想像的感受について吟味したい。想像的感受によってえられる命題によって上記のような経験の成り立ちを説明できる。知覚的感受によってえられる命題は、その論理的主語をなす結合体からじかに概念的評価や概念的転換によってえられた永遠的客体をその述語的パターンとして述語づけていた。それに対し、想像的感受によってえられる命題は、論理的な主語をなす結合体とは異なる結合体から派生する述語的パターンを統合してできると言われる。

想像的感受の客体的与件である命題は、転換(reversions)を伴うかどうかは別にして、論理的な主語を提供する結合体とはいくつかの点で異なる結合体から派生する述語を有している。こうして、この命題はその論理的な主語に関する想像上の観念として、感じられている。この命題はそれ自身の本性上、それがいかに感受されるべきかについての示唆を何一つ与えないのである[PR263]。

命題には、現実世界のなかで「それ」として指示された論理的な主語と、述語的パターンとなる永遠的客体が必要である。どちらも現実世界における実在から派生するものだ。ところが、論理的な主語と永遠的客体（述語的パターン）がそれぞれ異なった結合体から引き出されたうえ統合される命題が、想像的感受によって成立する命題である。今、プロセスの現実世界の中に、A群を成している結合体（a、b、cという永遠的客体を持つ）と、永遠的客体dという特徴を示しながらB群を成している結合体があるとする。これらの与件から命題を形成する際、A群は今、a,b,cという性質を失い、「単なるそれ」(bare it)としての論理的な主語 α に還元される。B群からはdという述語的パターンが引き出される。この論理的な主語 α とdという述語的パターンの統合が想像的感受によって行われ、論理的な主語 α について α にはもともとなかったdという述語的パターンを持った命題（「 α はdである」）が形成されることになる。論理的な主語 α とは密接な関連の保証もなくB群から引き出されてきたdという性格を述語付けることから、この命題の形成が想像的感受と呼ばれる[PR 262]。

想像的感受の命題は、論理的な主語にたいして、生の事実である結合体のうちに見出されなかった、その事実の内には見出されない永遠的客体が述語的パターンとして統合される可能性がある。したがって、論理的な主語に与えられる述語的パターンによっては、この命題は単に現実をそのままにとらえ返す以外の内容を持つことができる。したがって、想像的感受の命題によってとらえられる内容は、実在しない事柄になりうるのだ。また具体例を挙げて考察してみよう。いわゆる「甘いメロディー」を聴いているときの命題の成り立ちをプロセスの生成に即して考えてみよう。

例IV

- ① そのプロセスの原初相では何ものでもない何かあるモノが物的に感受される。
- ② ①で感受された不定の結合体の内に、その結合体を限定しうる「音」や「旋律」や「音階」などの質や形式である永遠的客体が、概念的に感受される。さらに①で感受されたそれらの不定の結合体とは異なる結合体の内に、「甘さ」や「なめらかさ」といったその結合体を限定しうる質や形式としての永遠的客体が、概念的に感受される。
- ③ ①で物的に感受された生の与件が、指示的感受によって「それ」へと還元された論理的な主語として感受される。
- ④ 述語的感受によって、「旋律」や「甘さ」（「なめらかさ」）という永遠的客体がこの論理的な主語全体を特徴づける述語的パターンとして感受される。
- ⑤ 命題的感受によって指示的感受と述語的感受が統合され、命題がえられる。これらの命題は、「それは甘くかつ旋律である」（「それは旋律でありかつなめらかである」）という形式でプロセスに

提示される。

メロディーという性質を有していた結合体からなる論理的な主語について、それとは異なる結合体から引き出される永遠的客體（「甘さ」、「なめらかさ」）が述語的パターンとして統合される。「甘さ」や「なめらかさ」は本来的には旋律には結びつかない性質だ。甘さは味覚に由来し、「なめらかさ」は触覚に由来するからだ。しかし、「甘さ」や「なめらかさ」が命題において「旋律」と共存することになる。このようにしてできた命題（「それは甘く、旋律である」＝「それは甘いメロディーである」、「それは旋律でありなめらかである」）は、事実に対する想像上の観念として感じとられるだろう。

さらに実在しないものを経験する典型として、違法薬物による幻覚の経験を想像的感受の命題によって説明してみよう。したがって以下の例は、違法薬物の影響下にあるものとする。

例V

- ① そのプロセスの原初相では何ものでもない何かあるモノが物的に感受される。
- ② ①で感受された不定の結合体の内に、その結合体を限定する何らかの質や形式としての永遠的客體が、概念的に感受される。さらに①で感受された不定の結合体とは異なる結合体の内に、「赤」や「リンゴ」といったその結合体を限定する質や形式としての永遠的客體が、概念的に感受される。
- ③ ①で物的に感受された生の与件が、指示的感受によって「それ」へと還元された論理的な主語として感受される。
- ④ 述語的感受によって、「赤」や「リンゴ」という永遠的客體がこの論理的な主語全体を特徴づける述語的パターンとして感受される。
- ⑤ 命題的感受によって指示的感受と述語的感受が統合され、命題がえられる。この命題は、「それは赤いリンゴである」という形式でプロセスに提示される。

前節において見たように、例Vにおいて提示された命題（「それはリンゴである」）は結合体をなす実在と比較されることで、現象として現れることになる（これは例IVでも同様だ）。実在との比較において、「それは赤いリンゴである」という命題に見出される述語的パターン「赤いリンゴ」は実在のうちにはどこにも見出せないであろう。というのも、述語的パターンが派生する結合体と論理的な主語が派生する結合体異なるからである。したがって、「それは赤いリンゴである」という現れの可能性が他の可能性よりも優勢であり、かつこの命題をプロセスが選択するならば、リンゴはないのにもかかわらず、リンゴが現象してくることになる。同様にペガサスやグリフォンといった想像的対象もこうした想像的感受の命題によってもたらされる観念として説明可能なのである。

しかしながら、そうなると幻覚として知覚されるリンゴとペガサスやグリフォンのイメージとの区別がつかなくなってしまう。それが幻覚であるのか、イメージであるのかどのように区別されるだろうか。前節で述べた「現象」と「実在」のもつ図と地の関係を思い出していただきたい。幻覚においては、「実在」にたいして「それはリンゴである」という命題が「現象」において優勢になると考えられる。「現象」において命題が示す内容のみが図として高い強度をもって経験されるのだ。すなわち、命題の効果が「実在」を圧倒し、「実在」がいわば無視され、命題と「実在」の相違が失われることになる。その結果、「現象」のみが優勢となりリンゴがあるかのように経験されるのだ。それにたいして、ペガサスやグリフォンのイメージ知覚は、図である命題とともに地としての「実在」の効力が失われていないと考えられる。「現象」と「実在」の差異がそのまま経験され、それがイメージであることが地である「実

在」との対比で明らかになるのだ。

以上のように、想像的感受のもたらす命題はその構成上、実在と一致しない「非順応的命題」であることから、偽なる命題となる。しかし、先にみたように命題はその真偽のみが重要なのではなく、偽なる命題であってもそれがプロセスにおいてどのように感じられるかに意義がある。こうした想像的感受のもたらす命題とそこから派生する「現象」から、つぎのように言うことができる。それが真正な経験であれ、誤った経験であれ、意識的に経験されるものは「現象」として経験される性質であり、「実在」そのものの性質ではない。そして、誤った意識経験が可能なのは、そこに現れるのが「実在」そのものの性質ではなく、「現象」がもたらす性質だからだ。したがって、われわれはプロセスにおいて現実世界のなかにそれ自体として存在しているもの（「実在」）を意識的に経験していないがゆえに、存在しないものを経験できるのだ。

第2章 命題にもとづく知覚論

前節までにプロセスにおける命題の位置づけ、性質、特徴を見てきた。簡単にまとめると、ホワイトヘッドはプロセスにおける「現象」と「実在」のはざまに命題を見出していた。また命題は、生の事実と純粋な可能態（永遠的客体）が結びついてできる「混成的な（hybrid）な与件であった。そして、この不定の現実世界にたいする現れの可能性を提示する命題がふたたび「実在」と照合されるさいに、「現象」（類的コントラスト）が成立するのであった。ホワイトヘッド自身は命題やそこから派生する類的コントラストによって現実的実質が一つの経験へと結実するプロセスを精妙に描き出しはするが、プロセスに内在的な感受の派生を詳述するだけで、プロセスにおける命題が具体的にどのような役割を果たすものなのかについては、明確に表してはいない。したがってここから、これまでに見てきた命題概念をプロセスにおける一種の与件から知覚論というより広い文脈に置き、命題の役割を明らかにすることにしたい。

すでに述べたように、ホワイトヘッドの体系において知覚する主体は前提されない。過去の与件から知覚に至る経験が生成し、「充足」（satisfaction）という段階で、知覚している主体が最終的に成立する。

「存在」（being）より「生成」（becoming）のほうが優位にあるのだ。生成から充足に至るプロセスが現実的実質と呼ばれ、現実的実質は「感受」（feeling）によって与件をとらえ、自らを「充足」へと導く。「知覚」と通常呼ばれているものの成立は、ホワイトヘッドの哲学体系においては、かなり複雑だ。というのも、現実的実質の生成にはいくつかの「相」（phases）があり、そこでさまざまな経験要素が生まれ統合されていくからである。そして意識的な知覚は、そのような複雑な過程の最後に結実する。通常、ホワイトヘッドの知覚論は、「象徴的関連付け」（symbolic reference）によって説明されることが多い。しかし本章では、命題にもとづいて知覚を考えてみたい。

以下の節ではまず、プロセスにおける知覚の成立には、命題が不可欠であることを示したい。そこで、N.R.ハンソンが提示した「理論負荷性」という概念を補助線として用いる。特に「理論負荷性」における「理論」という概念を用いて、命題にもとづく知覚論を展開する。ハンソンの知覚論を概観した上で、ホワイトヘッドの命題にもとづく知覚論の意義を明らかにしよう。さらに、命題にもとづく知覚論の上にたち「われわれが知覚しているものは何か」という問題を論じる。そこで、プロセスの諸相を経て結実する知覚は、実のところ豊饒な与件に対する単純化にすぎないと主張する。

2-1 「理論負荷性」という概念における「理論」について

旧来の論理実証主義者によれば、科学理論は経験に照らして検証されるか、あるいはその理論が成立

しないことが経験にもとづいて示されなければならない。この場合の「経験」とは、事実の観察やその言語による報告である。彼らは、知識や理論の影響を受けない中立的「観察」が可能であると考えた。そして、そのような「観察」によって得られた生の事実に基づいて、科学的知識や理論が二次的に構成される。こうして、「観察」と理論が峻別され、事実の検証や反証を繰り返すことで科学理論は改善され進歩していくと考えられた。

それに反しハンソンは、われわれが、感覚与件や現象そのものを直に「観察」し、それを中立的な「観察言語」で記述しているわけではないと言う。われわれは、事物をただ「見る」のではなく、ある特定のなにか「として見る」(seeing as)、あるいはなにか「であることを見る」(seeing that)とハンソンは主張する。例えば、同一の視覚刺激である三角形を、複数の人間が目にしていたとしよう。しかし、その同じはずの<三角形>は、文脈によって、「山」に見えたり、「くさび」に見えたりする。しかも、この文脈は言語的文脈とは限らない。それが何に見えるかは、見る側の知識や経験という「文脈」に依存しているのだ。だが、文脈に依存しているとは言っても、視覚与件という生の事実を受け取った後に、その「見え」の説明として理論や解釈を与えているわけではない。そうではなく、「見る」ことのうちにすでに、理論や解釈がたたみこまれているのである。

われわれは、まず視覚与件から出発し、しかる後によりやくわれわれの理論や解釈をその上に投げかけるようなことはしない。もっとも重要な意味で、われわれの理論や解釈は始めから見ることのうちにあるのである。 [PD88]

あるものを見るというのは、つねにすでに、「として見る」ということなのだ。ハンソンによれば、「見る」というのは、過去の経験や知識によって作りだされ、理論や概念によって色づけされた「眼の背後の眼鏡」を通して「見る」ことなのである。

要するにわれわれは通常、過去の経験と知識から作り出され、われわれの特定の言語と表記法の論理形式によって色づけられ、斑になった眼鏡を通して見ている。見ることは、私が「理論負荷的」(theory-laden)操作と呼ぼうとするものである……。 [PD149]

以上二つの引用にもとづき、「理論」の意味を、本稿の内容に即して限定したい。ハンソンは「理論」という語を一般的物理法則という意味でも用いる。他方で、「理論負荷的」という言葉における「理論」は、過去の経験や知識の意味でもある。したがって、「として見る」の「として」は、ある見方に関する「理論」が負荷された結果だということになるだろう。たとえば、有名な「ウサギ-アヒル」の絵(ジャストロー図形)では、この図にウサギを見てしまうと、アヒルはいなくなり、アヒルを見ているときは、ウサギは見えない。ウサギを見る場合には、ウサギ「として」の理論が負荷され、アヒルを見るときにはアヒル「として」の理論が負荷されたからだ。「理論」は、事実をそのようなもの「として」見る一つの可能性の背景をなす。そして、「理論」なしでは「見る」ことができない。つまり、「理論」は「見る」ことには不可欠な要素であり、その意味で、「見る」ということは「理論を背負って見る」ことにほかならないのである。ただし、繰り返せば、生の感覚与件の受容がまずあり、その後で、理論によって解釈が施されるというわけではない。「見る」という事態の成立そのものが、理論による解釈なのである。ハンソンは「見ると呼ばれる理論負荷的活動」[PD150]がいかに働いているのかを当時の実験心理学の研究成果を挙げて説明した。それによれば「見る」という行為には、理論による解釈的契機がそもそも含まれている。そして、この「理論」は過去の経験と知識から作り出されるという。

ハンソン自身は、この「理論」がいかにか構成され、どのように「負荷」されるのかというメカニズムについては説明しない。たしかに、「眼の背後の眼鏡」にもとづく「見ること」がどのように成立するのかという問題はあるだろう。とはいえ、論理実証主義者のように、感覚与件の受容と、その解釈による理論の構成という二つの段階を経る知覚説をハンソンはとらない。むしろ、ハンソンの主張は「観察」の理論負荷性に関わるものであり、彼自身は一つの知覚論を展開しているのではない。しかし、観察は何らかの「理論」を前提とするという彼の主張を知覚一般にも適用した場合、知覚における「理論負荷性」も指摘できるのではないだろうか。つまり、知覚はその対象をつねにすでに「として知覚する」という理論負荷的構造を持つということだ。そこで、この構造をホワイトヘッドの命題、およびそれにもとづく知覚論として説明してみたい。また、ハンソンの言う「理論負荷性」という概念を補助線として引くことで、ホワイトヘッドの命題の役割が明確になることも示したい。

2-2 知覚のための手がかり—理論としての命題

たとえば、われわれが何かを知覚する場合でも、「それ」は最初から何かとして存在するわけではなく、もともとは「なにものでもないもの」、まさに生の与件としてある。まずもって、現実的実質の生成プロセスの原初相においては、「なにものでもないもの」が漠然と受け取られる。「なにものでもないもの」が「対象として」現れるためには、少なくともそれが「それ」^{ナニ}として指示されなければならない。したがって、「なにものでもないもの」は「単なるそれ」(bare it)[PR258]という指示詞の形式に還元される。この「単なるそれ」をホワイトヘッドは論理的な主語と呼んだのであった。さらに、なにものでもない「それ」を何かとしてとらえる手がかりとして「色」や「形」が概念的にとらえられる。ここから、これらの概念的にとらえられた要素が述語的パターンとして、「単なるそれ」と統合される。こうして「なにものでもないもの」は「それは〇〇である」という言語的構造を備えて、「それ」がある性質を備えた「対象として」現れてくる。この言語的構造を備えた与件がホワイトヘッドの言う命題である。

古典的な主客関係のモデルでは、主体と対象との関係は現在における一方のもう一方への現前・表象化として説明される。したがって、主体は対象を意識のうちで全的に現れるものとしてとらえることができる。さらに古典的モデルは、こうした全的な表象の現れを暗黙の前提とする。命題も古典的モデルにおけるように、意識において直接与えられ、現れてくる与件と思われるかもしれない。しかし、ホワイトヘッドの知覚論においては、経験は意識的に現れるもののうちで汲み尽くされるわけではない。意識に対する対象の表象化は、つねに意識的経験以前の命題という経験要素にもとづいているのだ。

たとえば、眼の前にあるコップを見るという経験の生成における命題を考えてみよう。この命題は、文章化してしまえば「それはコップである」という通常の意味での命題を指し、通常^{ナニ}の知覚的経験を表現しているように思われるかもしれない。しかし、そうではない。ホワイトヘッドの言う命題は、意識的経験以前の、経験を構成する与件であり、「それはコップである」という通常の意味での命題ではないのだ。というのも、ホワイトヘッドによれば意識は、経験において前提とされるものではなく[PR267]、生成プロセスの最終相においてようやく生じるからだ。したがって、命題はプロセスに現れてくるものではあるけれども、この現れは意識に対する現れを意味しない。

さらに命題は「それ」について「コップ」以外にも「グラス」だったり、「湯飲み」であったり、さらにはそれ以前に何らかの「形」をしている、というような見方を表現することがありうる。なぜなら、概念的転換の介入により、概念的評価によってとらえられた永遠的客体とは異なる述語的パターンが派生し、「それ」を特徴づける性質も異なったものになるからだ。したがって、「なにものでもないもの」^{ナニ}生の与件に対するとらえ方が異なってくる。命題とは、生の与件^{ナニ}に対するとらえ方の可能的提示そのもので

あり、命題の提示は、知覚の仕方の可能性を、生成している現実的実質にたいして意識の発生以前に自己表現することなのである。命題とは、意識以前に、現実世界のとらえ方を一つの可能性として現実的実質に提示する(propose)与件なのである。

なぜ意識的経験以前に命題を感受するのであろうか。古典的な主客モデルのように命題を意識に対する全的表象として扱えばいいのではないか。古典的な主客関係モデルでは主客が二項として前提される。一方で、抱握という関係性が先行するホワイトヘッドの体系では、いかなる事物であれ、それ自体で存立する個体が認められない。すなわち、主体である意識的個体と客体である対象は前提とされない。したがって、主体が「主体として」現れてくる事態と、対象が「対象として」現れてくる事態が関係性にもとづくプロセスによって説明されることになる。このプロセスの中で対象が「対象として」現れてくる事態を説明するために、命題という与件があるのだ。したがって、ある一つの命題は、本来「なにものでもないもの」が「対象」として現れてくるための一つの可能態としてある。こうした命題についてホワイトヘッドは以下のようにまとめる。

命題というのは、現実態に関する観念であり、事物についての示唆であり、理論であり仮定である。それを経験のうちに抱懐することは、多くの目的に役立つ。命題は、〈現象〉の極端な事例である。というのは、論理的主語である現実態は、述語を例示するという装いにおいて解されているのだから。命題を無意識的に抱懐することは、経験の原初相の〈実在〉から最終相の〈現象〉への移行におけるある段階である。[AI244]

「なにものでもないもの」を「それ」として端的に示す論理的な主語と、「それ」を限定する述語的パターンとの統合からなる命題は、ある現実態(生の与件)に関する見方、現実態についての表現を、今、生成しつつある当の現実的実質に提示する。命題は、生の与件をいかにとらえるか、またどのようなもの「として」あるのかという可能性の一つとして感受される。したがって、命題は、現実態をそのようなもの「として」とらえる一つの可能性、一つの見方の表現という意味で、「理論であり仮定である」[AI244]と言われるのである。さらに、命題は事実としてある「なにものでもない」生の与件にもとづきつつ、その可能的な表現の一部としてプロセスに現れるという意味で、意識以前に、ある現実態にたいして現れるもっとも先鋭化された現象なのである。すなわち、命題の感受によって、はじめて「なにものでもない」生の与件にたいして「それはコップである」とするような一つの見方が可能態として現れてくるのである。

2-3 命題にもとづく知覚論と理論負荷性

命題が現実世界に対する一つの可能的表現を提示することを見た。ここから「意識的知覚」(conscious perception)がいかにかんじられるか見てみよう。感受された命題が、ある生の与件にもとづき、その与件の可能的な特徴を表現するものであったとしても、その命題を感受すること自体が意識的知覚になるわけではない。というのも命題は、あくまで意識的経験以前に提示される生の与件に対する可能的なとらえ方の一つであり、それ自体では知覚表象ではないからだ。現実的実質が命題を感受するのは、現実的実質に与えられる現実世界に関する把握の可能性を新たに提示するためである。

命題を感受した現実的実質は、そこから「意識的知覚」を生むプロセスを進めていく。そこでは、命題を感受する現実的実質が、自らに提示された命題そのものをさらにどのようにとらえ、あつかうのかが問題となってくる。現実世界に関する可能的表現としての命題が、生成している当の現実的実質にとってどのような意義を持つものなのか、すなわち現実世界をどのように知覚するのかを決定するために、

プロセスの最終相において命題は生の与件である現実態と比較・照合されることになる。

これら二つの要因（論者註：生の与件と命題）の意識的知覚への統合とは、こうして、事実としての結合体(nexus)に、それ自身から派生し、それ自身に限局され、それ自身のうちに例証された可能態をつき合わせる(confronts)ことである。こうしたつき合わせが、統合的感受の客体的与件である類的コントラストなのである。したがって、その主体的形式は実現された可能態という点からいえば、その結合体が現実は何であるかについての生き生きとした直接の意識を身にまとう。

[PR269]

「結合体」(nexus)とは、すべての感受が派生してくる物的感受によってとらえられた現実世界の一部であり、端的な事実、すなわち生の与件そのものである。ホワイトヘッドは、この結合体と、可能態としての命題を「つき合わせる」(confront)、すなわち比較・対照させることに意識の発生を認めるのである。「類的コントラスト」(generic contrast)とは、生の与件と命題とをつき合わせることでできる新たな与件である。

類的コントラストを感受することは、表現された命題を生との与件と比較・対照させることによって、現実的実質が自らのパースペクティブにおいて現実世界をいかにとらえるかという事態そのものである。現実的実質に提示された命題と生の与件とを比較・対照させることによって、生の与件が何であるかという、その生の与件のとらえ方の一つが経験として結実する。

なぜ、こうした対照をさらに与件として感受するのだろうか。類的コントラストを感受せず、現実世界における生の与件を端的な事実としてそのままとらえるだけではいけないのか。しかし、それでは、われわれの通常の知覚とは言えない。なぜなら、未だ何の分析もされていない生の与件としての結合体の感受は、複雑で豊饒な現実世界をそのまま受け取っているに過ぎないからだ。また、それにしたがって生の与件を「～として」とらえる命題がなければ、生の与件はとらえどころがなくなってしまう。生の与件と命題との照合により、意識的知覚は、事物に関してそのように知覚できるものとして成立するのである。

ここにおいて、命題はハンソンの「理論」と同様、知覚するために不可欠なものであり、生の事実をそのようなもの「として」見る一つの可能性の背景として機能している。すなわち、「それ」が何でありうるかを提示する命題が、生の与件について、いわばその知覚像のための固定因子として「負荷」されなければ、われわれの知覚は成立しないのである。したがって、命題はハンソンの言う「理論」と同様の役割を果たしているのだ。つまり、われわれは理論なしには「見る」ことができないというハンソンの主張と同様に、命題なしにはわれわれは知覚することができないのである。このような知覚構造は、プロセスにおける「現象」と「実在」の区別、すなわちわれわれが何を体験するか（実在）とわれわれがそれをどのように体験するか（現象）との区別に由来するのだ。

〈現象〉が、個別では無意味で混然とした諸契機(welter of occasions)を、意味のあるいくつかの個体的事物に単純化したとき、現象は幸運に構成されたのである。現象は世界から受け取った諸要因によって、世界を「解釈」したのである……。[AI263]

プロセスにおいて現象は、結合体（漠然とした生の事実、「実在」）を命題によって提示された内容へと単純化することで現れる。すなわち現象は、命題が提示する内容によって、混然とした結合体をそのような命題が示唆する内容をもつもの「として」、「解釈」した結果なのである。こうした経験の生

成構造は、意識以前の経験の生成活動において、「として」という形式を背負った形でわれわれの知覚が成立することを明らかにしている。この点でホワイトヘッドの命題にもとづく知覚論は、ハンソンの言う「理論負荷的」構造を有していると言えよう。というのも、命題にもとづく知覚論において、生の与件と理論としての命題との比較・対照によって解釈が施された上で知覚が生じることは、ハンソンの言うように「理論を負っている」と言えるからだ。

まとめよう。命題の役割とは、ハンソンの「理論」の構成である。さらに、類的コントラストの感受は、命題を生^{ナマ}の与件と対照する際に引き受けるという点で「理論」を「負荷」されている事態だと解釈できる。つまり、命題という理論負荷によって、世界はわれわれにそのように現れてくるものとなる。このように解釈することで、ホワイトヘッドの言う命題の役割が明確になると考えられる。

しかしながら、ハンソン自身は生^{ナマ}の与件の受容と、それにもとづく「理論」の構成という二段階的説明を拒否したのであった。命題にもとづく知覚論は、「理論」としての命題にもとづき、類的コントラストという形で生^{ナマ}の事実を解釈した上でその対象についての意識的知覚が成立する。命題にもとづく知覚論は、明らかにこの二段階的説明を採っている。この点で、ハンソンの「理論負荷性」の議論との一致は認められないのではないか。この不一致は解消できるだろうか。

ハンソンが批判した論理実証主義的認識論は、生^{ナマ}の事実を直に受容するという観察経験がまずあり、そこからさらに解釈としての理論を構成する経験があるという二段階説を採るものであった。ここには、生^{ナマ}の事実の受容とそれにもとづく理論構成という二つの経験の措定がある。一方、ホワイトヘッドの体系において、現実的実質は経験の契機であって、そのプロセスの中にさまざまな感受の相が織り込まれている。つまり、それらの相の中に、命題や類的コントラストが成立する相がたたみ込まれているのだ。こうしたプロセスにおける諸相についての「説明の仕方」はたしかに段階的な説明とならざるを得ない。というのも、各相の発生やそれらの連関には論理的というよりは因果的な順番関係や構造があるからだ。ホワイトヘッドが「発生論的分析」(genetic analysis)と呼んで行っているのは、まさにプロセスにおける諸相についての段階的分析だ。そして、このプロセスにおける理論負荷的知覚についての「説明の仕方」はまぎれもなく二段階的説明となる。しかし、これは現実的実質の発生論的分析にもとづく「説明の上」での段階と言えるのではないか。つまり、こういうことである。

意識された経験においては理論負荷的知覚の成立は一つのプロセスであり、これは段階なくして一挙に現象する。意識に先立つ経験の生成論的分析の諸段階と、意識における立ち現れ(ホワイトヘッドの云う presentational immediacy)をここで混同しなければ、ハンソンによる批判との不一致は見かけ上のものとなるのだ。

したがって、二つの経験段階を経る論理実証主義的認識論の枠組みと、一つのプロセスにおける命題にもとづく知覚論はその構造が異なったものと考えられるのである。反対に、ハンソンの理論負荷性の議論と命題にもとづく知覚論は、命題を「理論」として解釈することで、理論負荷的構造を共有していると言えるだろう。また、ハンソン自身は説明しなかった理論の発生とその負荷のメカニズムを、ハンソンの批判を回避しながら命題にもとづく知覚論は説明しうるのだ。そして、ハンソンの理論負荷性の議論にもとづき命題を「理論」として解釈する点に、ホワイトヘッド的命題の役割を理解するための一つの方途があるのである。

2-4 抽象化されたものとしての知覚

以上のような命題にもとづく知覚論によれば、意識的知覚とは現実世界を現実的実質にとって経験可能なものとしていわば切り分けた結果であり、命題はそのような切り分け、限定の可能性の一つを抽象し、現実的実質に提示するものであることがわかる。してみると、われわれの言う通常の知覚対象は、現実

世界に関して、抽象され非常に限定された経験内容であるといえないだろうか。生の与件と命題との対照が類的コントラストであり、これは「〈事実において〉と〈あるかもしれない〉との間のコントラスト」[PR267]であると言われる。そして、このコントラストをとらえる感受のしかたが意識なのである[PR267]。ホワイトヘッドは、こうして意識的知覚に関する抽象や限定を命題から派生する類的コントラストの感受の中で説明してみせるのである（意識については第4章4.4において詳細に見る）。

とはいえ、以上のような、現実世界を経験可能なものとする抽象や限定の可能性の提示が、高度な有機体にとっての経験の内容を精緻にするものではないことに留意したい。ホワイトヘッドは以下のように言うからだ。

人間知性のレベルにおいては、心的機能の役割は経験の内容に精妙さを付加することだと想定することは、誤りである。事はまったくあべこべだ。心性は、単純化の作用者である。[AI213]

現実的実質は心的極に属する概念的感受をもとに述語的パターンを感受する。「なにものでもないもの」をひとまず「単なるそれ」（論理的な主語）とし、「それ」を限定する要素が述語的パターンであった。論理的な主語と述語的パターンから構成される命題は、「なにものでもない」生の与件の特徴の一部をある仕方でも取り上げた（あるいは切り分けた）一つの可能的表現と言える。すなわち現実的実質の心的機能において、生の与件が命題という形で限定、抽象されるのだ。しかし、ホワイトヘッドによればこれは生の与件を精緻に把握するのではなく、むしろ単純化しているのである。というのも、生の与件としての現実世界は、より複雑で豊饒だからだ。この豊饒な現実世界を現実的実質は自らにたいして、命題という形で経験可能な要素として抽象、限定することによって単純なものにしている。したがって、われわれの意識対象とは現実世界についての抽象、単純化された与件の産物であり、単純化されたものについての意識なのである。

もう少し具体的に考えてみよう。仮にわれわれが、目の前にある葉の緑色に注意を集中しているとすると、このような意識的知覚の成立に寄与する命題を考えてみる。命題は「単なるそれ」に還元された論理的な主語にたいして、生の与件（現実の事態である葉の形、臭い、手触り等が概念的評価によって感受されている）の中から「緑」という述語的パターンが統合されることで、「それは緑である」という命題が感受される。もちろん「緑」はほかの多くの事物のうちにもあり、その意味で「それは緑である」という命題を感受することは、具体的な事物からイデア的な「緑性」を抽象することである。したがって、生の与件から「それ」について他の多様な述語的パターンを捨象し（変容の介入）、その特定の緑色だけについて述語化する命題を感受した場合、この命題の感受は現実の事態からの高度な抽象化と言える。そして「それは緑である」という命題と結合体との統合によって、類的コントラストは生の与件にたいして「緑として」という理論的負荷を負った意識的知覚となる。

以上のように通常われわれは、限りない複雑さを持った無数の諸要素が錯綜した経験から、共通する普遍的なただ一つの要素だけ取り出すことを「抽象」と呼ぶ。一方で、ホワイトヘッドは述語的パターンのいくつかの可能性を組み合わせることによって、複雑な構成を行うことも抽象と呼ぶ。この種の抽象を命題において検討してみると、命題のさまざまな述語的パターンを連言として組み合わせることによって、複雑性が増すにつれ、抽象性も増大すると考えられる。「それは、一枚の（かつ）緑色の（かつ）ざらざらした（かつ）葉である」といったぐあいに複雑な構成を持つ命題⁸を感受することが可能で

⁸連言的に命題を感受する場合には、もちろん矛盾もある。「ウサギ-アヒル」の絵（ジャストロー図形）において、「それはウサギでありかつアヒルである」という命題を感受することは可能であろう。しかし、類的コントラストにおける生の事実との対照によって、判断として矛盾が生じこの命題の連言は成立せず、いずれかの述語的パターンをとった命題を真とするような意識的知覚しか

あろう。このような命題の感受は、さまざまな可能性からの抽象化と言えよう。しかし、われわれはこのような可能性からの抽象化によって感受された複雑な命題にもとづく意識的知覚を、「それは緑である」という知覚よりもむしろ具体的だと感じる。

無数にある述語的パターンの組み合わせから「それは、一枚の(かつ)緑色の(かつ)ざらざらした(かつ)葉である」というより複雑な構成を持つ命題を感受する時点では、命題は現実世界に対する一つの可能的表現として抽象的なものとしてある。しかし、この命題がさらに結合体である生の与件と対照化され「理論」として機能し、「理論負荷」された類的コントラストが知覚対象として現象するとき、豊饒な生の与件にたいしてより多くの「理論を背負って」知覚することは、生の事実に近づく点でより具体的な知覚となる。したがって、命題の感受において高度の抽象化とみなされる「理論」は、現実の世界では、非常に具体的なものでありうる。こうして、生の与件との対照という類的コントラストの感受によって、抽象と具体が反転するのである。

たしかに「理論を背負って」見られた実際の一枚の緑の葉は、具体的なものとしてあるように感じられ、そのことに生の事実に近接という根拠もある。しかし、無数にある述語的パターンを一挙にすべて汲み尽くして命題を感受することは不可能である。それは結局、無数の述語的パターンの豊饒さの中に飲み込まれることになり、生の事実をそのままに受け取ることと変わらないからだ。こうして、いくつかの可能性による限定と抽象によって、はじめて現実世界は把握可能なものとなる。通常、対象は意識に現れてくると思われている。しかし、命題にもとづく知覚論にしたがえば、意識以前の生成において生の事実が命題によって経験可能な形へ限定・抽象されることで、対象が「対象として」現れているという意識的知覚がそのつど成立するのである。したがって、意識的知覚とは生の事実に対する単純化の産物なのである。命題による限定・抽象化をつうじて、はじめて意識的知覚は成立する。逆に言えば、意識的知覚とはつねにすでに、抽象化されたものとしてあると言えよう。

ここまでホワイトヘッドの命題を知覚という文脈において、ハンソンの理論負荷性を補助線として検討してきた。すなわち、命題にもとづく知覚論において意識的知覚は、ハンソンの言う理論負荷の構造をもって成立していることを見た。また、そのさい命題が「理論」として機能することを明らかにしたことで、ホワイトヘッドの言う命題の役割の一つを限定した。さらに、命題という「理論」が豊饒な生の与件のとらえ方を限定・抽象するゆえに、命題にもとづいて派生する意識的知覚が現実世界について非常に限定・抽象化されたものとなることを吟味した。

むろんホワイトヘッドの知覚論は、「象徴的関連付け」(symbolic reference)によって説明されるのが一般的である。しかし、命題にもとづいて意識的知覚を説明することに困難はないことが明らかになった。そうすると、命題にもとづく知覚論と象徴的関連付けという二つの知覚論の関係が問題となってくるだろう。したがって次の二つの問いに答えなければならない。①知覚についての両者の説明の共通点と相違点とは、どのような点なのか。②命題にもとづく知覚論と象徴的関連付けとは、どのような関係にあるのか。次章ではこれらの点を扱う。

第3章 二つの知覚論の関係性について—命題にもとづく知覚論と象徴的関連付け

人間の経験が話題になるとき、「知覚」はほとんど常に、「象徴的関連付けという混合した様態の知覚」を意味している。[PR168]

生じないと考えられる。

ホワイトヘッド自身もこのように言うため、従来、研究者たちによってホワイトヘッドの知覚論は「象徴的関連付け」(symbolic reference)によって説明されることが多い。これに対し、前節まで論者は命題を知覚論というより広い文脈に置き直し、それによって、命題にもとづく知覚論を展開した。そこにおいてこれまで看過されてきた、しかも知覚にとって不可欠な要素として命題が存在することを明らかにする課題に取り組んできた。しかしながら、従来のホワイトヘッドの知覚論に対し、命題概念を知覚論に用いる必然性が未だ論証されていない。つまり、命題を組み込まなければ、ホワイトヘッドの知覚論を十全に扱うことができないという論証が欠けているのだ。

したがって、以上のような問題に取り組むために、本章の課題は以下の間に答えることにある。①命題にもとづく知覚論と象徴的関連付けの共通点と相違点とは、どのような点なのか。②知覚についての両者の説明は、どのような関係にあるのか。これら二つの間に答えることによって、命題概念を知覚論に組み込む目論見がどのような効用をもたらすのかを論じる。まずは象徴的関連付けがどのような知覚論なのかを見る必要がある。象徴的関連付けを構成する二つの知覚様態から確認しよう。

3-1 二つの知覚様態—因果的効果と現前的直接性

われわれは流動する世界のなかに生きている。むろん、われわれも流動するものとして存在している。日月星辰、宇宙のなかに運動していないものはない。宇宙そのものだって、膨張している。われわれ自身について言えば、われわれは朝起きて夜眠るまでさまざまな活動をしているし、眠っているあいだにも身体が停止しているわけではなく、さまざまな器官が動いている。われわれを構成している細胞も代謝運動によって数年ですっかり入れ替わる。われわれの感情も、昨日と今日ではまったく異なり変化する。われわれからは静止しているように見える無機物でさえ、それを構成している原子や分子はたえず運動している。すべてが絶えることなく運動し、どんなものであれ刻々と変化を被っていく。流動していないものはこの世界にはない。したがって、このような世界の流動性を事物のもっとも具体的で本質的な特徴だとすることに異論はないだろう。ホワイトヘッドもこの世界が流動していく事態を出発点としてすべてを説明していく⁹。

さて、われわれが何かを知覚して、その知覚のなりたちを説明するときに、日常的には知覚主体と知覚対象を前提としそれらの作用・反作用によって説明する。われわれに目の前のコップが見えるのは、対象からの光線がわれわれの眼に届き、眼はその刺激を脳に伝達し脳がそれをコップとして認知することによってである。また、流麗なメロディーが聞こえてくるのは、音源から発せられる音波がわれわれの耳に届き、音波の刺激が耳から脳に伝えられ、脳がそれを音楽として認知する、こういうわけだ。

簡単な説明であっても、こうした生理学的説明は、知覚主体と知覚対象を前提とすることで初めて可能となるものだ。知覚主体と知覚対象とを前提しさえすればこれ以上に専門的にどれだけ説明が細部に

⁹ホワイトヘッドは、そもそも世界がなぜこのように流動的であるのかを説明する根拠として、「究極的なものの範疇」(The Category of the Ultimate)における「創造性」(Creativity)[PR21]を挙げている。創造性は究極的なものの範疇において、「一」と「多」と共に語られ、これらの概念の相関によって究極的なものの範疇は完結すると言われる[PR21]。潜在的な「多」から現実的な統一としての「一」への運動があり、またこの統一された「一」から「多」へと自らを投げ出す運動がある。これが現実的実質の担う生成の基本的運動なのだ。「多」と「一」は相互に前提され、この「多」から「一」への統一と「一」から「多」への自己投企の運動の動源、原因として創造性がある。

究極的な形而上学的原理は、離接において与えられた諸実質とは別の新しい実質を創り出す、離接から接合への前進である。新しい実質は、それが見出す〈多〉の全体であると同時に、またそれが残す離接的な〈多〉のうちの一である。それは、それが統合する多くの実質の間に離接的にある新しい実質である。多は一となり、一つだけ増し加える。[PR21]

究極的な形而上学的原理として創造性は、「多」や「一」という概念と共に新しい実質を創造し、その前進して行く運動性そのものを表す。現実的実質が創造性によって「作られたもの」(creature)[PR 88]だと言うのは、その生成するという運動そのものの根源である、内在的運動性を創造性が生み出しているということである。生成、統一の運動があるのは、創造性という、より根源的な原理があるからである。

およぶとしても、主体と対象との関係に関する科学的な説明としての瑕疵はない。しかし、われわれ自身も含めたこの世界が流動的なあり方をしていることを認めるならば、この流動的な世界のなかで知覚主体や知覚対象をそれだけで成立している固定点のように前提することは、世界の実相とそぐわないことになる。主体や対象はそれだけで恒常的に存在し続けるものではないからだ。となると、流動する世界の実相に即して知覚のなりたちを十全に説明しようとするならば、主体や対象を前提しない流動した状態から根本的に知覚論を展開していかなければならない。すなわち、この流動から知覚という経験が成立するまでを一つのプロセスとして描き出さなければならない。

実際行動の上では、現在が直接的な過去に順応(conformation)するという事実を、われわれは決して疑いはしない。その事実は、……経験を究極的に織りなすものに属している。現在の事実というものが、四分の一秒前といった先行する諸事実の帰結であることは明らかなのである。予期しない諸因子が介入したかもしれず、ダイナマイトが爆発したかもしれない。しかし、それがどのようなものであるにしても、とにかく現在の出来事というものは、直接的な過去の現実的性格によって課される諸制約にしたがいつつ生じてくるのである。[S46]

まずもって、ホワイトヘッドは常識的な考え方に訴える。すなわち、いかなる流動のなかでも先行する事物は後続の事物に影響を及ぼすということだ。逆に言えば、後続の事物は先行する事物のあり方に従うということだ。突然、目の前のコップが消えたり、身体のどこかがなくなるなんてことはない。それが先にあったならば、次の瞬間にもコップや身体はあるのだ。こうしてホワイトヘッドは、後続するものの在り方が先行するものの在り方によってある程度拘束され、反対に先行するものが必ず後続のものの在り方に影響を及ぼすことを、「順応」(conformation)という。そして、こうした流動の在り方を「因果的効果」(causal efficacy)と呼ぶ¹⁰。流動するこの世界にあって、知覚経験の生成はこの「因果的効果」の知覚から始まることになる。したがって、「因果的効果」の知覚様態は、経験における原始的な知覚である。

環境におけるさまざまな実在するものへの順応を知覚することは、われわれの外部的経験のなかの原始的要素である。われわれは自分たちの肉体の諸器官に順応し、またそれらを超えた向こうに横たわる茫漠たる世界というものに順応する。われわれの原始的な知覚とは茫漠とした「順応」の知覚であり、またよく判別されていない背景のなかで、より漠然とした「自分自身」と「それとはべつなもの」(another)という関係項を知覚することである。[S43]

因果的効果の知覚様態は、生成しつつある現実の実質が因果的に連綿と続いている過去からの影響を知覚する様態である。つまり、因果的効果の知覚様態は、現実世界(過去)の直接的知覚であり、現在のあり方が過去のあり方によってある程度拘束され、順応することでもある。ホワイトヘッドによれば、順応という関係性を見出しうる因果的効果の知覚様態は、「漠然として制御しがたく、情緒を帯びている」[PR178]。因果的効果の知覚様態が漠然としているのは、たとえば我々は「眼によってものを見る」

¹⁰カントは、因果律を否定したヒュームの議論を受けて、因果関係を純粹でアプリアリなカテゴリーとして提示した。カントにとって因果関係は、人間が出来事を出来事として認識するためのアプリアリな概念だ。しかし、認識主観が前提とされていないホワイトヘッドの体系においては、因果関係を固定点としての認識主観が備える超越論的な純粹悟性概念とするわけにはいかない。なぜなら、この世界の流動のなかから、認識主観も生成してこなければならぬからだ。となると、因果関係は認識主観がアプリアリに備える概念として説明するのではなく、この世界の諸事物の流動性のうちに因果的な影響関係を認めるしかないということになる。この影響関係をホワイトヘッドは因果的効果というのである。

が、通常、この「によって」ということを一々意識しないことに現れている。

しかし、視覚経験が成り立つためには、「によって」という因果的効果の知覚において成立する諸状況（ここでは眼である）が先行して成立していなければならない。我々は、事物も含めて、順応によって過去の在り方に現在の在り方を従うようにさせることを基盤とし、自らを創り、さまざまな経験を可能にさせている。持続的な事物はまずもって、順応という関係性によって成立している。こうして、因果的効果の知覚様態は、身体を含む過去の事物との直接的関係であり、この連続的な関係性が順応なのである。また、後に述べる「緊張」(strain)の概念との関連において、特に身体についての順応関係を示唆する言葉が、「身体的効果」(bodily efficacy)と呼ばれている。こうして、流動のなかからわれわれは漠とした「自分自身」を知覚するのだ。

こうした身体の連続性を知覚するとともに、われわれは対象を知覚する。しかし、この対象も最初から何らかの対象として現れてくるわけではない。単に連続性を受容しているだけで、茫漠たる世界を分節する概念的な把握の作用はまだ登場していないからだ。したがって因果的効果の知覚様態は漠然としており、この知覚様態では、たとえば眼前の灰色の石も「石」という性質の限定をされずに、「なにものでもないもの」としてある。この「なにものでもないもの」を漠然と受けとることが因果的効果の知覚様態であるのだ。「灰色」や「石」という分析がなされる前に、生成する当の現実的実質において、いわば端的な「それ」としての過去からの影響を因果的効果の知覚様態として知覚するのである。こうして、「自分自身」とは異なる「それとはべつなもの」を茫漠とした状態でプロセスは受容するのだ。

流動する世界において、まずは茫漠たる過去を知覚した。しかし、このプロセスが「今」手にしうるのは過去だけであるし、手にしているのはこの過去だけだ。そうすると、このプロセスの「今」にとって同時的な他の存在者たちのありようは知る由もない。他の存在者のありようをどのように知ることができるだろうか。

そこで、知覚の生成プロセスにおいて続いて生じるのは、同時的な存在者たちのありようを過去の情報をもとに構成するということだ。こうして、通常の知覚の成立にいたるプロセスには続いて、因果的効果の知覚様態から派生し、「それ」が特定の「色」や「形」を持つ「たんなる見え」として現れてくる「現前的直接性」(presentational immediacy)の知覚様態がある。

外部世界についてのわれわれの知覚は二種類の内容にわけられている。その一種のものは、われわれの直接的な諸感覚をわれわれが投影することによって生じる、同時的世界のよく知られた直接的な現前(immediate presentation)であり、それは同時的な物的諸実質(physical entities)の性格がわれわれにとってどう現れるかを決定している。この種のものは、われわれの周囲の直接的な世界についての経験であり、その世界はわれわれ自身の身体に関連する諸部分がどのような直接的状态にあるかに左右されるところのさまざまな感覚与件(sense-data)によって装飾された世界である。[S13-14]

われわれの通常の知覚の成立は、因果的効果の知覚による過去の受容から始まるのであった。この段階ではプロセスに与えられているものは過去の世界についての茫漠とした世界だけである。「今、ここ」としてのプロセスにおいて、同時的な他の存在者は「この」プロセスとは因果的に独立している。なぜなら、このプロセスに寄与しうるものは、それがプロセスにとって過去にあったものだけだからだ。したがって、「今」生成しているプロセスにとって、他の同時的な存在者の「今」はこのプロセスからは直接的には伺い知ることのできないものである。そうすると他の存在者の「今」のあり方は、このプロセスが与えられた過去からいわばその現れ方をこのプロセスの「今」において構成しなければならない。

そこで、プロセスはこの「今」における同時的な空間領域に過去から派生した感覚与件という網をかけることで、感覚与件によって装飾された世界を表わす。こうして、このプロセスにとって他の同時的な存在者が「今」どのようにありうるかという「見え」として提示されることになる。その結果、現前的直接性の知覚様態における同時的存在についての知覚とは、感覚与件によって明示された場所ないし領域についての知覚であって、その同時的存在それ自体についての知覚ではないことになる。それはあくまで「見え」でしかない皮相なものなのだ。

しかし、われわれがみな知っているように、灰色の石の知覚に含まれた単なる見えは、知覚者と同時的な灰色の形の見えであり、知覚者にたいして程度の差はあれ漠然と限定された空間的關係と同時的な見えなのである。[PR121]

ある感覚与件によって、ある同時的な空間領域を、その空間の形ならびに知覚者からのその空間的眺めに関して曖昧さから救い出すだけの知覚は、「現前的直接性の様態における知覚」と呼ばれる。[PR121]

現前的直接性の知覚様態では、「感覚与件」(sense-data)によって「色」や「形」、身体と環境との幾何学的空間關係が知覚される。したがって、それらの知覚は、因果的効果の知覚様態とは異なり、非常に判明なものである。それは、生成している現実的実質にたいする同時的世界の知覚であり、感覚与件が同時的世界へ「投影」(projection)されることによって、諸事物の性質が例示される。さらに空間的な領域や關係を示す点では、「判明であり、限定的であり、制御しうるし、直接的享受に適している」[PR179]。とはいえ、このようにして判明に現れる同時的な世界は、結局のところプロセスにおいて選択された感覚与件によって現れる「見え」でしかない。もしかしたら、この「見え」は誤っているかもしれない。この「見え」が現実とはまったく合致することのないとんでもない誤謬を犯しているかもしれない。なぜなら、この「見え」の正しさを保障するものは、それ自体では何もないからだ。

一方、順応という連続性を受けとる因果的効果の知覚様態は、それだけではこの世界は茫漠としており判明に現れてこない。そこで、判明ではあるものの皮相な「現象」(見え)の世界(現前的直接性の知覚様態)と、何ものにも改変不能な頑強さは持つが茫漠とした過去の「實在」(因果的効果の知覚様態)とを今一度結びつけなければならない。そして、ホワイトヘッドはこれら二つの知覚様態の関連のしかたが「象徴的」だというのだ。彼の言う象徴が意味するところを次節で確認しよう。

3-2 象徴的関連付け

人間の心は、その経験をなす構成要素のいくつかは、その経験の他の構成要素に関する意識や信念、感情、用法などを引き出す場合には、象徴的に機能しているのである。この場合、前者の一組の構成要素は「象徴」であり、後者の一連のものがその象徴の「意味」をなすのである。そして、象徴から意味への移りゆきを行う有機的機能が、「象徴的関連付け」と呼ばれるのである。[S7-8]

花言葉というものがある。バラの花言葉は「愛」であり、ユリは「純潔」を、アザミは「復讐」を表すという。花言葉は、特定の植物を象徴として抽象的な概念を表現する。ホワイトヘッドはこうした象徴のはたらきが人間のような高度な有機体の経験の成り立ちに介在しているという。

たとえば言語はこうした象徴作用を顕著に示している。ホワイトヘッドは、詩人とその詩を読む読者の例を挙げている[S12]。樹に関する叙情詩を書こうとする詩人は森の中へ散歩に行き、樹々を見る。詩人はこの樹々から適切な言葉を引き出そうとする。このとき樹々が象徴となって、引き出された言葉が意味となる。反対に、この詩人の詩を読む読者は、詩人の言葉から、「詩人が喚起したいと思う視覚的な光景や音響や情緒」[S12]をつかもうとする。この場合には、詩人の言葉が象徴となり、言葉から引き出された「視覚的な光景や音響や情緒」が意味となる。

以上のように、言語と事物との象徴的な結びつきには二重の関連性が認められる。すなわち、具体的な事物から言葉へ向かう関連と、言葉から事物へ向かう関連とである。そして、このように「象徴」から「意味」へと移行する有機的機能をホワイトヘッドは「象徴的関連付け」と呼ぶのだ。さらにホワイトヘッドは言語と事物の関係だけではなく、この象徴的なつながりがわれわれの知覚の成立に根本的に寄与しているという。すなわち、前節で見た二つの知覚様態が象徴的に関連付けられるというのである。

さて、ある二項間の関係には、その関係を可能にする共通の接点が必要なように（事件と容疑者の関係には何らかの共通の接点が必要ならば）、二つの知覚様態にもその関係を成り立たせしめる接点が必要だ。

一つの様態から派生する知覚表象(percepts)と他の様態から派生する知覚表象とのあいだには、それらの表象がなんらかのしかたで交差(intersect)しない限り、象徴的関連付けはありえない。わたしが「交差」と呼ぶことの意味は、対をなすそのような知覚表象が、共通の要素を持たなければならず、それによってそうした知覚表象が象徴的関連付けというはたらきとなるよう定められるのである。

現前的直接性と因果的効果からそれぞれ派生する知覚表象によって共有されうる、共通な構造には二つの要素がある。それは、(1)感覚与件と(2)位置(locality)、という要素なのである。[S49]

二つの知覚様態を関連付ける接点となる共通の要素が、感覚与件と位置だと言われる。どのような意味でこれらの要素が共通だと言われるのか見てみよう。まずは感覚与件についてである。

現前的直接性の知覚様態において、感覚与件は同時的空間へ投影されることでその幾何学的空間関係において同時的世界を判明な形で現前させる。つまり、プロセスの展開するパースペクティブの内で同時的存在者がどのような現れ（見え）をしているかを仮想的に示すのだ。たとえば眼前にあるトマトの「赤さ」という見えは、この感覚与件が同時的空間へ投影された結果である。したがって、この「赤さ」は現れているトマトに還元される性質ではない。では、この「赤さ」はどこから来たのか。

この知覚様態（論者注：現前的直接性の知覚様態）において、感覚は知覚者に「与えられ」ている。しかし、こうして与えられていること(donation)は、それによって現前している空間的客体、たとえば、石に帰せられるべきではない。ところで、「与えられ」ているものが、決着を見た過去からの現実的諸実質の客体化のゆえに与えられているということは、根本的な学説である。それゆえ、われわれはこうした贈与(donation)が、それらの客体化に帰せられるべきであるような現実的諸契機を探し求めるのである。[PR171]

たしかにトマトの「赤さ」は知覚者に与えられている。しかし、トマトの「赤さ」がトマトのみに帰せられるとしたら、トマトからどのようにしてわれわれは「赤さ」の感覚を引き出しているのかを説明しなければならない。すなわちこれは、感覚はある対象から知覚者にどのようにして生じるのかという

問題になる。事実、「赤さ」の感覚は知覚者において生じている。しかし、この「赤さ」が対象にのみ帰せられるとしたら、知覚者と対象とのあいだに何らかの関係がなければ「赤さ」の感覚は知覚者には生じないことになる。古典的な主客関係のモデルではこの関係が問題とされてきたし、さらには、対象が主体の意識の内で全的に現れることを暗黙の前提とさえしてきたのだ。ホワイトヘッドは、この問題をどのように解くのか。

印象は未知の原因から精神に生じると述べておきながら、視覚が「眼によって」知覚されるという常識を有するヒュームの知覚理論の不整合をホワイトヘッドは指摘する[PR170-171]。そして、ホワイトヘッドはこの常識に立ち返るのである。「赤さ」を伴う視覚は、「眼によって」生じる。したがって、この「赤さ」の知覚は眼に帰せられるべきだと考えるのだ。視覚の成立にはそもそも眼という先行する諸状態がなければならない。つまり、それらは流動する世界において先行する諸事物に由来する。知覚の生成プロセスにおいては、因果的効果の知覚表象に「赤さ」は帰せられるのだ。すなわち、過去の与件のうちに「赤さ」はあったのだ。ただ、同時的空間内における「現れ」が判明でありなおかつ因果的効果の知覚様態が茫漠としているために、「現れ」における「赤さ」はこの「現れ」に由来するのだと錯覚するのである。こうして「赤さ」という感覚与件は、因果的効果の知覚様態に由来し（眼でもって赤さを知覚する）、現前的直接性の知覚様態において同時的空間へと投影され「見え」をなす。感覚与件は、両者の知覚様態において共通の因子として機能するのである。

つづけて二つの知覚様態の接点となる共通の要素の一つである「位置」について見てみよう。

二つの知覚様態が一つの共通な世界を直接的に立証する、構造の部分的な共通性(community)というものは、その二様態が両者に共通な感覚与件を、やはり両者に共通な空間-時間体系における位置限定(localization)―さまざまに異なる、あるいは同一の―に関連付けることから生じるものである。たとえば、色というものは外部のある空間と、視覚器官としての眼に関連付けられる。[S53]

眼前のトマトの「赤さ」はトマトにあるように感じられつつ、この「赤さ」の感覚与件は眼で感じられる。この赤さは「そこ」（トマト）にあり、かつ「ここ」（眼）で感じられている。「ここ」（眼）は因果的効果の知覚様態によって限定され[S55-56]、「そこ」（トマト）は感覚与件（赤さ）が投影されることによって開かれる同時的な空間領域として限定される。知覚にはこの限定された「そこ」と「ここ」が必要だ。「そこ」と「ここ」が一つの共通な世界としてあることが、われわれの知覚する世界である。そして、いかなる知覚でも「ここ」を定めなければ「そこ」は成立しえない。なぜなら、われわれは「眼」（手、口、鼻、耳）で知覚するからだ。したがって、「ここ」と「そこ」という場所を限定し、関係づける共通な時空体系が知覚には必要なのだ。この二つの知覚様態が「ここ」と「そこ」として限定される共通の時空体系が成立する場所を「現在化(現前化)された場所」(presented locus)[PR168]という。現在化された場所は、知覚者の身体を中心とする「領域的原点」(regional origin)[PR169]であり、この原点は因果的効果の知覚様態によって成立する。一方で、この原点から現前的直接性の知覚様態において、「諸感覚によって直接例示される」[PR169]同時的空間領域も現在化された場所として展開される。こうして、「ここ」-「そこ」という区別の成立する場が現在化された場所として、二つの知覚様態に共通の要素をなしているのである。

象徴的関連付けは、以上のような二つの知覚様態に共通の感覚与件の同一性と二つの知覚様態が共有する現在化された場所の共通性を根拠に、現前的直接性の知覚様態と因果的効果の知覚様態という二つのより原初的な知覚様態の統合として説明される。

これら二つの知覚様態を一つの知覚へ融合する統合的活動が、「象徴的関連付け」とわたしが呼んだものなのである。二つの様態によってそれぞれ明らかにされたさまざまな現実が、象徴的関連付けによって、同一視されるかあるいは少なくとも、われわれの環境において相互に関係があるものとしていっしょに結びつけられる。このようにして、象徴的関連付けが行われる結果、現実の世界は実際にわれわれにとってそうであるところのものとなるわけだ。[S18]

象徴的関連付けにおいて、漠然としていた知覚の原因（因果的効果における知覚表象、たとえば「眼」、あるいは最終的に「トマト」と知覚されるところの「それ」としか言えないような漠たる事物）と判明な結果の現象（現前的直接性における知覚表象、「見え〈赤色、トマトのイメージなど〉」）とが一つの経験のうちに共在することになる。すなわち、象徴的関連付けにおいて「赤色のトマトを眼で見る」というわれわれの通常の知覚が成立するのである。このとき、現前的直接性の知覚表象が「象徴」となり、因果的効果の知覚表象が「象徴されるもの」¹¹となって、この二つの知覚様態は象徴的なつながりによって結びつけられると言われるのである。現前的直接性の知覚表象である「見え」が象徴するものによって、因果的効果の知覚表象である漠然とした事物を解釈しているのである。したがって、象徴的関連付けは、「人間の経験における解釈的要素である」[PR173]と言われるのだ。また、この「見え」は、それが派生してきたところの具体的な過去の事物と結びつけられることで、その皮相さが解消されることになる。こうして、われわれの知覚する世界は判明な現れでありつつ、具体的なものとして経験されるのである。しかしながら、つねに現前的直接性の知覚表象が「象徴」となり、因果的効果の知覚表象が「象徴されるもの」（=意味）となるわけではない。「象徴」と「意味」の役割は、固定しているわけではなく反転することもある。

経験の構成要素には、いつも象徴となりいつも意味となるようなものは、存在しないのである。
[S10]

象徴となる知覚表象と意味となる知覚表象とのあいだには、本来的区別はない。二つの種が関係性の「根拠」によって相関させられる場合、いずれの種が象徴のグループとなり、いずれの種が意味のグループとなるかは、知覚主体を構成する経験のプロセスに左右される[PR181-182]。

言語と事物との象徴的な結びつきには二重の関連性が認められていたように、知覚においても「象徴」と「象徴されるもの」（=意味）は固定化されておらず、二つの知覚表象の役割が反転することも認められている。すなわち、因果的効果の知覚表象が「象徴」となり、現前的直接性の知覚表象が「意味」となることもあるのだ。たとえば、身体が連綿と続くことの知覚が象徴しているのは、身体の「持続性」であると言えるだろう。また、身体に限らず世界が順応によって存続していくことが象徴しているのは、その世界の「歴史」であるとも言えるだろう。こうして、象徴的関連付けは知覚において象徴と意味の役割を反転させても成立するのだ。

さて、どのような知覚理論においても重要なのは正常な知覚に加えて誤った知覚を説明する能力があ

¹¹ ホワイトヘッドは「象徴」という言葉にたいして「意味」という言葉を対置する。これはバラが象徴するものは「愛」であるとか、ハトが象徴するものは「平和」だという説明をする場合には、「意味」という言葉に問題はない。すなわち、「意味」という言葉が指す内実（「愛」や「平和」）が前提されている場合にはよく理解できる。しかし、因果的効果の知覚表象は、漠然とした過去の与件だ。したがって、この知覚表象を「意味」と呼ぶと、「意味」という言葉が通常表す明確な内容が現れていない漠たる知覚表象を指す言葉としては不適切なものになってしまう。したがって、ここでは「象徴」と「象徴されるもの」という言葉を用いることにする。

るかどうかだ。ホワイトヘッドは、二つの知覚様態を統合する象徴的関連付けに、知覚の誤りの可能性を認める[PR168]。すなわち、象徴的関連付けが持つ解釈的知覚構造に誤謬の原因があるのだ。

こうした知覚（論者注：象徴的関連付け）は、誤謬を犯しうる。それはこの感受が現在化された場所の領域を、事実においては現在の領域へこのように伝達されたものではない過去からの継承と、結びつけるという意味においてである。[PR180]

「ここ-そこ」という位置が限定される現在化された場所、特に「ここ」から展開される「そこ」にある「見え」を、この「ここ」とは異なる過去の事実と結びつけることで誤謬が生じるのである。現前的直接性における知覚様態と因果的効果における知覚様態によって「それぞれ明らかにされたさまざまな現実が、象徴的関連付けによって、同一視される」[S18]と言われていた。しかし、この象徴的関連付けによる同一視が妥当でない場合があるのだ。ここに知覚の誤謬が生じるのであって、ホワイトヘッドはその例として有名なイソップの寓話を挙げる。

肉片をくわえた犬が、水面に映った犬の肉片を奪おうと、脅すために吠えたところ、本物の肉片を落としてしまった話である。この犬の不幸の原因は二つある。まず、水面に映った「見え」を実在的対象についての知覚表象として受け取ったことだ。「見え」の肉片は実在するものではない。あくまで「見え」でしかないものだ。それから、水面に映った肉片をくわえる犬の姿を、自分とは別の肉片をくわえる犬の姿の知覚表象として受け取り、自己同一視できなかったことだ。こうして、現前的直接性の知覚表象（=水面に映った犬のくわえる肉片の「見え」）と因果的効果の知覚様態（水面や、肉片を口で加えている身体が連続していることについての漠然とした知覚表象）を誤った形で（「見え」が自分とは別個の実在的対象であるものとして）で結びつける（解釈する）点に、誤った知覚すなわち錯覚が生じる。

犬のすることだからといって、この犬を馬鹿にはしてはいけない。誤った象徴的関連付けによる知覚の誤りは、因果的効果における知覚表象と現前的直接性における知覚表象との統合の仕方に生じる以上、当然人間にも生じるものだ。たとえば、「見え」において人の動きのように見えているものが、実際は木の枝や洗濯物の揺れであったというような見間違いはよくある。二つの知覚表象それ自体には、誤謬というものはない[PR168]。というのも、因果的効果の知覚表象は、連綿と続いている過去を漠然とではあるが直接に受容するかぎり、知覚そのものに誤りはない。加えて、現前的直接性の知覚表象も同様に、それが「見え」として現象するかぎり、それだけでは正しい／誤りという区別は生じない。しかしながら、投影された感覚与件に彩られた現前的直接性の知覚表象と漠然とした因果的効果の知覚表象とが関連付けられて、現実世界が解釈される限り、そこには誤謬の可能性がつねにある。しかし、ホワイトヘッドはわれわれが誤謬を犯しうることを否定的にはとらえない。

こうして一般に人間の知覚は、最も明晰に意識の内にある構成要素に関して、解釈的であるがゆえに間違いやすい。事実、間違いはより高次の有機体の特徴であり、その力によって向上的進化が存在するところの教師である。[PR168]

認識として正しいとは言えない場合でも、誤った象徴的関連付けによって新しい見方ができることもある。たとえば、夜空の星を見る場合に、端的に星々の光を見ているという見方がある一方で、同じ星々を牡牛座や天の河というように見る場合もある。過去からの影響として、星の光やそれ見るための「目」を因果的効果の知覚様態として感受している一方で、「星座」や「河」という「見え」をもたらず現前

的直接的知覚様態があり、二つの知覚様態は現在化された場所で交差し、結びつく。この場合、星を「星」として知覚している限りでは、牡牛座や天の河という「見え」が結びつけられる象徴的関連付けは、必ずしも正しい知覚とは言えない。しかしながら、星からの物理的な光線をそのまま受容しているだけでは、「牡牛座」や「天の河」といったわれわれの想像的知覚は成立しない。われわれは象徴的関連付けによって、本来的にはそうは見えないものを、それとは別な仕方で見えるものとして知覚する可能性を得るのだ¹²。

3-3 二つの知覚論の共通点

以上見てきた象徴的関連付けと、命題にもとづく知覚論との共通点を三つ見ていきたい。はじめに、象徴的関連付けは、命題にもとづく知覚論とその組成において対応させることが可能である。

まず、現前的直接性における「見え」の世界は、命題が提示する「現れ」の可能性の世界と対応する。命題は、現実世界を「それが〇〇である」として、プロセスに可能な現実世界の「見方」を提示するものであった。一方、同時的な領域へ感覚与件を投影して彩ることで同時的な存在者の仮想的な「見え」を表すのが、現前的直接性の知覚表象であった。命題と現前的直接性の知覚表象は、現実世界に対する「現象」の可能性（現実世界の現れ方のバリエーション）を示す点で同様の役割を果たしている。したがって、現前的直接性の知覚様態における「見え」の光景は、命題の提示による「～として」ある「見方」と一致する。現前的直接性の知覚表象は、命題による現実世界のとらえ方の可能性と対応するのである。

つづいて、因果的効果の知覚表象は、命題を形成するさいに必要な論理的主語ならびに類的コントラストを形成するさいに供される生の事実の役割と対応させることが可能だ。原初的な物的感受はまずもって、過去の与件を未だ概念的分析の加わらない不定の事物という形であるがままに受容するのであった。命題や類的コントラストを形成するさい、この物的感受によって、過去の与件からの継承として感受された生の事実（=結合体）が必要であった。同様に、因果的効果の知覚様態は、過去の与件を漠然とではあるが「順応」という関係によってそのまま現在に引き続くように継承する。したがって、因果的効果の知覚表象は、原初的な物的感受と同様に過去の生の事実を引き受けていると言える。以上から、命題（の論理的主語）や類的コントラストにおいてコントラストの一方をなす生の事實は、因果的効果の知覚表象と同一のものであると考えられるのである。

そして、象徴的関連付けについては、類的コントラストの形成と一致させることができるだろう。類的コントラストは、現実世界について可能な見方を提示する命題と、過去から継承された生の事実とが統合された与件であった。現前的直接性の知覚表象と命題を対応させ、因果的効果の知覚表象を生事実と一致させた今、類的コントラストは象徴的関連付けのもたらす知覚表象と一致する。したがって、命題にもとづく知覚論と象徴的関連付けは、知覚の組成において同様の構造を持つものと理解できるのだ。

つづく二つ目の共通点は、象徴的関連付けに見られる象徴作用を類的コントラストの形成にも適用できるという点である。しかし、これは一つ目の共通点に依拠している。すなわち、命題と現前的直接性の知覚表象とが、生の事実と因果的効果の知覚表象とが対応するならば、命題にもとづく知覚論において命題と生の事実とのあいだに象徴的関係を見出したとしても特別に不都合はないはずだ。

たとえば、未だ何らの分析や限定を伴わないある生の事実にもとづいて、命題が「それは〈森〉であ

¹²むろん象徴的関連付けによるホワイトヘッドの知覚論に問題がないわけではない。ロスによれば、ホワイトヘッドの知覚論には、形而上学的説明と日常的経験とのあいだに乖離があり、因果的効果と現前的直接性という二つの根本的な知覚様態にたいして挙げられる事例が、二つの原初的な知覚様態があることの証左になってはいないと指摘する。

る」という提示をする。命題は現実世界についての可能的表現であったのだから、この命題は現実世界の一部である「それ」を「〈森〉として」見る見方を提示している。命題にもとづく知覚論にしたがえば、生の事実としての結合体が命題と統合され類的コントラストとして感受されるさいには、「理論」としての命題によって不定の事実である結合体が解釈されることで、この結合体が「森」として意識的に知覚されるのであった。生の事実^{ナマ}にたいしてどの命題が「理論」として用いられるか、すなわち生の事実とそれを解釈するための「理論」とがどのような関係において統合されるのかについて命題にもとづく知覚論では扱われていなかった。しかし、象徴的関連付けの知覚表象と類的コントラストが同じ組成を有しているのならば、類的コントラストにおけるこの生の事実と命題との統合を、象徴的なつながりによってもたらされる統一として説明することもできるのではないか。いやむしろ、ホワイトヘッドが知覚の構造に象徴作用を認めるならば、命題にもとづく知覚論においても象徴作用が適用されなければならぬ。

ホワイトヘッドが知覚に認める象徴作用とは「純粋な感覚知覚を、われわれの経験におけるより原始的な諸要素の、象徴として用いること」[S5]である。すなわち、象徴的関連付けにおいては、同時的空間に投影された感覚与件によって、明らかにされた同時的存在者の現れという現前的直接性の知覚表象を「象徴」として、茫漠とした因果的効果の知覚表象を解釈することであった。そこで、命題にもとづく知覚論においては、「それは〈森〉である」という見方を提示する命題に「象徴」のはたらきを担わせよう。すると、この命題が提示する現実世界の一つの見方が「象徴」となって、「象徴されるもの」である不定の結合体が「森」という「意味」を持つものとして解釈されるのである。反対に、結合体それ自身（いわば森そのもの）が「象徴」となり、「それは〈森〉である」という見方（＝命題）がえられるはたらきも象徴の関係にある。象徴関係には、こうした象徴と意味とに転換関係があることをホワイトヘッドも述べていた[S9-10]。以上のように、類的コントラストをなす与件の関係にも象徴関係を認めることが可能だ。したがって、命題にもとづく知覚論においても、象徴作用を適用することができるだろう。

最後の共通点は、二つの知覚論の説明によってえられる日常的な知覚表象は、豊饒な経験要素から抽象化ならびに単純化されたものであるという点である。この点を、命題にもとづく知覚論については2-4において吟味した。すなわち、命題にもとづく知覚論によれば、意識的知覚とは現実世界を現実的実質にとって経験可能なものとしていわば切り分けた結果であり、命題とはそのような切り分け、限定の可能性の一つを抽象し、現実的実質に提示するものである。してみると、われわれの言う通常の知覚表象とは、現実世界に関して抽象され非常に限定された経験内容であるといえる。なぜなら、生の事実と命題との対照が類的コントラストであり、このコントラストをとらえる感受のしかたが意識であるからだ[PR267]。

ホワイトヘッドは、こうして意識的知覚に関する抽象や限定を命題から派生する類的コントラストの感受の中で説明してみせる。生の事実としての現実世界は、そこからさまざまな経験要素が引き出されうるといって複雑で豊饒であり、その現実世界を現実的実質は自らにたいして経験可能な要素として抽象、限定することによって単純なものにしている。したがって、われわれの意識的な知覚対象とは現実世界についての抽象、単純化された与件の産物であり、われわれが持ちうるのは単純化されたものについての意識なのである。

同様の抽象化、単純化は象徴的関連付けの知覚表象についても見出せる。命題の感受が経験要素の抽象化・単純化作用の端緒であったことから、それに対応する現前的直接性の知覚表象に注目しよう。現前的直接性の知覚表象について以下のように言われる。

わたしは次のことを主張する。すなわち、現前的直接性とは、同時的諸事物がわれわれの経験の中に「客体として」ある特別なあり方なのであり、この導入様態における諸因子を構成する抽象的諸実質の中には、感覚与件とよばれる抽象物—たとえば色、音、味、触感、肉体的感覚—がある、ということである。

このように「客体化」それ自体が抽象化である。なぜなら、どのような現実的事物も、その「形式的」完全性において「客体化」されないからである。[S25]

現前的直接性の知覚様態における「見え」は、因果的効果の知覚様態から派生するものの、因果的効果の知覚表象である漠然とした過去の現実世界のありようを全的に十全な形で提示しているわけではない。この「見え」は漠然とした生の事実のうちにある諸要素を抽象して展開される。つまり、現前的直接性の知覚様態が、直接的かつ判明に知覚されるのは、因果的効果の知覚表象からその要素（感覚与件）を抽象化し、それらの感覚与件が同時的な空間領域を装飾することで、同時的な存在者の在り方について限定された「見え」の世界が現れるからだ。この「見え」の世界は、茫漠たる現実世界から抽象された感覚与件によって「提示される」(presented)世界だ。

こうして、現前的直接性の知覚様態は、流動のうちでとらえられた過去の茫漠とした現実世界にたいして、それらをたとえば「森として」知覚させる抽象化作用なのだ。この知覚表象は、現実世界にたいして限定され単純化されたものとなる。そして、象徴的関連付けは、因果的効果の知覚様態がもたらす生の事実と現前的直接性の知覚様態によって提示された「見え」との統合によって生じる。二つの知覚表象間における象徴的つながりによって、茫漠とした世界が判明な「見え」によって解釈される。その結果、象徴的関連付けによる知覚表象は現実世界にたいして単純化された知覚表象として成立することになる。したがって、原初的な知覚様態からの抽象化作用によって、現実世界が単純化されて知覚されるという点も二つの知覚論において共通のものだと言えるのだ。

以上より、象徴的関連付けと命題にもとづく知覚論は、①その組成において同様の構造を持ち、②両者の土台となる与件に象徴関係を見出すことができ、③知覚における抽象作用によって現実世界について単純化された知覚表象をわれわれが持つという、三つの共通点を持つことを確認した。これらの共通点からは、二つの知覚論は一致するよう見える。しかしながら、二つの知覚論には相違点があることも指摘できる。

3-4 二つの知覚論の相違点

象徴的関連付けにおいて、現前的直接性と因果的効果の知覚様態の結びつき方に誤謬の生じる可能性があることが言われていた。この誤謬は必ずしも否定的な意味を持たない。なぜなら、事物についての直接的知覚である二つの根本的知覚様態の表象内容の結びつきに誤謬があるからこそ、すなわちそれまでになかった新しい見方が結びつけられることで、象徴的関連付けによる知覚表象が新たな「行動や、感情、情緒、信念などを惹起しうる」[S6]からである。たとえば、矢印を見て、その方向に向かうというのは、矢印を端的に形象として見ているだけでなく、「ある方向に向かうよう指示する記号」としての「見え」との結びつきがなければならぬ。この結びつきは矢印の形象そのものを基準とすれば、誤謬と考えられる。だが、この形象と記号との、すなわち象徴と意味との結びつきによって、矢印の知覚が、われわれの続く行動を引き起こすのである。

ところが、この誤謬を判断する機構の説明が象徴的関連付けには与えられていない。因果的効果の様態において端的に星の光を知覚し、現前的直接性の様態においてその光について星座や天の河のような「見え」を知覚しているとしても、「星座や天の河のように見える」という象徴的関連付けがそのつど

真や偽であるという判断はどのようになされるのだろうか。二つの知覚様態の結びつき方を、すなわち象徴と意味との結びつきの正しさを判断する機構がないのだ。象徴的関連付けについては、こうした判断論についての問題が残るのである。

他方、命題にもとづく知覚論には、最終的な意識的知覚となる類的コントラストの感受において、生の事実である結合体と命題との照合において判断が行われている。

事実から派生した理論としての命題と生の事実である結合体は、現実的実質の生成過程において、別個のものである。すなわち、理論と生の事実は異なる。こうした位相の異なるものをコントラスト化することによって、意識的知覚（判断の最も原始的な形式）を生むと言われる。そして、こうした原始的な意識の発生段階で、ある種の判断が行われている。命題と結合体との照合関係に従って、判断は三種（yes-form、no-form、suspense-form）に分かれている[PR 270]。命題と結合体のコントラスト化は、事実に関する理論と事実そのものをつき合わせことであり、三種の判断は、理論と事実が整合するかどうかの分類なのである。理論と事実を整合するものとして受け取る感受（yes-form の感受）、理論と事実が整合せず、「真なるものとしては感じられない」形式の感受(no-form の感受)、理論と事実が無関係なものとして示され、判断が留保される感受(suspense-form)がある。これらの判断は感受であり、理論としての命題と事実としての結合体の照合関係をコントラストとして捉えている。命題にもとづく知覚論においては、象徴的関連付けでは説明されていなかった現実世界の「見え」と生の与件である結合体との統合に判断の形式を認め、意識的知覚が分析されている。ここに、命題にもとづく知覚論と象徴的関連付けの相違点として判断論の有無が挙げられる。

続いて、二つの知覚論の相違点をもう一つ考えてみたい。

現前的直接性とは、われわれ自身の経験を構成する一要素として現れてくる、同時的な外部世界に関するわれわれの直接的な知覚である。このような現れにおいては、世界は現実的諸事物—われわれがそうであるのと同じ意味で現実的な諸事物の—一つの共同社会として自らを提示する [S21]。

現前的直接性の知覚様態における「見え」の世界は、「空間的遠近や感覚所与と結びついた空間的ひろがり」[S15]を示す。同時的世界においては、生成しつつある知覚主体である現実的実質と因果的関係を持たないが、「実際上は、知覚する主体の現実世界と同一である」[PR318]外部世界の情報を現前的直接性の知覚表象は提示する。すなわち、現前的直接性の知覚様態では、自らにたいして他の現実的実質が空間的にどのような位置づけや関係を持っているのかが知覚される。すなわち、「ここ」にたいして「そこ」という外部的領域が感覚与件に彩られた「現在化された場所」として展開されるのだ。このように現前的直接性の知覚様態が現在の同時的空間領域を客体化（幾何学的、延長的関係を例示）することが可能なのは、この知覚様態の前提として「延長連続体」(extensive continuum)に含まれる延長的図式があるからである（延長連続体については第4章 4-2 において扱う）。同時的世界は、延長連続体によって、延長的関係性を保持することで知覚される。

他方、因果的効果の知覚様態については以下のように言われる。

たとえば、M（論者注：知覚主体 M）にとっての与件を提供する、決着を見た世界の現実的諸生起が存在する。これらは M の因果的過去のうちに見出される。さらに、M がそれらの与件の一因になるみずからの可能性を、それらのために限定するところの潜在的諸生起が存在する。これらは M の因果的未来のうちに見出される。また、M の因果的過去にも、M の因果的未來にも見出

されない現実的諸生起も存在する。このような現実的諸生起は、Mの「同時的なもの」と名づけられる。これら三つの場所は、因果的効果の純粹な様態との関連によってのみ限定されるのである。[PR123]

因果的効果の知覚様態は、具体的に言えば、身体が連綿と続く感じであり、身体がそれを越えた世界から働きかけられているという感じを知覚することである。こうした因果的効果の知覚様態によって限定される領域として、因果的な過去、因果的な未来、同時的世界がある。これらの領域は、先の現前的直接性における空間的關係の知覚に対し、知覚主体である現実的実質との時間的關係を示す。また、現前的直接性の知覚様態と同様に、現実的実質を中心点として、それと相対的に過去、現在、未来の領域を限定するためには、この土台に「延長連続体」に含まれる延長的図式がある。延長的図式が前提になれば、現に今、生成している現実的実質を超えた過去や未来という俯瞰的視点は現れないからだ。

こうして、象徴的関連付けを構成する原初的知覚様態である、現前的直接性と因果的効果の知覚様態はそれぞれ、他の事物との空間的關係性や時間的連続性を示す。しかしながら、命題にもとづく知覚論においては意識の発生までの詳細な経験要素の分析や判断の機構の説明は可能であるものの、他の現実的実質との空間的關係性や時間的連続性を説明する手立てはない。というのも、命題にもとづく知覚論は、一つの現実的実質の生成に内在的に意識的知覚に至るプロセスを説明しているからである。命題にもとづく知覚論は、プロセスにおいて与えられたもの（実在）をどのように経験するのか（現象）を説明する点に主眼があるのだ。この点に、二つの知覚論の相違点があると認められるのである。

3-5 二つの知覚論の關係性について

ここまで、二つの知覚論の共通点、相違点を見てきた。その相違点から、二つの知覚論を完全に一致させることはできないだろう。では、二つの知覚論はどのような関係にあるものなのかを考えなければならない。この問いにたいして以下のように答えられるのではないだろうか。すなわち、象徴的関連付けは知覚経験の構造についての一般的説明であり、命題にもとづく知覚論は、意識的知覚が発生するまでのプロセスを描く特殊事例の説明という位置づけになる。そして、二つの説明の要点には違いもある。

象徴的関連付けにおいては、現在化された場所という現実的実質が知覚しつつある場所を中心とし、他の現実的実質との時間的ならびに空間的關係の解明に要点が置かれている。つまり、知覚者とその他の現実的実質との時空間的關係における、いわば知覚の現場についての議論が主眼にあるのだ。そして、この場所についての議論は、さらに『過程と実在』第四篇「緊張の場所」(strain-loci)において詳細に検討される内容につながる。他方、命題にもとづく知覚論は、現実的実質の感受の派生を分析し、意識的知覚がどのように生じるのかを説明する。すなわち、われわれが経験しているものが何であるかを説明するのだ。この説明では、生成している現実的実質に内在的な知覚の分析がなされていると考えられる。そして、命題の感受からその判断についての分析が可能になり、真理や美といった概念の検討につながる射程を持っている。

以上のように、二つの知覚論は知覚について説明するものの役割が異なる。では、こうした相違は何に起因するのか。二つの知覚論の相違は、ホワイトヘッドが言う「発生論的分析」(genetic analysis)と「座標的分析」(coordinate analysis)という現実的実質についての二つの分析の仕方の違いにもとづくと考えられないだろうか。発生論的分析においては、現実的実質はプロセスとみなされ、相から相へと成長するプロセスの内実が分析される。この分析において、命題にもとづく知覚論は、意識的知覚へと至る経験の発生を説明する役割があると考えられる。したがって、命題にもとづく知覚論は現実的実質の生成過程において内在的に意識的知覚の発生を説明するのである。

一方、座標的分析においては、延長的図式を前提とした現実的実質どうしの関係の仕方がいわば俯瞰的に分析される。ここにおいて、象徴的関連付けは、現に起きている知覚の現場というものを説明する役割がある。特に象徴的関連付けの構成要素である現前的直接性の知覚様態は、感覚与件による同時的世界の知覚であり、こうした各々の現実的実質の空間的關係を把握する知覚様態は座標的分析のもとで初めて語るができるものである。

こうした経験の分析の仕方の違いをもとに改めて二つの知覚論を考えた場合に、命題にもとづく知覚論の必要性、妥当性を論じる視点が得られる。命題概念を知覚論に組み込む目論見がどのような効用をもたらすのかを以上の二つの知覚論の比較から考えてみよう。現前的直接性の知覚様態が同時的空間に感覚与件を投影することで現れる同時的存在者の「見え」であることは、繰り返して述べてきた。しかし、この「見え」がどのような「見え」なのかについては、感覚与件によって説明されるにすぎない。

色、音、肉体的感覚、味、匂いというような諸性質は、延長的關係性によって導入されたもろのパースペクティブと共に、同時的な現実的諸実質がそれによってわれわれの構造の要素となっているような、關係的な永遠的客体なのである。これは、(前の章の第七節において)「現前的客体化」と名づけられたタイプの客体化である。[PR61]

現前的直接性の知覚様態において同時的世界の「見え」をもたらす感覚与件は永遠的客体であることが言われている。そして、この永遠的客体は命題において述語的パターンとなるものであった。命題と現前的直接性の知覚表象は、永遠的客体によって現実世界に対する「現象」の可能性(現実世界の現れ方のバリエーション)を示す点で同様の役割を果たしていることはすでに述べた。

現前的直接性の知覚様態において重要なのは感覚与件が示す同時的領域であり、同時的領域において「この」感覚を「そこ」において「今」感じているという事実を説明する。トマトの赤さをわれわれは眼でもって、トマトのうちに感じているのである。たしかに現前的直接性の知覚様態はこうした同時的空間領域における知覚の成り立ちを説明するが、「見え」としての同時的世界の内容は比較的簡単に説明される(灰色の石を知覚する例、色、音、味、匂いといった五感による感覚の例など)。すなわち、どのようにして「見え」が現れるのかは説明されるが、どのような「見え」が現れうるかについては詳細には語られないのだ。

一方で、命題が生ナマの事実についてそれがどのようにプロセスに現れうるかを提示する点では、命題は現前的直接性の知覚表象よりもその説明においてはるかに豊かな内容を有している。命題は、理論として現実世界を解釈する仕方を五感による感覚に制限せずに展開するからだ。命題は事実の半影や事実の否定、非実在的対象もプロセスに提示することが可能であった。確定した事実の裏には、現象することのなかった無数の事実の半影や否定が可能態としてあり、それらは現象と実在のはざまに控えている。そして、ある知覚経験の成立にもその知覚経験の裏にある果てしない選択肢があり、選ばれる可能性があったのに選ばれなかったものすべてがつかまっている。われわれの経験は有限の現にあった事実を基底とはしているが、経験をなしているのはむしろ無限ともいえる可能性のほうだ。理論としての命題による事実の解釈は多義的で、さまざまな解釈の可能性があり、一つの命題の背景にもそれと関わる無数の要素が控えているからだ。

たとえば、「トマトは赤である」という命題でさえも、複雑で多様な、ときに自明ではない前提や背景を有している。暗闇のなかや、色盲の人にとっては「トマトは赤である」とは限らない。また、もしこのトマトが他の何ものとも関わらずに存在するならば、光との關係を失えば色を失い、重力との關係を失えば重さもなくなる。したがって、「トマトは赤である」という命題は、知覚者の身体やトマトを

照らす日光などからなる環境ないしは状況に依存して成立しているのだ。そればかりか、「トマトは赤である」という命題は、それが「青ではない」、「トマトではない」（＝「リンゴである」や「ミカンである」）など考える限りの「～ではない」という、「そうでなかった」可能性も背景に携えていなければならない。なぜなら、そうした関係をなす背景を持っていなければ、それをただ独立自存する赤いトマトとして説明しなければならないからだ。そして、何にもよらず端的に赤いトマトとして知覚されるようなものは存在しえない。

こうして、「トマトは赤である」という命題にもとづく知覚には、この知覚をなすための無数の可能態が背景として控えているし、これらの背景があって初めて「トマトは赤である」という命題も成立しうるのだ。われわれの知覚の背後には、これらの無数の命題が背景をなしているのだ。したがって、命題概念を知覚論に組み込むことの効用は、知覚経験を成り立たせるために必要な、以上のような関係性にもとづく背景を説明できるということにある。現前的直接性の知覚表象は、空間的な「見え」が現れる構造については説明が可能だが、その「見え」がどのようなものでありうるか、すなわちわれわれが何を経験しうるのかについては語らないし、語るができない。一方で、命題は、われわれが生まの事実である「実在」をどのように経験しうるのかについての可能性を語ることができる。むしろ、現前的直接性の知覚表象と命題とでは説明するものの役割が異なる。しかし、命題を知覚論に組み込まなければならない理由は、命題が、われわれがどのような経験をしうるのかを提示するモノだからだ。したがって、ホワイトヘッドの体系においてわれわれの持つさまざまな知覚経験を十全に説明するためには、命題が必要なのである。

さて、知覚論において命題の役割が肝要であり、命題にもとづく知覚論の必要性が理解されるならば、ホワイトヘッドの体系のうちに象徴的関連付けと命題にもとづく知覚論という二つの知覚論が並立することになる。しかし、ホワイトヘッドの哲学が一つの統合的な体系をなしているならば、二つの競合する知覚論が別個にあると考えるのは、ナンセンスだろう。そこで、二つの知覚論は、説明するものの役割が見かけ上異なっているものの、同じ知覚を別な様相で説明しているにすぎないと考えたい。このように二つの知覚論を総合的に解釈するために、二つの知覚論のあいだに共通の接点を見出さなければならない。

第4章 二つの知覚論の統合的解釈にむけて

象徴的関連付けと命題にもとづく知覚論—説明をするものの役割が異なるというだけで、一つの体系において二つの知覚論を並立させるのは整合的ではない。ホワイトヘッド自身が象徴的関連付けを知覚論として展開している以上、命題にもとづく知覚論は知覚論としての地位を失わなければならないのだろうか。しかしながら、プロセスにおいて命題が「理論」として機能し、われわれが現実世界をいかに経験しうるかという可能性を提示する以上、知覚においてもこの命題の役割を看過することはできない。

そこで、二つの知覚論を統合的に解釈できるように以下のような戦略を試みる。まず、知覚という事態は一つの経験であり、それを説明する理論も一つであり、命題はその理論の構成要素だと考えよう。したがって、象徴的関連付けを主とする知覚論としたうえで、命題にもとづく知覚論については、象徴的関連付けを補完する「知覚論」であることを示そう。そのためには、象徴的関連付けという一つの知覚論の内部に命題を位置づけ、しかもこの知覚論に命題が不可欠なものとしてあるということを示さなければならない。この戦略が上手くいけば、二つの知覚論の従属関係を示すことで二つの知覚論が並立するという問題が回避されつつ、象徴的関連付けという一つの知覚論において命題が果たす役割も確保される。この戦略を可能にするためには、以下の二つの課題に対処する必要がある。

- ① 命題が知覚論において重要な役割を果たしており、命題なしには知覚論は成立しえないということを示すこと。
- ② 象徴的関連付けという知覚論のうちに命題との関連を見出すこと。

①の課題について、命題が知覚において「理論」として生の事物を解釈する役割を果たしているという点については第1章、第2章において論じた。しかし、今度は知覚論における命題の必然性を象徴的関連付けにたいして説明する必要がある。そして、①の課題は②の課題がクリアされないと戦略上意味をなさない。②の課題にたいして行うのは、象徴的関連付けにおいて命題がある役割を果たしていることを例証することである。しかし、②の課題は、チャレンジングなものとなる。なぜなら、象徴的関連付けについて述べられている箇所なかで、命題が登場するテキスト上の証左はないからだ¹³。

そこで、第3章3-3で見たように、命題が現前的直接性の知覚表象と対応することに注目したい。現前的直接性の知覚様態によって明らかになる同時的世界の知覚の成立に、命題が関与していると見られる箇所があるからだ。現前的直接性の知覚様態における「ここ」-「そこ」という区別の成立する場である現在化された場所をホワイトヘッドは、『過程と实在』第四部第四章「緊張」(strains)、第五章「測定」(measurement)で展開される「緊張の場所」(strain-loci)と同一視する。この「緊張の場所」に命題（正確には命題的感受）が現れるのだ。したがって、本章ではまず「緊張の場所」について吟味する。

さて、前章で述べたように「眼でもってトマトがそこにあることを知覚する」ことの根底には、まず、眼「でもって」という過去からの諸条件を引き受ける事態がなければならない。過去の与件が現在において順応という形で因果的に引き継がれることで、事物（トマトや眼）が連続的に存続している。こうして、事物の連続性ということが因果的効果の知覚様態によって説明された。一方で、この現在において開かれる同時的な存在者の現れ（トマト像、赤さ、「ここ」ではなく「そこ」にあるということ）が現前的直接性の知覚様態によって、空間的断面のように展開される。時間的な持続が座標の横軸にあると考えるならば、同時的世界の現れである空間的断面は縦軸として考えられる。しかし、この座標系自体が今生成しているこの現実的実質に固有のものであり、他の現実的実質もそれぞれが固有の座標系を相対的に持ちうる。

各々の現実的実質がその生成において固有のパースペクティブを持ち、「すべての現実的実質は他のすべての現実的実質のうちに現前している」[PR50]というのがホワイトヘッドによって「相対性の原理」(principle of relativity)として定式化されている事態である。すべての現実的実質がお互いにたいして現前し、連続的な事物の存続と同時的な世界が交差する場所が「緊張の場所」である。そして、主として「緊張の場所」は同時的世界がこの現実的実質においてどのように開示されるかを詳細に説明する。まずは、「緊張の場所」において展開される同時的世界がどのような世界なのか見てみよう。

4-1 同時的世界について

現前的直接性の知覚様態は、「感覚による同時的世界についてのわれわれの知覚である」[PR311]と言われる。緊張の場所において展開される同時的世界についてまず、同時的世界という言葉で含意されている事態について一つ例を挙げて考えてみよう。

たとえば、われわれが一千光年離れている星雲を見ているとする。しかし、それはその星雲の現在の姿を見ているわけでもないし、一千光年分の過去を振り返っているわけでもない[PR324]。われわれは、

¹³ 『象徴作用』そして『過程と实在』第二部第八章「象徴的関連付け」におけるいずれの箇所においても、命題という言葉すら出てこないし、命題の関与を認められる箇所もない。

われわれの現在においてそれらの星雲が発したとされる光を見ているに過ぎない。つまり、われわれは過去の光をわれわれの現在において見ているのだ。だから、われわれが今、その光を見ているとしても、その星雲の現在においては、それらの星雲は消滅しているかもしれないのである。したがって、われわれはその星雲の発した過去の光を、われわれにとって同時的なものとして現在の空間において知覚しているに過ぎないのだ。

こうして、星雲の「現れ」（これは星雲にとっての過去である）は、現在の星雲の在り方とは直接的な関係性を持たない。現在の星雲は、われわれの現在の知覚経験にたいして、因果的に独立しているのだ。したがって、同時的な世界における現れは、現在の知覚主体にとっては知覚対象の過去の姿であり、知覚対象の現在の姿はわれわれにとってはうかがい知ることができない。

しかしながら、われわれはわれわれの現在において、それが「そこ」にあるように知覚しているし、「そこ」をわれわれにとっての同時的空間として知覚している。前章で見たように、象徴的関連付けは、因果的効果の知覚様態と現前的直接性の知覚様態という二つの根本的知覚様態の統合の産物である。この統合には二つの知覚様態に共通な構造の基盤があるとされた。それは、「感覚与件」と「位置」であった。すなわち、知覚には、感覚与件によって提示されて「そこ」にある、対象に関するある種の「現れ」（五感による感覚）があるばかりではなく、「ここ」（身体）においてそれを感じる、「そこ」と「ここ」との場所の規定が必要だというのだ。一千光年離れた星雲の光にしる目の前のマグカップにしる、それらを私が「今-ここ」において「そこ」に見る。この知覚は、私の「今-ここ」から展開され、そのうちに「そこ」を含むパースペクティブを持つ。私の「ここ」や、「ここ」にたいする「そこ」を含むパースペクティブが、知覚経験の内に本質的な要素としてあることがわかるだろう。

以上の例で見たように同時的という言葉で含意されているのは、まず知覚主体の現在を基準とした同時性であるということだ。そして他方では、知覚主体の現在と知覚対象の現在が相対的であるがゆえに、知覚対象の現在のあり方は知覚主体から因果的に独立しているということでもある。したがって、われわれに知覚されている対象は知覚主体にたいしてあくまで同時的な「現れ」でしかない。その結果、「そこ」に現れる「見え」は、現在の知覚主体が現在の（この知覚対象にとって現在の）知覚対象と直接的な関係を持たないゆえに、「虚像的」(delusive)[PR122]とまで言われる。

とはいえ、同時的世界について現前的直接性の知覚様態が持つこうした知覚構造は、一千光年離れている星雲にのみ適用される特殊なものではない。われわれが、われわれにとって現在の同時的空間に星雲の姿を見出すのと同様に、目の前の本やマグカップといった近傍の対象についても「そこ」という同時的空間に現れる「見え」としてホワイトヘッドは、現前的直接性の知覚様態を説明する。

さて、以上のような同時的世界についての知覚経験から引き出される問題が二つある。

- ①星雲を見ているわれわれと星雲そのものはそれぞれの現在を持ち、相互に直接的な関係を持たない。それにもかかわらず、われわれは「そこ」にあるものとして星雲を眺めている。現在の星雲との直接的な関係を持たずして、われわれはなぜ星雲を眺めることができるのか。
- ②われわれにたいして「そこ」を含む同時的世界の知覚は、経験においてどのように成立しているだろうか。つまるところ、同時的な「そこ」はどのようにして限定されるのか。

まずは、①の問題から考えてみたい。同時的な存在者は、相互に直接的な関係性を持たない。それに対して、ホワイトヘッドは同時的な存在者どうしの関係を間接的な内在関係として、以下のように説明する。

こうして、同時的諸契機相互のある間接的内在というものがある。というのは、もしAとBが同時的であり、Cがそれら両者の過去のうちにあるとすれば、AとBはそれぞれ、未来がその過去に内在的でありうるという仕方において、ある意味でCに内在している。しかし、CはAとBの両方において客体的に不死である。こうして、この間接的な意味で、AはBに、BはAに内在している。だが、Aの客体的不死性はBのうちでは働かず、Bの客体的不死性はAのうちでは働かない。個々の完結した現実態としては、AはBから覆い隠され、BはAから覆い隠されている。[AI195-196]

AとBとが同時的な存在者であり、Cが両者に共通な過去であるならば、CはAとBの両方に直接的にかかわる過去として影響を及ぼす。逆に言えば、Cをその成立の要素とすることによって、AとBの現在がある。つまり、Cという過去にはAやBという結果になるような要因が含まれていたのである。したがって、このような意味でCにとっての未来であるAとBは、過去であるCのうちにいわば萌芽のように内在していたと言える。

客体的不死性というのは、生成するプロセスがその活動を終え、確定した事物となって現在における直接的活動性を失っても、次のプロセスの新たな与件（頑強なる事実）としてあり続ける性質のことを言う。つまり、過去は消滅するわけではなく、次のプロセスを構成する与件として「潜在的な」(potential)様態で「ある」という意味で不死となる。ここでは、Cという過去は消滅したのではなく、AとBという未来において、AとBを構成する与件として機能しているということだ。

Cのなかには未来が過去に内在するという意味で、AとBが含まれている。両者を含むCがAという未来に帰結するとき、AはCのうちにあったBの萌芽も潜在的に受け取っている。Bも同様に、CのうちにあったAを潜在的に受容する。このようにして、AとBは、それぞれのうちにCを媒介として内在すると言う意味で、間接的に内在すると言われるのである。しかしながら、間接的に内在するAとBすなわち、現在のAに内在するBと現在のBに内在するAは、互いに対する過去の情報にもとづいた現在の「現れ」という装いでしか機能しない。すなわち、間接的に内在化されたAとBは、やはり「虚像的」なのである。したがって、現在のAに対する現在のB、現在のBに対する現在のAは覆い隠されたままなのである。

以上のような間接的内在によって同時的存在者どうしは関係を持つことができるようだ。とはいえ、このような形式的な説明では同時的存在者の間接的内在という事態が上手くイメージできないかもしれない。ホワイトヘッドから具体的な説明を引き出そう。

たとえば、われわれは同時的な椅子を見るが、それをわれわれの眼で見る。また、われわれは同時的な椅子に触れるが、それを手で触れる。こうして、色は一方では椅子を、他方では眼を、主体の経験の要素として客体化する。また、触れることは、一方では椅子を、一方では手を、主体の経験の要素として客体化する。しかし、眼と手は過去（ほとんど直接的な過去）のうちにあり、椅子は現在のうちにある。このように客体化された椅子は、一つの結合体としてその統一状態にある現実的諸実質からなる同時的な結合体の客体化である。この結合体は、その構造に関して、その展望的[perspective]関係を伴った空間的領域によって、例示される。[PR62-63]

一千光年離れた星雲が現在の姿をわれわれに見せることがないように、同時的な椅子もその現在の姿をわれわれに見せない。しかし、われわれはたしかに見たり、触れたりすることで、その椅子を知覚す

る。それではわれわれが知覚しているものは何なのか。それは、過去からの順応という関係において継承された眼や手が伝達するもの（色や触覚）である。すなわち、過去の椅子の在り方に含まれていた色が、一方では椅子の在り方の要素（椅子の色）として現れ、他方では色を見るという現在の眼の在り方を決定する経験の要素として機能する。触れることにおいても、過去の椅子に対する触覚が、一方では椅子の在り方の要素（その質感や形状など）として現れ、他方では椅子に触れているという現在の手の在り方を決定する経験の要素として働いている。

現在の椅子そのものが原理的には不可知なものであるとしても、手や眼が伝える過去の椅子の在り方は、われわれにとっても現在の椅子にとっても共通のものである。したがって、現在の椅子はその過去の椅子の諸状態を継承して成立している（椅子自身の在り方も過去からの順応という関係性によって継承される）ため、過去の椅子の在り方には、その時点では未来であった現在の椅子の在り方が内在していたと言えるのである。

さて、眼と手が過去からの継承のうちにあるのにたいして、知覚されている椅子はわれわれの現在のうちにある。この椅子は、それを知覚している現在のわれわれとはそれ自体として直接的に関わりを持たないが、手や眼によって伝達された過去の椅子の情報によって、色や質感、形状を備えた「椅子」という性質をまとった姿でわれわれに知覚されている。すなわち、われわれが知覚しているのはあくまでそれらの「現れ」としての椅子であるが、椅子として現れるモノは現実的諸実質からなる（われわれと）同時的な結合体として存在している。そして、この結合体がどのような構造を持つモノであるか、すなわちどのような「現れ」を持ちうるかは、われわれの現在において展開されるパースペクティブを備えた空間的領域に示される。つまり、われわれの持つ同時的世界のパースペクティブのうちで、われわれが「ここ」（眼あるいは手）で、「そこ」に椅子を見出す（あるいは触れる）という「ここ」と「そこ」という空間的領域に「現れ」が例示されるというのだ。

同時的存在者との間接的内在関係からさらに問わねばならないのは、さきに挙げた②の問題である。それは、われわれは同時的世界のパースペクティブ、さらにはこのパースペクティブにおける「ここ」と「そこ」という空間的領域をどのように知覚しているのかという問題である。この問いに答えるのが、緊張の場所の議論である。

4-2 緊張の場所と象徴的関連付け

ホワイトヘッドの体系において、経験の根本的構成要素である現実的実質はそれぞれが固有の現在において生成し、そのプロセスを展開する。しかしながら、「この」現実的実質という観点からしか他の現実的実質を語りえない以上、「各々の現実的実質がそれぞれ固有の現在において生成している」と言えるような、生成しているすべての現実的実質を見渡すことができる俯瞰的な視点を、「この」現実的実質は本来持ちえない。

このことは、一千光年離れた星雲とわれわれの関係と同様である。現在の星雲の在り方と、星雲の過去の光を現在の星雲として眺める現在の私は、直接的には関係しえない。だから、現在の私は、現在の星雲がいかなる状態にあるかを知りえないのだ。そして、このことは星雲のような時空的に遠方にある存在者に限られず、われわれが日常的に接する近傍の存在者たちにも妥当する。

ホワイトヘッドの体系では、すべての現実的実質がその生成において主体的に活動し、またその活動性を失えば主体性は失われ、後続の新たな現実的実質の主体的活動の与件として供与される。こうして、生成における主体的な活動は「今-ここ」という立脚点となることを免れえない。その結果、他のすべての存在者については「この」現実的実質の現在において、それらの存在者の現在におけるあり方を直接的に把握することができないということを意味する。したがって、主体的に活動する「この」現実的実

質に定位しつつ、他の現実的実質の現在を間接的な形で把握する方途が「座標的分析」(coordinate analysis)として語られる。「この」現実的実質に定位しながら、この現実的実質が因果的に関係することのない他の現実的諸実質との関係を、間接的内在の関係性として分析しうるのは、「延長連続体」(extensive continuum)が前提とされているからだ。

一千光年離れた星雲と現在のわれわれが因果的に独立した存在者であるとはいえ、われわれと星雲とのあいだが空虚であるわけではない。われわれが「そこ」に星雲を知覚できるのは、われわれと星雲が因果的に独立していても、「ここ」と「そこ」をなす基底に現実的諸実質からなる延長連続体があるからだ。

延長連続体というものは、次のようなさまざまな諸関係の結びつきによって一体となった諸実質からなる複合体なのである。すなわち、部分に対する全体の関係、共通部分をもつ重なり合いの関係、接触の関係、これらの原初的關係に由来する他の諸関係の関係である。「連続体」という概念は、不定の可分性という特性と、無制限の延長という特性とを含んでいる。非実質は境界がないゆえに、いかなる場合にも、実質の彼方には実質が存在する。この延長連続体は、世界の全過程の初めから終りまでのあらゆる可能な立脚点の連帯性を表現しているのである。

[PR66]

延長連続体は、現実的諸実質がさまざまな関係性によって結びつけられた複合体として存在する。もろもろの現実的諸実質がバラバラにあり、その離接のあいだに空虚があるのではない。そうではなく、現実的諸実質は連続体としてどこまでも繋がっており、延長連続体は現実的諸実質が満ちた空間的延長を持っている。また、すべての現実的実質についてそれぞれが展開しうる立脚点としての「今-ここ」も連続化しており、この延長連続体は時間の連続性も備えている。つまり、延長連続体はすべての「今」が未分化のまま連続した時間的連続体でもあるのだ。こうして、延長連続体は時空連続体とも呼ばれる。

こうした延長連続体を、現実的諸実質が原子化する[PR67]と言われる。連続体を原子化するというのは、延長連続体を区分することである。延長連続体を区分するというのは、現実的実質が空間的には「ここ」にあることを限定し、時間的には「今」であることを限定することである。こうして、すべての現実的実質はそれぞれが固有の仕方で延長連続体を区分する。

この区分において、現実的実質は延長連続体のうちに自らの「立脚点」(standpoint)を持つ。この立脚点がそれぞれの現実的実質に固有の「今-ここ」なのである。延長連続体を現実的実質が原子化すること、すなわち連続体のうちに「今-ここ」という固有の領域を持つことで、この領域を中心に時空的断面が生まれる。この断面が空間的・時間的領域であり、この断面において延長的性格を備えた領域と領域どうしの延長的関係性について座標的分析が可能となる。すなわち、「今-ここ」という領域を中心に過去・現在・未来という時間的領域が開示され、空間的領域として「ここ」と「そこ」とが示されるのである。

こうして、現実的実質の生成の背景には延長連続体があり、現実的実質の時空的延長関係は延長連続体における根底的な連関に依拠しているのである。直接的関係性を持たないために因果的に独立しており、直接的把握が不可能なのにもかかわらず、同時的世界のうちに現実的諸実質があると言えるのは、延長連続体を基底としているからである。だから、椅子を知覚する場合、われわれが知覚しているのはあくまでそれらの「現れ」としての椅子であるが、椅子として現れるモノは現実的諸実質からなる(われわれと)同時的な結合体として存在している、と言えるのである。椅子としての「現れ」にたいしてそこにあるモノ(同時的な結合体)の存在を保障するのは延長連続体であり、「そこ」を示すことができるのは延長連続体を持つ延長的関係性に依拠してのことなのである。

さて、以上のような延長連続体を基底とする同時的空間において、われわれの同時的世界のパースペクティブ、さらにはこのパースペクティブにおける「ここ」と「そこ」という空間的領域をどのように知覚しているかを明らかにしよう。

現時的直接性の知覚様態は同時的世界についての知覚であり、同時的世界にある現実的実質との空間的關係性がどのようにもたらされるかを説明するのが緊張の場所の議論である。先に結論を言えば、緊張の場所とは、同時的世界（生成する現実的実質に対し、知覚対象として現れうるものの総体）と身体とを結び付ける体系的関係を説明し、幾何学的な空間関係を伴って同時的な現実的実質の「現れ」を感受する場所であると言える。

同時的とは、すでに見たように生成している当の現実的実質と他の現実的実質とに因果的な影響関係がないことを意味する。「今-ここ」としての生成の現場が現在化された場所と呼ばれ、この場に偶然的にある他の現実的実質との関係が同時的と呼ばれている。つまり、同時的世界とは、生成する当の現実的実質が延長連続体から自らのパースペクティブにおいて区分した固有の生成の現場であり、そこに「現れている」のが、同時的世界の他の現実的実質なのである。また、現実的実質が自らの生成の場において、他の同時的な現実的実質との間接的なかわりをえる場所が緊張の場所である。

同時的世界における他の存在者との関係性を説明するのが本来の緊張の場所の議論であるが、本節では緊張の場所を知覚論との関係で説明することを試みる。現実的実質はこの緊張の場所そのものを自らの生成において形成し、この緊張の場所において、前節で見た二つの根本的知覚様態が統合され象徴的関連付けが成立することを見よう。すなわち、「ここ」において感受される連続的に存続する身体（因果的効果の知覚様態）と、感覚与件を手掛かりにして「そこ」に同時的に現れる知覚対象との幾何学的空間関係（現時的直接性の知覚様態）から、象徴的関連付けが成立する現場として緊張の場所を解釈する。まずは、「ここ」と「そこ」を含む現実的実質のパースペクティブがどのように獲得されるかを見よう。

現実的諸実質は、延長連続体を原子化する。この連続体はそれ自体においては、たんに区分のための可能性(potentiality)にすぎず、現実的実質がこの区分をもたらすのである。同時的世界の客体化は、ただ、下位区分のためのその可能性の点から、またそのような下位区分のどれかが実在的な有効性にまでもたらされるような相互的な展望(perspective)の点から、その世界を表現するのである。この相互的な展望は、いかなる現実的実質にとっても、原初的で支配的な与件である。なぜならば、それらは、いかにしてすべての現実的実質が一つの世界の連帯のうちに存在するか、を表現しているからである。時空連続体において以前には可能的であったものは、現実的実質の生成とともに、今や或る現実的なものにおける原初的で実在的な相になっている。[PR67]

現実的実質が延長連続体を原子化することによって、現実的実質の生成は始まる。この原子化は、区分のための可能性にすぎなかった延長連続体のうちに自らの固有の立脚点を区分することだ。そして、それと同時に現実的実質はこの立脚点の区分に対し、自分以外の現実的実質のさらなる下位の区分を可能にするパースペクティブを獲得することでもある。パースペクティブとは、比喩的に言えばこの現実的実質が固有の立脚点を中心に自らの現実世界を展開する視野のようなものだ。

この立脚点と延長連続体の内にある他の現実的実質との織り成す相互的なパースペクティブは、この現実的実質がどのような現実世界のうちにあるかを表現する。そして、このパースペクティブが現実的実質の原初的で支配的な与件だと言われるのは、すべての現実的実質が一つの「この」世界のうちにあるというもっとも根源的事実をこの現実的実質が受容するからだ。パースペクティブの獲得によって、

時空連続体において可能的であったものが、現実的実質の生成において根源的な事実としてプロセスの原初相をなすのである。

このように受容されたパースペクティブのうちにある現実世界は、原初相においては可能的なもの(potentiality)としてある。これらの可能的なものは、プロセスにおいてさらなる区分がなされる。知覚の成立には、身体と知覚対象の区分が必要だ。そして、身体における「ここ」と知覚対象における「そこ」の限定の基底には、幾何学的関係性がある。

したがって、真直な平坦な場所に関する幾何学的な諸事実は、現実的諸実質の感受を特徴づけている公的事実(public facts)なのである。……与件において例証される諸形式がそこにおいては幾何学的な真直な平坦な場所に関係しているところの感受は、「緊張」(strain)と呼ばれよう。緊張においては、幾何学的諸形式以外の質的諸要素は、これらの諸形式に含意された諸性質として表現される。またその諸形式は、当の物的感受の客体的与件を形成している個々の結合体において構成要素となっている諸形式なのである。[PR310]

点や直線や平面、三次元的空間といった幾何学的な事実¹⁴は、現実的実質が他の現実的諸実質と関わり合うさいの公的な事実だと言われる。緊張の場所では、開かれたパースペクティブのうちにある現実的諸実質の幾何学的諸形式が重要な要素として引き上げられる[PR310]。すなわち、このパースペクティブのうちにある現実的諸実質が、「諸性質と一定の幾何学的諸関係の緊密な連合によって特徴づけられる」[PR310]のである。こうして、三次元空間にある「ここ」や「そこ」という幾何学化された領域が「緊張の場所」において経験にもたらされる。以上のような幾何学的諸形式は、複合的な永遠的客体としてプロセスに寄与する。「ここ」や「そこ」がどのように区分されるか見よう。

パースペクティブのうちにあるものは、延長連続体からこのパースペクティブのうちにあるものとして区分された可能的なものである他の現実的諸実質である。それらの現実的諸実質のいずれかを自らの「身体」として限定し、因果的効果の知覚様態(身体的効果)によって自らが存続していくための決定因子(=複合的な永遠的客体、「眼」や「赤さ」など)が必要とされる。そして、身体「でもって」(with)という因果的効果の知覚様態から派生する現前的直接性の知覚様態の対象においても、それがどのような「見え」(あるいは他の五感による感覚)をしているかに対する決定因子として、同じ複合的な永遠的客体が機能する。この複合的な永遠的客体は、「感覚与件」(sense-data)と「幾何学的パターン」(geometrical pattern)に分類される[PR312]。緊張の場所では、この幾何学的パターンが強調される。

このようにして、緊張は、幾何学的意味づけの複合的な配分をもっている。そこには、一定の点の諸集合である場所の限られた集合から成り立っている幾何学的「座」(geometrical seat)が存在する。これらの点は、経験主体の立脚点を限定している容積に属している。[PR310]

緊張の場所において、生成している当の現実的実質は他の現実的諸実質を、幾何学的形式を伴うものとしてとらえる。そのことはまた、この現実的実質が、緊張の場所において、自らを幾何学的な空間の中に位置づけることでもある。そして、まず幾何学的な説明では、限定された点の集合という幾何学的

¹⁴これらの幾何学的な事実は、経験において前提とされている事実ではない。知覚が幾何学的形式をもって成立していると述べることによって、これらの形式が前提とされているという誤解を招く恐れがあるため、ここに注を付す。ホワイトヘッドは、『数学原理』における集合論の新しい手法を用い、「延長的抽象化」という操作によって幾何学における抽象的要素を導出している。延長的抽象化という方法論は、点や線といった幾何学的要素を、延長を持つ実際に知覚される出来事から定義するものである。

パターンによって区分される領域ができる。すなわち、緊張の場所におけるある点の集合という幾何学的パターンの感受によって、同時的な現実的諸実質との幾何学的関係付けを可能にするような、経験主体の中心的な幾何学的「座」(seat)が区分される。この座は具体的には、感覚与件を「ここ」において感じる身体の各部分である[PR311]。この幾何学的パターンは、パースペクティブにおいて可能的なもの、すなわち現実的諸実質である過去の与件から公共の事実としてもたらされる。

身体の各部分は因果的効果の知覚様態によって存続している。順応という関係によって存続してきた過去の現実的諸実質からそれらがたとえば「眼」であるという感覚与件と、座という幾何学化された領域を区分する幾何学的パターンを感受することによって、パースペクティブのうちにある現実的諸実質にたいして「ここ」という座を持つ「眼」という区分がなされる。その結果、眼でものを見る場合、眼という中心的な座を通じて知覚対象との幾何学的なパースペクティブは得られる。手で石をつかむ場合にも、手という中心的な座から、「手の中にある石」という幾何学的パースペクティブを得るのである。こうして、因果的効果の知覚様態からの派生し、幾何学的空間関係を生み出す「ここ」としての中心的な座が緊張の場所において、区分される。そして、緊張の場所では「そこ」も区分される。

さて、この緊張は幾何学化された領域を含んでおり、そしてこの領域はの場合また、それ自身の一部として「焦点的」領域を含んでいる。この「焦点的」領域は、「座」によって定義された直線の稠密な集合の領域である。それはそこにいわゆる「投影」がなされる領域である。[PR312]

緊張の場所は、現前的直接性の知覚様態によって感覚与件の「投影」(projection)がなされる領域も含んでいるという。すなわち、幾何学化された領域の中にさらに、感覚与件の投影がなされる焦点的領域を含んでいるということである。この焦点的領域は、座（これは諸々の点の集合であった）を中心とした直線の集合という幾何学的パターンによって限定された領域として区分される。すなわち、「ここ」である座にたいして、この焦点的領域が「そこ」という領域として区分される。そして、「そこ」の区分にもとづいて、現前的直接性の知覚様態において、感覚与件が「そこ」にある現実的諸実質の性質を限定するものとして、投影される。その結果、感覚与件が投影されることでそれらの現実的諸実質の性質を限定し、知覚対象に関する明確な「見え」となるということである。したがって、この焦点的領域で投影がなされるということは、現前的直接性における知覚様態がこの領域において成立するということである。

こうして緊張の場所は、現前的直接性における知覚様態を可能とする領域を含むのである。焦点的領域は、座との関連において規定される領域である。以上から、身体的効果の知覚様態（座を規定する）と、現前的直接性の知覚様態（投影が行われる焦点的領域として同時的空間を規定する）との結合を、緊張の場所に見出すことができよう。

緊張の場所では、まず身体的効果によって、その座となる知覚する身体の各部分が限定される。それから、その座に基づいて幾何学化された領域内の焦点的領域において、感覚与件の投影により、現前的直接性の知覚様態の対象として、同時的空間にある現実的諸存在についての「見え」（あるいは、「聞こえ」、「触れ」、「味わい」、「におい」等）が現れる。最終的に全体として生成している当の現実的実質と他の現実的諸実質との幾何学的空間関係ならびにこの結合体の性質が把握される。緊張の場所が限定する領域が、我々と知覚対象との幾何学的空間関係の基底をなしている。まとめると、緊張の場所が限定する領域は以下のように言われる。

最終的な現実的実質の「緊張」が限定するのは、この「座」、「焦点的領域」、中間領域、そし

でもっと漠然としてではあるが、「現前化された」空間の全体である。[PR313]

これらの限定された各領域の区分が、生成している現実的実質の延長連続的な関係図式において、知覚という経験の成立する場所の全体だと言えるだろう。身体的効果と現前的直接性における知覚様態のそれぞれの説明も緊張によるこれらの場所の限定との関連において説明することが可能だ。

こうして、身体的効果の感受は、継承される緊張により幾何学的に限定された（先立つ「座」と焦点的領域との）全領域のうちに一般に含意されたものとしての、感覚与件の感受である。[PR313]

現実世界すなわち過去からの順応についての感受として説明されていた因果的効果の知覚様態は、緊張との関連において身体的効果と呼ばれ、緊張の場所において規定される領域内でその役割を果たす感覚与件をもたらす。つまり、因果的効果の知覚様態によって過去の与件を継承することで、過去の与件のうちにある情報を身体的効果としてこのパースペクティブにもたらすということだ。それは、過去の情報を引き継いでこの座を「眼」として区分するということであり、その座から展開される焦点的領域内に投影される感覚与件ももとはこの過去の与件にある。現前的直接性の知覚様態についても以下のように説明される。

現前的直接性の感受は、身体的効果から引き出された概念的感受と、身体的効果の複合的感受における構成要素でもある単なる領域的感じとの統合のゆえに成立することを、我々は見る。（中略）この統合は、身体的効果において構成要素となっている複合的な永遠的客体を、緊張の感じにおいて感じられたある同時的な焦点的領域に創造的に転嫁(imputation)するという形をとる。

[PR316]

身体的効果から引き出された概念的感受は、星雲を見る例で言えば、過去の与件から星雲の色や形、星雲というイメージ等を捉えることである。現前的直接性の知覚様態は、これらの色や形、イメージといった感覚与件を、座（この場合は眼である）から展開される幾何学的領域に位置づける（投影すること）ことで得られる同時的な現実的諸実質についての幾何学的空間関係の把握である。星雲の色や形、イメージを幾何学的パターンと共に焦点的領域に投影することで現前的直接性の知覚は成立する。したがって、以上で言われている転嫁とは、この投影のことである。

身体的効果から派生した感覚与件（永遠的客体）は、焦点的領域に投影されることで、その領域ともども「まるでそこにその効果の感じがあったかのように感じられる」[PR316]と言われるのである。すなわち、過去の与件の情報にもとづいて、同時的世界内における同時的な現実的諸実質が、その星雲の現れとして幾何学的空間にあるものとして捉えられるということである。しかし、その座を有する当の現実的実質と同時的な焦点的領域にある現実的諸実質とは因果的に独立のゆえに、同時的な諸領域には相互的な影響関係はない。それでも同時的世界の把握が可能となるのは、過去の因果的効果の知覚様態にもとづいて派生した、現前的直接性の知覚様態の働きによって感覚与件の投影が行われるからである。

以上のようにもともと因果的効果の知覚様態から派生した感覚与件が、現前的直接性の知覚様態によって同時的な空間内に投影されることでそこにあるものとして感受される事態は、「象徴的転移」(symbolic transference)と呼ばれる[PR317]。因果的効果の知覚様態と現前的直接性の知覚様態を結び付ける作用として象徴的関連付けと呼ばれていたものが、ここでは以上のように言われるのである。したがって、二つの根本的知覚様態の統合として説明されていた象徴的関連付けを、座における知覚主体の知

覚の場所（眼や手など）の成立と、その知覚対象の現れや焦点的領域との幾何学的空間関係の議論と対応させることで緊張の場所を知覚の現場として解釈できるのである。

4-3 緊張の場所と命題

知覚の現場として緊張の場所に、命題（正確には命題的感受）が登場する。

これらの自然的感受の概念的相関物は、感覚与件を緊張によって限定されるさまざまな領域と結びつけながら、多くの概念的感受到に分析されうる。この概念的感受到は、特定の領域に関連することによって、「命題的感受」と呼ばれる第二のタイプに属している。ある下位の命題的感受は、感覚与件を感じ手の「座」と結びつけ、別の下位の命題的感受は、それを感じ手の「焦点的」領域と、またあるものは感じ手の中間的領域と、さらにあるものは、神経連鎖の先行する要素の座と、こうして次々に結びつける。感覚与件と時-空との総体的連関は、同時的であるとともに先立つ特定の領域とのめくるめく多彩な連関に分析することができる。[PR313-314]

緊張の場所において、感覚与件と座、あるいは感覚与件と焦点的領域との結びつきに命題的感受が関与していると述べている上記の引用は、この知覚の現場において命題が与件として感受されていることを示唆する。すなわち、象徴的関連付けが成立するこの緊張の場所において命題が機能を果たしているという主張の論拠となりうる。したがって、緊張の場所における座と各領域との幾何学的空間関係や、それらの領域への感覚与件の投影による性質付与において、命題がどのような機能を果たしているのかを見ていきたい。

まず、感じ手の身体、つまりどこで感じるかを決定する座の限定の仕方と、「そこ」に何をを感じるかという焦点的領域の限定の仕方が、それぞれ命題の構造と合致することを指摘できる。命題は生の与件としての結合体（論理的主語）と永遠的客体（述語的パターン）の統合の産物であった。一方、座と焦点的領域は共に、延長連続体から区分されたこのパースペクティブにおける結合体である。これらの結合体からなる各領域は感覚与件（永遠的客体）と結びつけられ、限定されるのであった。したがって、この結びつきは、命題の構造と合致するのである。すなわち、座や焦点的領域の限定の仕方は、命題と同様の構造を持っていることがわかる。

具体的に考えてみよう。感じ手の座が領域として限定されるのは、過去から継承された生の事実としての結合体にたいして、幾何学的パターンの感受とともに感覚与件の投影によって、眼であれば「眼」の、手であれば「手」という永遠的客体による性質が例化されることで、この結合体がまとめあげられるからである。このことはつまり、「単なるそれ」(bare it)としての結合体が「眼」や「手」という感覚与件（永遠的客体）と統合された命題が「ここ」（幾何学的パターンによって区分される）で成立しているということである。命題の形式で言えば、「それは眼（あるいは手）である」という命題になる。焦点的領域についても同様に、感覚与件の投影により、同時的な結合体である「単なるそれ」は、「石」や「色」や「形」という性質が例化され、「それは石である」等の命題という形式で、「そこ」で感じられるものが何であるかを限定するのである。

こうして、緊張の場所において、まず座と焦点的領域が「何であるか」を規定するために感覚与件を媒介として命題が機能していると解釈できるのである。すなわち、焦点的領域における外的対象の現れと座が、それが何でありうるのか、どのように感じられうるものなのかを規定するための固定因子として命題が機能しているのである。したがって、これは幾何学的形式を有する座や焦点的領域が「何であるか」を命題という「理論」によって解釈しているということである。

また、命題が意識に先立つ経験の発生論的分析の中間相において形成される「現れ」であるということを見ると、命題を現前的直接性の知覚様態における「見え」とも解釈できる。つまり、命題は緊張の場所において現前的直接性の知覚対象として機能しているとも解釈できるのではないだろうか。人間のような高度な有機体においては、現前的直接性の知覚様態が優勢になる。この場合、現前的直接性の知覚様態は以下のような「現れ」になると言われる。

しかし、現前的直接性が優勢であるような高度な事例においては、次の三つのうちの一つの事例が起こる。(i)ある先行する幾組かの感じ手の座と感覚与件との結びつきがもっぱら強調されるか、(ii)最終的な知覚者の焦点的領域と感覚与件との結びつきがもっぱら強調されるか、(iii)先行する感じ手の座ならびに直接的感じ手の焦点的領域と感覚与件との結びつきが、強調される。

[PR314]

(i)では、感じ手の座を限定する感覚与件が強調される。すなわち、眼や手という座そのものに対する感覚が強調されるということだ。たとえば、石を手で掴んでいる場合、「手で」掴んでいるという、(石の感覚よりも)手についての感覚が強く現れてくるということになる。命題の形式で言えば、「それは手である」という形式が強調されることになる。(ii)は、目の前にあるコップを見ている場合に、「目で」見ているという感覚よりも「コップ」や「赤」、「丸み」を「そこ」に感じる感覚が強くなるということになる。命題の形式では、「それはコップ(赤さ、丸い)である」という形式が強調される。(iii)は、胃痛がする場合を例とすることができる。感じ手の座として胃が強調されかつ、同時に焦点的領域としてそこに痛みが感覚が強調される。「それは胃であり、かつ、痛みである」という連言化された命題が強調されることになる。このように、緊張の場所において、命題が現前的直接性の知覚様態の対象として機能していると解釈できるのである。

以上のような現前的直接性の知覚様態による「見え」は、命題の機能として解釈しても妥当なものである。というのも、命題は事実にもとづきつつもその可能的なあり方の一部を強調して提示するものであるからだ。上記の三つの類型は、それぞれが命題として現れてくる知覚対象のあり方の可能性であり、現前的直接性の知覚様態においていずれの感覚与件との結びつきが強調されるかは、命題においてどのような述語的パターンを備えて命題が形成されるかということと構造的に同様の事柄なのである。

緊張の場所において命題の果たす機能はまだある。同時的世界に投影される感覚与件は過去の与件から派生し、現在の同時的存在者のあり方を現在の「現れ」として規定するものであった。一方で、命題の論理的主語をなす結合体は、物的感受によってえられる過去の与件から派生し、この論理的主語にたいして永遠的客体が述語的パターンとして統合され、命題が構成される。この緊張の場所において、命題は過去と現在を結び付けるという意味でも「混成的」(hybrid)な与件と言えないだろうか。

同時的存在者は、この立脚点において固有のパースペクティブを展開する現実的実質とは因果的に独立しており、直接的な関係性を持ちえない。命題においては、不定の实在を「それ」という論理的主語に還元することで、初めて扱うことができるようになる。同様に延長連続体のうちにあるこれらの不定の同時的存在者についての区分も、論理的主語として区分されるということになる。そして、投影される感覚与件がその述語的パターンとして統合される。このとき、過去の与件から派生する感覚与件(述語的パターン)と「それ」としての同時的存在者(論理的主語)が結びつくことで、生成する現実的実質にとっての現在の「現れ」がこの世界に登場するのである。すなわち、命題という形式によって、現在と過去とが関連づけられているのである。座や焦点的領域が「何であるか」を命題という「理論」によって解釈することで、それらの幾何学的空間に何がありうるのかが、あくまで「現れ」とはいえ示さ

れる。これは命題による同時的空間の規定といえる。その一方で、命題は過去と同時的存在者の現在を連関させ、われわれにとっての現在を構成する時間的関連性も担う。以上から過去の与件にもとづきつつ現在を構成する命題は、現在と過去との混成的与件と言えるだろう。

こうして、命題は緊張の場所において、時空の総体的連関に寄与する。そして、これらの連関は命題という形式でさまざまに分析することができるのである。以上のように緊張の場所、すなわち象徴的関連付けが成立する現場において命題が関与していることを明らかにし、象徴的関連付けにおいて命題が機能していることを示した。

しかしながら、実のところ命題が象徴的関連付けにおいて機能していることを示唆するテキスト上の証左は、本節冒頭に挙げた引用部分[PR313-314]以外はない。また、この論考を支持するような、命題を象徴的関連付けにおける一要素として解釈する研究成果も見当たらない。したがって、象徴的関連付けという知覚論のうちに命題との関連を見出すという課題が成功しているかどうかは、疑わしい。そして、仮にこの課題に成功しているとしても、単に命題概念が二つの知覚論の両方に用いられているという、いわゆる状況証拠にしかならず、命題が知覚論に必須の概念だということにはならないだろう。命題が知覚論において重要な役割を果たし、命題なしには知覚論は成立しえないことを示すには、象徴的関連付けでは扱われていないが、知覚論に必須の内容を命題にもとづく知覚論が説明しうることを明らかにするしかない。

4-4 意識的知覚について

絵を見たり、音楽を聴いたりしているとき、われわれはその絵や音楽を意識的に知覚している。美術館で絵を見ているとき、他にもさまざまな知覚与件が与えられているにもかかわらず、その絵のみを意識している。たとえば、レンブラントの絵にある特徴的な明暗の対比の効果や、ドラクロワの絵の色彩の豊かさに圧倒される。しかし、その隣でそれらの絵について講釈を述べている者の声が聞こえていることもあるだろうし、混み合う大勢の人のなかで熱気を感じているかもしれない。

また、音楽を聴く場合には、椅子に座っていたり酒を飲んだりしつつも、ジミ・ヘンドリックスの咆えるようなギター・ソロに酔いしれている。椅子の座り心地の悪さを感じているかもしれないし、安酒の不味さを感じているかもしれない。しかし、そのような他の知覚与件とはかかわらず、ジミのギター・ソロのみを意識している。多様な知覚与件がある中で、われわれはレンブラントとドラクロワの絵や、ジミのギター・ソロを意識的に知覚している。自分が何を意識しているのか、われわれはよく知っている。逆にいうと、われわれの意識的経験は斉一的なあり方をしていないわけではないということだ。以上の例のようにたいいていの場合、われわれは意識的経験のある部分に注意を向けている。

そこにある絵を眼で見ることや、スピーカーから聞こえる音楽を耳で聞くこと、すなわち「そこ」と「ここ」との空間的関係性や、「そこ」や「ここ」にあるものがどのようにわれわれに現れうるかという知覚の内容を説明する点では、象徴的関連付けは有効だ。しかし、どのような知覚内容を意識しているかについて、象徴的関連付けおよび知覚の現場である緊張の場所の議論では扱われない。判明な知覚内容を表す現前的直接性の知覚様態も、それが知覚するところの同時的世界が「感覚与件に飾られた世界」[S14]であることを示すに過ぎない。たしかに象徴的関連付けは、知覚がどのように生じるかを説明することは可能だ。だが、われわれがどのようにして特定の意識的な知覚経験を持つのかを明らかにしない。

どのような知覚を意識しているかという問題は、われわれの経験を説明する上で看過することはできない。なぜなら、われわれは絵を見る、音楽を聴く、野菜を切るといった多種多様な行動のなかで、絵や音楽や野菜を意識的に知覚しているという事実があるからだ。したがって、こうした事実があること

から、われわれがどのようにして特定の意識的な知覚経験を持つのかを説明しなければならない。

以上より、象徴的関連付けにおいて扱われてはいないが、知覚論に必須の内容とは意識的な知覚の問題であると考えられる。現実的実質の生成において、意識は前提とされていない。意識は、プロセスの最終相において生じるとされる。そして「客体与件における一つの要素としての命題を離れては、いかなる意識も存在しない」[PR243]と言われる。つまり、意識の発生には命題が必須の要素なのである。したがって、ホワイトヘッドの体系における、命題を要件とした意識の発生論を見よう。

むしろ、われわれが持つ意識経験の内容には知覚以外にもさまざまなものがある。たとえば、怒りや悲しみといった感情、「明日は8時には家を出なければならない」といった意識的な思考、三角形や円など純粋な幾何学的図形からグリフォンやペガサスといった架空の生物にいたるまで多様にあるイメージ、昨日食べた夕食についてなどの記憶の想起などがある。さらには、「自分が今、皿の上にあるトマトを見ていることを、知っている」という自分自身の意識経験について知る自己知といった意識内容もある。しかしながら、本節の目的は特定の意識的な知覚経験はいかにして生じるかを明らかにすることであり、この問題のみを扱うことにしたい。

先に述べたように、われわれの意識経験は斉一的なあり方をしていない。意識経験の中には、特定の注意をむけられる部分とその背景に退く部分とがある。ホワイトヘッドも意識について以下のように述べる。

意識は、明滅する。最も輝いている時でさえ、鮮やかに照らしだされた小さな焦点的領域と、ぼんやりとわかる程度の経験を物語っている経験の大きな半影的領域とが存在する。明晰な意識の単純性というものは、完全な経験の複合性の尺度などでは決してないのである。またわれわれの経験のこの性格は、意識とは偶然にしか到達されない経験の頂点(the crown of experience)であって、経験にとって必要な土台ではない、ということを示唆している。[PR267]

どれほど集中して本を読んだり、音楽を聴いたりしていても、他の知覚経験が消失しているわけではない。本の文章に注意を集中させている場合でも、本を持つ手の感じや文字を追う眼の疲れがぼんやりと感じられているかもしれない。つまり、意識には明確に意識される特定の部分と曖昧模糊としている部分があるということだ。

また、たとえば、わたしが空腹を感じたときに、わたしは「プリンでも食べるか」と意識的に考え、プリンが入っている冷蔵庫へと向かう。このとき、「プリンでも食べるか」という思考は内語として意識されるが、わたしの意識的な思考と行動のあいだには、意識には上らないさまざまな無意識的な判断が関与していると考えられる。たとえば、「プリンは冷蔵庫に入っている」という事実に対する肯定的判断を持っていなければ、上の意識的思考が生じたとしても、わたしは冷蔵庫に向かわないだろう。しかしながら、「プリンは冷蔵庫に入っている」、「冷蔵庫はキッチンにある」、「キッチンは浴室の隣だ」といった肯定的判断を一々意識してはいない。さらには、空腹感も強烈な飢餓感などとは違って、「空腹である」という思考すら浮かばずにただぼんやりと感じられるものかもしれない。

日常的な経験にそくして考えてみても、われわれの経験はすべてが常に判明な意識状態をもって現れているものではないことがわかる。そして、意識における判明な部分のみでは、経験がさまざまな要素からなるという複合性の尺度にはならないのである。したがって、ホワイトヘッドは「意識が経験を前提としているのであって、経験が意識を前提しているのではない」[PR53]と主張する。それならば、さまざまな経験のうちどのような経験が意識的なものになるのだろうか。そして、どのようにして特定の意識的な知覚経験は生じるのか。これらの問いに答えるために、まずは、ホワイトヘッドが意識の発生

をどのように説明しているのかを確認しよう。

第1章において見たように、命題は頑強な事実である現実世界から派生し、現実世界の事物についてそのあり方の可能性を提示する。一つの経験主体の成立を目指すプロセスの生成は、すでに決着を見た過去の頑強な現実世界の受容から始まる。この現実世界は、単に経験主体にとっての外界のみについて言うのではない。現実世界には自らの身体そのものや、以前の心的状態等の情緒的なものも含まれるからだ。そして、命題によって、現実世界の分節化の可能性（世界のあり方の可能性を分節化すると言ってもよい）が提示される。

繰り返すが、現実世界にはわれわれの過去の身体や心的状態も含まれる。したがって、命題による世界のあり方の分節化には、われわれの五感による知覚経験、あるいは痛みや疲労といった身体内部の感覚経験、感情の経験、非実在的な対象についてのイメージ経験、記憶の想起、思考内容なども含まれる。このような意味で、命題はすべて現実世界のあり方を表すものだと言える。こうした内容を持つ命題がどのように扱われるかが、プロセスにおけるより高次の諸相で決定される。提示された命題が経験主体を目指す現実的実質にとってどのような意義を持つものかを決定するために、命題は、命題（の論理的主体）がそこから派生してくる頑強なる事実としての結合体と「コントラスト化」(contrast)されることになる。このコントラストが、「類的コントラスト」(generic contrast)[PR266]と呼ばれる。

このコントラストは、「肯定-否定のコントラスト」と呼ばれていたものである。それは、物的感受における客体化された事実の肯定と、命題の感受におけるこうした肯定の否定であるところの、単なる可能性との間の、対照である。またそれは、この現実世界における独特な諸事例に関する「実のところ」と「あるかもしれない」との間の対照である。この対照の感受の主体的形式が、意識なのである。このように、経験において、意識は、知的感受のゆえに、またこれらの感受の多様性と強度に比例して、生じるのである。[PR267]

物的感受によって経験された現実世界は、何ものによっても改変されることのない過去の頑強なる事実であり、それはまた何らの概念的分析を加えられていないいわば生の事実であった。物的感受によって、過去は肯定された事実としてプロセスに受容される。一方で、生の事実から派生する命題は、それらの事実にたいしてあくまで現実世界の「現れ」となりうる可能性でしかない。すなわち、命題はあくまで可能性でしかなく、事実ではない。したがって、可能性としての命題はこの意味で事実にたいする否定と言われている。以上のような生の事実と命題の二つの要素が、「肯定-否定のコントラスト」として統一されるのである。さらに、ホワイトヘッドは二つの要素がコントラストとして統一されることに、現実的実質における意識の発生を見るのである。

第2章2-3において、この類的コントラストにおいて命題が生^{ナマ}の事実を解釈するための「理論」として機能していることを示した。われわれの知覚経験は、生^{ナマ}の事実が「理論」としての命題によって解釈されることで、すなわち「理論」を^{ナマ}負荷されることで成立するのである。しかし、この知覚が意識的な知覚経験である要件はなんであろうか。

意識的な気づき[awareness]において、事実のうちにあるプロセスとしての現実態[actuality]は、この現実態が何であるか、また何でありえないか、あるいはこの現実態が何でないか、またそれが何でありうるのかを例示する諸々の可能性と統合されている。別の言い方をすれば、限定性、肯定、否定と関連することのない意識は存在しない。[PR243]

ここで言われている可能性とは、この可能性が現実態についての可能性を例示するといわれていることから、命題のことだと解釈できる。ホワイトヘッドは、意識的な気づきが生じるときには、プロセスにおいて生の事実と命題が提示する諸々の可能性との統合があるという。たとえば、トマトが赤いことを知覚する（意識的に気がつく）場合には、「それはトマトである」や「それは赤い」という命題が形成される。これらの命題は、生の事実のうちにあった要素（トマトや赤さの永遠的客体）を述語的パターンとして成立している。この場合、「事実ではない可能性でしかないもの」（命題=否定）が事実という肯定にたいしてコントラストをなしている。このコントラストは、事実と可能性とが作る肯定-否定のコントラストである。

しかし、上記の引用からもう一つ肯定と否定の意味があることがわかる。このプロセスとしての現実態が経験するものが「何であるか、また何でありえないか」、あるいは「それが何でないか、それが何でありうるのか」を例示する肯定的命題と否定的命題があるということである。すなわち、命題どうしの肯定-否定コントラストがあるということだ。「それはトマトである」や「それは赤い」という肯定的命題にたいして、否定的命題とは、「それはトマトではない」=「それはリンゴである」、「それはミカンである」、「それはパプリカである」や、「それは赤ではない」=「それは緑である」、「それは黄色である」、「それは青である」といった命題である。「それはトマトである」や「それは赤い」という肯定的命題が「理論」として機能し、「トマトは赤い」という知覚経験に帰結するにしても、この知覚経験はこの肯定的命題によってのみ成立しているわけではない。なぜなら、事物の解釈は多義的であり、さまざまな解釈の可能性を備えているからだ。光の加減によっては、トマトの色は、黄色や緑にも見えるだろうし、暗い部屋のなかではトマトは色すら見えることはなく、触れることでそれがトマトであることを確かめることができることもある。また、遠くからそれを眺めたら、それはトマトではなくパプリカやリンゴに見えることもあるかもしれない。

したがって、ホワイトヘッドがここで言っているのは、事物にはそれを限定するような明確な境界線のようなものはなく、あらゆる存在者と関係づけられることで、この存在者が特有の状況の中で意味づけられるということだ。そして、「それはトマトである」や「それは赤い」という肯定的命題の背景をなすような、無数の解釈の可能性を肯定的命題に対する否定として備えていなければ、われわれ各自が固有に持つ意識は存在しないということである。以上より、意識の発生には、「理論」としての命題による限定性、そして、肯定、否定のコントラストが必要だと言われるのである。

そして、意識の特徴としてホワイトヘッドが特に重視するのは、意識が事実にたいする否定的内容を持つことができる点である。

意識的知覚の一般的事例は、否定的知覚すなわち「この石を灰色ではないものとして知覚すること」である。そのとき「灰色」は、残された選択を例示しながら、概念的新しさの完全な性格において、進入している。「この石を灰色として知覚する」肯定的な事例では、灰色は、その可能的新しさの性格において進入しているが、事実上は、盲目的に感じられた与件の灰色を強調するその順応によって進入しているのである。意識というものは、否定の感受なのである。「石を灰色として」知覚することにおいては、否定についての感受は、全くの胚芽の状態にある。しかし、「石を灰色ではないものとして」知覚することにおいては、そのような（論者注：否定の）感受は、全面的に展開されている。こうして、否定的知覚は意識の勝利なのである。最終的には、それは自由な想像力という頂点にまで高まる。[PR161]

この石が実際に灰色であり、この石を灰色であると知覚する場合には、「それは石である」と「それ

は灰色である」という命題が形成されるだろう。過去としての生の事実のうちにある「石」や「灰色」という永遠的客体は概念的感受によって見出され、この知覚経験に寄与する新しい命題の述語的パターンとしてのこの知覚的経験に介入している。しかし、実際には過去にあった要素をそのまま順応という関係性において受容しているにすぎない。この石を灰色として知覚する場合には、「それは灰色ではない」という否定的命題はこの知覚経験に寄与することはない。この否定的命題は生の事実の解釈をするための「理論」として用いられず、その結果意識に上ることはなく、胚芽の状態にあると言えるだろう。

一方で、この石が実際には灰色以外の色をしているとして（赤でも青でも黒でもよい）、「それは赤である」、「それは青である」というような命題を形成するのではなく、「それは灰色ではない」という否定的命題を形成する場合がある。この場合、実際の色にたいしてこの命題の述語的パターンにおいて機能している灰色は、他の選択肢としての永遠的客体との関係（赤や青や黒）を例示しながら、生の事実のうちにあったこれらの他の選択肢とは異なり、この事実のうちになかったという意味で、まったく新しい要素としてこの知覚経験に介入している。こうした述語的パターンを持つ否定的命題が、「理論」として用いられ生の事実を解釈した場合、「灰色ではないものとしての知覚」が成立し、ここにおいて「それは灰色ではない」という否定が意識としてこの世界に登場する。

否定は、われわれの現実世界にそれ自体として事物のように存在しない。この現実世界にあるのは事実だけである。本や鉛筆や富士山といった外界にある事物、走ること、笑うことといった様々な活動、怒りや喜びといった感情、素粒子や電子といった物理的概念等にいたるまで現にあるものだけが存在する。「～でない」という否定は、現実世界には存在しない。しかし、これらの事物にたいするあらゆる否定は、すべて意識において生じる。本ではない、走らない、悲しみが無い、素粒子ではない…というように、すべての否定は、現実世界にある事物と関係するが、命題によって提示され、すべて意識として現れるのである。したがって、否定的知覚が意識の勝利だと言われるのである。すなわち、否定は意識においてしか現れえないのだ。そして、この否定は、「事実は～であるが、もし～ではないならば」という想像にまで到達すると言われるのである。こうして、ホワイトヘッドは意識の特徴を、意識において否定が現れうることに見出すのである。

しかしながら、こうした否定を含む知覚構造をわれわれが有しているにしても、すべての知覚経験が意識に上るわけではないことを日常的な経験からわれわれは知っている。たとえば、音楽が流れている部屋で椅子に座って本を読んでいるとき、わたしは、音楽に注意を向けることも、本の文章に注意を向けることもできる。しかし、一方の行為に集中すれば、他方の行為の知覚経験は意識から退く。それでは、どのような類的コントラストが現実世界の「現象」として意識的知覚経験となるのだろうか。プロセスにおける経験要素が意識へと上る条件は何だろうか。ホワイトヘッドの言葉をみてみよう。

そのコントラスト（論者注：類的コントラストの意）が経験内で微弱な要素であるとき、意識は、そこでは潜在的な能力として胚芽の内にあるにすぎない。このコントラストが際立ち優性であるかぎり、契機は発展した意識を含んでいる。意識が照らし出す経験の部分は、ある選択されたものにすぎない。こうして意識は注意の一樣態なのである。それは、極端に選択された強調を提供する。[AI270]

上記の引用から分かるように、類的コントラストの強弱が意識の有無の基準となるようだ。そのコントラストが強度のあるものである場合、プロセスにおいて意識が生じると言われている。不定の現実世界から抽象された命題とそれにもとづいて発生する現象は、現実世界全体から見ればごくわずかな部分でしかない。それは、プロセスが目指す主体によって選択されたものにすぎないのだ。したがって、意

意識は、現実世界のどの部分に注意を向けるのかという意識以前の選択の結果なのである。一つの知覚経験の成立において、さまざまな命題が形成されるだろう。生の事実から引き出されうるかぎりの述語的パターンによって、現象しうるものの可能性が命題として提示される。これらの命題のいずれかが生の事実と統一され、類的コントラストが生じる。どの命題をコントラストに置くかは、この命題を感受する現実的実質がいかなる経験の成立を目指しているのかという「主体的志向」(subjective aim)による。したがって、意識的知覚の発生以前には、どの命題を知覚経験の成立に寄与させるのかに関する命題の選択があるということになる。そして、現実的実質が何らかの命題を選択したとしても、この結果できる類的コントラストがプロセスにおいて微弱な要素であれば、この現象は意識には上らない。では、コントラストの強弱は、何を基準として判断されるだろうか。この問いは、次のように言い換えられる。すなわち、プロセスが目指す主体は、現実世界の何に注意を向けるべきだろうか。

ホワイトヘッドによれば、主体を目指すプロセスにおいて志向されているのは、その経験の「強度=内的充実度」[intensity]を増大させることである¹⁵。そして、この強度を高め、増大させるのがコントラストである。経験の強度を高めるとするのは、命題がさまざまな可能性を提示することで、現にある事実にとどまらない多種多様な要素をコントラストという形で統合することである。このコントラストによって経験の「強度=内的充実度」が増し、現実的実質は「新しさ」(novelty)を獲得するのである。したがって、プロセスが目指す主体が、現実世界の何に注意を向けるべきかという先の問いについては、それは新しさであると答えられる。なぜなら、現実的実質は、それまでの世界になかった新しさを生み出すことをその本質とするからだ。したがって、新しさをもたらすような強度を持つコントラストを現実的実質は選択する。このように選択された強度ある経験要素が意識として照らし出されることになる。その結果「トマトを見る」という意識的知覚経験でさえ、そのつど新たな「今-ここ」というこの立脚点とそれが展開するこのパースペクティブにおける同時的存在者の唯一無二の「現れ」として生起するのである。このように特定の意識的知覚経験の生起は、類的コントラストのもたらす経験の強度によって説明することが可能である。

プロセス的宇宙論において、プロセスが目指すものは、新しさの創発である。こうして、多は一となり、その一が新たに多へ増し加わっていく。世界は刻一刻と留まることなく変化に満ち、流れ去っていく。これは無数のプロセスが相互に相対的な新しさを生み出しているからだ。こうした世界において、留まり、停滞することはその有機体の死を意味する。自らも新しさを生み出しつつ、新しさに応答していく世界がプロセス的宇宙論の世界だ。ここにおいて、意識は、さまざまなコントラストから自らの生存にとって有用なものや美的なもののコントラストを新しさとして強調し選択することで、現実世界を判明に分節化した結果なのである。したがって、意識における強調は、そのプロセスが目指す主体の生命に有用な力点が置かれることになる。意識とは、過去にあった新しさを受容し、その新しさに応答して、またさらなる新しさをもたらすプロセスの成果と言えよう。

以上のように、特定の意識的知覚の発生は命題によって、類的コントラストの感受として説明することができる。そして、類的コントラストをなす一方の要素が命題であることから、命題が知覚論に必須の概念であると言えるだろう。

¹⁵板橋は西田幾多郎の言う「永遠の今」とホワイトヘッドの語る現実的実質が実現する新しさの「強度(intensity)」とを比較検討し、個体の経験の比類なさを論じている。現実的実質の持つ「強度」をプロセスの内的充実度と解釈する点については、板橋の以下の論考に負っている。板橋勇仁「比類なきものの強度 西田幾多郎とホワイトヘッドの思索を手引きとして「かけがえなさ」をめぐる倫理へ」日本ホワイトヘッド・プロセス学会編『プロセス思想』第10号、2002年、pp.66-89。

結論にかえて一残された課題

象徴的関連付けと命題にもとづく知覚論は、それぞれの仕方で知覚経験の成り立ちを説明しうる。そこで、本稿は二つの知覚論の比較検討を行い、二つの知覚論の関係性を検討した。緊張の場所を知覚の成立する現場として解釈することによって、象徴的関連付けが、知覚における「ここ」と「そこ」の成立を説明しうることを明らかにした。すなわち、目でそこにあるリングを見るというような知覚経験は、象徴的関連付けによって説明しうる。しかし、特定の意識的知覚経験がいかんして生じるかを象徴的関連付けでは説明できない。したがって、ホワイトヘッドが語る意識について検討し、命題にもとづく知覚論に、特定の意識的知覚経験がどのように生じるかという説明を担わせることにした。知覚論についての本稿のあらまきは以上である。

本稿は命題を知覚論の文脈におくことで、その役割を明らかにしようと試みた。そのなかで、命題を知覚論に組み込む利点をいくつか示唆できたように思う。たとえば、①命題を「理論」として解釈することで、われわれが事物をどのように知覚しているかを説明しうること、②命題が提示する事物の経験の仕方の可能性が、象徴的関連付けが示唆する知覚経験の内容よりも、多様な知覚経験を説明しうること、③命題から派生する類的コントラストによって、特定の意識的知覚経験の発生を説明しうること、などが挙げられる。しかしながら、命題を知覚論の文脈においたことによって、以下のように見えなくなってしまった問題もある。

本稿は、プロセスにおいて知覚経験がいかんが生じるかについては詳細に論じた。しかしながら、われわれの経験は知覚経験に限られない。われわれには、痛みなどの感覚経験、喜怒哀楽といったさまざまな感情の経験、数学の問題を解いているときのような思考の経験、昨日食べた夕食についての記憶の想起という経験、空想上の生き物や図形等のイメージ経験、自分が自分の意識していることを知る自己知の経験などがある。命題は現実世界の事物との関係性から、われわれが何を経験しうるのか、あるいはしえないのかを提示する。したがって、これらの経験についても命題にもとづいて説明できなければならない。しかし、これらの種類の異なる経験がいかんが生じるのか、そしてそれぞれの経験がどのように区別されるのかという問題がある。命題が扱うる問題の射程は、本稿の扱った問題よりも広い。したがって、今後の課題は、上記のような種々の経験がプロセスにおいてどのように生じるのかを命題にもとづいて説明することである。

主要参考文献一覧

ホワイトヘッドの著作

Science and the Modern World, The Free Press, 1967. (『科学と近代世界』上田泰治他訳、松籟社、1981年)

Religion in the Making, Fordham University Press, 1996. (『宗教とその形成』齊藤繁雄訳、松籟社、1986年)

Symbolism —It's Meaning and Effect, Fordham University Press, 1955. (『理性の機能・象徴作用』市井三郎他訳、松籟社、1981年)

Process and Reality; An Essay in Cosmology, Corrected Edition, Ed. by Griffin David Ray and Sherburne Donald W., The Free Press, 1978. (『過程と実在(上)』山本誠作訳、松籟社、1984年。『過程と実在(下)』山本誠作訳、松籟社、1985年)

The Function of Reason, Beacon Press, 1958. (『理性の機能・象徴作用』市井三郎他訳、松籟社、1981年)

Adventures of Ideas, The Free Press, 1967. (『観念の冒険』山本誠作他訳、松籟社、1982年)

Modes of Thought, The Free Press, 1968. (『思考の諸様態』藤川吉美他訳、松籟社、1980年)

その他の参考文献

〈洋書〉

Christian, William A., *An Interpretation of Whitehead's Metaphysics*, New Haven: Yale University Press, 1959.

Cobb, Jr. John B., *A GLOSSARY with Alphabetical Index to Technical Terms in Process and Reality*, P&F Press, 2008.

Ford, Lewis. S., *The Emergence of Whitehead's Metaphysics*, SUNY Press, 1980.

Ford, Lewis. S. & Kline, George L.(eds.), *Explorations in Whitehead's Philosophy*, New York Fordham University Press, 1983.

Hosinski, Thomas E., *Stubborn Fact and Creative Advance : An Introduction to the Metaphysics of Alfred North Whitehead*, Lanham, Md., Rowman & Littlefield, 1993

Kraus, Elizabeth M., *The Metaphysics of Experience: A Companion to Whitehead's Process and Reality*, Fordham University Press, 1998.

Kunz, Paul Grimley, *Alfred North Whitehead*, Boston, Twayne Publishers, 1984. (『ホワイトヘッド—秩序への冒険』一ノ瀬正樹訳、紀伊国屋書店、1991年)

Lowe, Victor, *Understanding Whitehead*, The Johns Hopkins University Press, 1962. (『ホワイトヘッドへの招待』大出晃・田中見太郎共訳、松籟社、1982年)

Neville, Robert C., *Creativity and God: A Challenge to Process Theology*, State University of New York Press 1995.

Nobo, Jorge Luis, *Whitehead's Metaphysics of Extension and Solidarity*, Albany: State University of New York Press, 1986.

Ross, Stephen David, *Perspective in Whitehead's Metaphysics*, Albany: State University of New York Press 1983.

Shaviro, Steven, *Without Criteria: Kant, Whitehead, Deleuze, and Aesthetics*, The MIT Press, 2009.

Sherburne, Donald W., *A Key to Whitehead's Process and Reality*, University Of Chicago Press, 1981. (『『過程と実在』への鍵』松延 慶二、平田 一郎訳、晃洋書房、1994年)

〈和書〉

- アール・コニー、セオドア・サイダー著、小山虎訳：『形而上学レッスン 存在・時間・自由をめぐる哲学ガイド』春秋社、2009年
- 荒川善廣：『生成と場所：ホワイトヘッド哲学研究』行路社、2001年
- 市井三郎：『ホワイトヘッドの哲学』第三文明社レグルス文庫、1980年
- 遠藤弘：『プロセス思想研究——ホワイトヘッド・プロセス思想の現代的課題——』南窓社、1999年
- 大森荘蔵：『物と心』ちくま学芸文庫、2015年
- クリストフ・コッホ著、土谷尚嗣、小畑史哉訳：『意識をめぐる冒険』岩波書店、2014年
- 郷義孝：『ホワイトヘッドの有機体の思想—自然と歴史の統一理論』晃洋書房、1998年
- 鈴木貴之：『ぼくらが原子の集まりならなぜ痛みや悲しみを感じるのだろうか 意識のハードプロブレムに挑む』勁草書房、2015年
- 田中裕：『ホワイトヘッド 有機体の哲学』講談社、1998年
- 中村昇：『ホワイトヘッドの哲学』講談社選書メチエ、2007年
- ブライアン・グリーン著、林一、林大訳：『エレガントな宇宙 超ひも理論がすべてを解明する』草思社、2001年
- ブライアン・グリーン著、青木薫訳：『宇宙を織りなすもの 時間と空間の正体』（上・下）草思社、2009年
- マルチェッロ・マッスィミーニ、ジュリオ・トノーニ著、花本知子訳：『意識はいつ生まれるのか—脳の謎に挑む統合情報理論』亜紀書房、2015年
- マンジット・クマール著、青木薫訳：『量子革命—アインシュタインとボーア、偉大なる頭脳の激突』、新潮社、2013年
- 山本誠作：『ホワイトヘッドの宗教哲学』行路社、1977年
- 山本誠作：『ホワイトヘッド『過程と実在』—生命の躍動的前進を描く「有機体の哲学」—』晃洋書房、2011年
- ロバート・クルツバン著、高橋洋訳：『だれもが偽善者になる本当の理由』柏書房、2014年
- W.V.O.クワイン著、飯田隆訳：『論理的観点から—論理と哲学をめぐる九章』勁草書房、1992年

〈論文〉

- Bracken, S.J., Joseph A., “The Objective Reality of the Past: Some Further Reflections” , *Process Studies* 38.1, 2009.pp.108-118.
- Dickson, Eric, “Cassirer, Whitehead, and Bergson: Explaining the Development of the Symbol” , *Process Studies* 32.1, 2003.pp.79-93.
- Ford, Lewis S., “Whatever Happened to ‘Efficient Causation’ ?” , *Process Studies* 34.1, 2005.pp.117-131.
- Greenman, Martin A., “A Whiteheadian Analysis of Propositions and Facts” , *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol13, No.4, 1953.pp.477-486.
- Hildebrand, David L., “Kimball on Whitehead and Perception” , *Process Studies* 22.1, 1993.pp.13-20.
- Kimball, Robert H., “The Incoherence of Whitehead’s Theory of Perception” , *Process Studies* 9.3-4, 1979.pp.94-104.
- Kimball, Robert H., “Error in Causal Efficacy” , *Process Studies* 28.1-2, 1999.pp.56-67.
- Longo, John W., “Whitehead’s Category of Contrasts” , *Process Studies* 32.1, 2003.pp.37-61.

齋藤暢人「ホワイトヘッドの命題論」日本ホワイトヘッド・プロセス学会編『プロセス思想』第10号、2002年、pp.112-113。

石田正人「ホワイトヘッドの象徴理論—C・S・ルースとの比較から—」『理想』第693号、2014年、pp.55-68。

板橋勇仁「比類なきものの強度 西田幾多郎とホワイトヘッドの思索を手引きとして「かけがえなさ」をめぐる倫理へ」日本ホワイトヘッド・プロセス学会編『プロセス思想』第10号、2002年、pp.66-89。

守永直幹「ホワイトヘッドの象徴システム論」『理想』第693号、2014年、pp.82-95。